

中間にて締結せらるるか否かは、この五組のもの、人格的特質に繋がりて存せり、かくの如くして賣買者相互が多少に拘らず利潤を得べき市場価格にて出来得る限り多数の取引締結が行はるゝ間は折價は恐らく持續すべし、「ボエームバウエル」結論して曰、賣買者相互の競争ある場合に市場価格は一定限度内に動搖し、即ちその極大は交換せんとする最後の購買者及び最も交換能力ありて而かも排斥せられたる販賣競争者の評價に依りて限定せられ、その極小は最も交換能力なくして而かも尙ほ交換する所の販賣者及び最も交換能力に富みて而かも交換より拒斥せられたる購買競争者の評價に依りて限定せらるゝと、賣買者相互の主觀的評價は、なるべく大利潤を期待せる相互的折價の組織に依り遂に或る點に達し、さてこの歸着點は統一的市場価値として市場取引者全體に對し有效に行はれ、一切の取引締結を支配し、而してこの高相場を仕拂はんと欲せざる購買者並にこの低相場にて商品を引渡さんことを欲せざる販賣者を取引より拒斥す、市場価値は賣買者相互の主觀的願望及び評價の復合結果なり、然れども決して二者の數量的平均にあらざるなり、拒斥せられたる賣買希望者の員數は毫

も影響を及ぼすものにあらず、例へば二百十乃至二百十五グレンの代りに二百五十乃至三百グレンを願望せる販賣者尙ほ五十人あり、又僅かに百乃至二百グレンをその馬に對して仕拂はんと欲する購買者の多數が市場に現はれ來るが如きことあらんとも、これ恐らく市場価値に影響を及ぼさざるべし。  
 (ハ)此の如き假說的數量事例が無限に複雑せる市場現象を勝けて説明すること能はざるは則ち然りと雖も、尙ほこれに依りて次の事實は正當に明解せられたるが如し、即ち詳言すれば通則として賣買者相互の間に於ける主觀的評價の齟齬は以て新たに市場価値を構成せしむるの限界を規定し、而して統一的に市場を支配せる相場は相近邇せる或る平均的主觀的評價(尙ほ若干の他の評價がこれに結合せる場合なきにあらず)に依りて規定せらるること是れなり、「ボエームバウエル」が嘗て「ベルマン」の試みたる同様の企圖を承け今掲げたる事例を基礎として提供する價格(相場)規定原因表も亦大體に於てその當を得、且つ能くこの規定原因を勝り盡せるものと言ふを得べし、價值規定の原因に四あり次の如し。

一、商品(上掲事實にては馬)を求むる願望の數。

二、購買者の側に於ける評價の程度。  
 三、賣買に供せらるゝ商品(馬)の數。  
 四、販賣者の側に於ける評價の程度。  
 然り而して第二項及び第四項の評價は更に分れてそれぞれ二つとなる、馬を購買せんと欲するものは(イ)自ら使用し若しくは更に取引(販賣)せんが爲めの馬の效用と(ロ)相場表示の財即ち貨幣の自己に對する價值とを評價し、馬を販賣せんと欲するものも亦これと等しく自家の目的に對して(イ)馬の價值と(ロ)貨幣の價值とを評價す、第一項は需要の多寡にして第三項は則ち供給の多寡なり、これが詳細なる分析は吾人これを後段に譲るべし、第二項の(ロ)と第四項の(ロ)とは、貨幣の主觀的價值が時を異にし事情を異にし個々人を異にする(富裕なるか貧困なるか等)かに應じて相齟齬するを免かれざるの事實に係れり、第二項の(イ)と第四項の(イ)とにては、ポエームパウルクは限界利用(即ち換言すれば各個人の凡そ財を評價することは、その所有せる當該財の最後部分が尙ほ充足せらるべき最も重要ならざる目的に對して有する效用の程度に準據する)の意味に於ける

主觀的使用價值を理解せり、然れども彼は更に附言して、今日の分業社會に於ては何人と雖もその既に失はれ將に補充せらるべき外套を評價するにその限界利用に準據せずして新生産費を標準となせることを述べ、即ち限界利用に代ふるに代辨價值(Substitutionswert)を以てせり、而して例へば「ボルジヒ」の如きに依れば販賣者はその將に販賣せんとする機關車を評價するに當て、言ふまでもなく、これを販賣せずして所持せば自家の爲め自家取引の爲めに更に將來この機關車が果して幾何の效用を齎らし得べきかに準據せず、これが生産費用を標準としてこれを評價すとなせり、この故に主觀的評價は究竟常に限界利用に支配せらるるてふ主張は、實際上今日の市場に於ては概して撤去せられて、これに代ふるにこれと別途の調達費用及び生産費用、從て在來の客觀的標準及び客觀的價值を以てす。  
 (ニ)「ポエームパウルク」のこの全考察は賣買者が悉く市況に就て完全なる知識を有せるとを前提となす、然れども事實上かくの如き前提は(市況に關する完全なる知識は)賣買者全體に期待せらるべきこと稀有の現象に屬し、極めて屢々僅かに

若干個々人のみにこれを求め得べく、而して殆んど常に賣買者の一方若しくは一群の有する所他方若しくは他群の有する所に優れるの状態なり、然れば則ちこの結果は市況に就て完全なる知識を有せるものが力と巧妙とに優り、取引上に他人よりも大なる利益を占め、その利益の爲めに相場を騰貴せしめ若しくは下落せしめ得ることゝなるべし。

この真相を看却すれば則ち凡そ舊派價值説に接近するもの、即ち在來の抽象的國民經濟學全般に基礎となれる、取引生活上の萬人平等と架空説と撰ぶ所なし、市場現象を研究してこれが原因を若干の主觀的評價に歸するものは、その如何なる種類なるか、それが如何に購買欲及び販賣欲に影響を及ぼすかを没却せり、余は次の如く言はんと欲す、曰、市場現象の眞髓は取引促進性(先きに經濟的競争を論ずるに當て述べたるが如き)及び賣買者の群從て又その群の内に於ける個個人の經濟的權力關係なりと、市場に關する知識及び市場に於ける熟練の程度に従ひ、所得及び資産に應じ、勢力及び權力全般に準じて、一切經濟生活に於けるが如く殊に市場に於ても亦屢々、然り恐らく概して、一方は強者に

して他方は弱者なり、一方は自動的にして指揮し且つ發議し、他方は受動的にして悉く意に満たざる場合にも多くは服従す、既に吾人が別の所にて觀察したるが如く、凡そ價值及び價格(相場)の構成は大部分この關係より支配せらる、市場の理想は恐らく常に同一程度の公正と正直と市場知識と權力とを備ふる同一員數の同等の力(個々人)が相互對立をなすことなるべし、然れば則ち價值の變動は、舊學説が通則として提議せる所、即ち相場の決定は恐らく悉く公正にして妥當なるべく、一切の價值變動は有效なる結果を伴ふべしと主張せる所に符合すべし、然れども事實上個々人權力の相異、並にその營利衝動、狡猾及び正直の差等はこの理想體貌を著しく變更せずんばあらず、これが結果として現はるる價值及び價格は、必然一方を不満足ならしむること一再にあらず、權力の不平等、その價值構成に及ぼす所の事實上及び可能上の影響は以て反覆して賣買者の合同關係を生ぜしめ、社會及び國家を強制して專横なる市場秩序及び競争統制に出でしめ、其他の干渉を敢行せしめずんば止まず、吾人は下の如く言ふも不當ならざるべし、曰、此等の總影響に關する正當なる認識は所謂正統派

國民經濟學に缺如し、而してこれが認識理解は今日吾人をして常に價值論及び一般社會問題に於けるのみならず又爾他各般の經濟問題に於て曩時と別種の結論に立ち至らしむるものなりと、例之商業政策上の關係に於ても亦屢々經濟上の權力不平等及びこれが結果を重要となせるが如し。

三、ここに吾人は上來陳述の結論を次の如く攝要することを得べし、價值に影響を及ぼすものは商品及び貨幣若しくは信用の多寡としての需給にあらざして、精神的の力の總和としての需給これなり、在來の價值は差當り不變傾向を有し、而して精神的の力の總和はこれに對して常に壓迫及び反對壓迫として作用するのみ、一見この力の總和に含蓄せらるゝが如き要素にしてその實何等の作用を及ぼさざるもの多し、事實上作用を及ぼす力の多寡も亦その單純なる計量結果を知ること不可能たり、商品量（即ち供給）と貨幣量（即ち需要）との實際的變動は、その背後に立てる精神的關係及び權力關係が不變狀態なるか若しくは全然類似せる場合にありても、勿論通則として相當に價值を騰貴せしめ若しくは下落せしむべし、然れどもかかる前提が事實に符合するか否かは苟くも吟

味を必要となす、若しこの前提が事實と符合せず、精神的前提、社會制度及び權力關係が變動する場合には、需給量の同一變動も結果に於て極めて種々の價值變動を伴ふことなきにあらず。

供給及び需要の小變動は、よし人間そのものと事情との如何に應じて價值に影響を及ぼすことなきにあらざるも、屢々何等の價值變動を生ぜざることあり、適度の需給變動は反覆して屢々適度の價值變動を伴ふべし、而かもこのこと常に必らずしも然らず、況んや需給量と價值變動と正に反比例すべきに於てをや、商品供給額五プロセントの減少は或は二プロセント、五プロセント、十プロセント或は二十プロセントの價值騰貴を來たすことあり得べし、需給の數量關係は單に價值騰貴及び價值下落の或る極大限を與ふること屢々これあれども、實際上價值の動搖がこの極限に達するか否かは概して疑問なり、供給及び需要に大變動起れる場合には、これが將來價值に及ぼすべき結果は豫想の限りにあらず、シャロテンブルグ市はその地域に何等の變動なくして、人口は千八百六十四年の一萬三千五百人より千八百九十八年には十六萬三千人となれり、從て土地

需要は約一対十三の増加率なり、然るに土地價値は六百萬マルクより約三億マルクとなり、從て一対五十の増加率をなせり、この土地價値は人間そのもの、投機、建築秩序、經濟的權力關係等の如何に應じて、恐らく或は六百萬マルクより一億マルクに増加し得たるべく、若しくは六百萬マルクより四億マルクにも増加し得たるべし。

然れば則ち市場相場が需給の確實量に應じて常に決定せられ、さながらに單純なる算術問題に依て計算することを得べしと信ずる舊マンチェスター派の寫象は、全然架空説と言はざる可らず。

吾人はこれより需給の特殊分析に立ち入らんとするに先ちて、多少の結論と而して交換價値のこの原論の次に置くに至當と認むべき若干の考察とをここに挿入せんとす。

**百七十三**

前節の結論、正當相場及び暴利、需給の變動より生ずる交換價値の動搖は再び供給及び需要に反動を及ぼし、即ち例へば供給制限は相場を騰貴せしめ、相場の騰貴は再び供給を増加せしむるが如し、實に全生産及び商業は相

場の高低より影響を蒙るもの、これが詳細なる點は吾人これを後段に叙述すべし、學者或は屢々而かも正當に相場變動のこの作用を、現今國民經濟の私經濟的利害を基礎となせる組織に固有の轉輸機と認めたり、それは兎に角相場變動の中自ら必要にして現今國民經濟に缺く可らざる且つ大體に於て有效なる力ありて存せり、されば「シユレ」の如きは更に推論を進めて次の如く言へり、曰、凡そ交換價値は社會の總利害に順應し、自由にして利己主義的なる市場交通は社會的に可能なる純粹效用の最大量を確立すと、然れども此の如き主張はよし屢々樂觀主義的個人主義より唱導せらるれども、未だ一般的に認容す可らず、「ポエームバウエルク」と雖も次の如く説示せり、曰、市場交通は個々人の利己主義を動機とし、最大貨幣利潤を目標とするが故に、必らずしも常に社會の總利害に順應せる結果を生ぜずと、彼は一方愛蘭の貧民が馬鈴薯を以て生活せざる可らざるに他方愛蘭産出の小麥は交換能力に富みたる購買者の爲めに輸出せられ、又富裕者が既に「ダース」の贅澤乗馬を所有せるに更に殆んど不必要なる第十三頭の馬を購入し、而かも農民が經濟上に恐らく必要缺くべからざるこの馬を強制

的命令に依りてこれより買収するの事實に顧み、此等富者の利己主義的經濟競争が社會に害惡を齎らすことを斷言せり、而かも彼はかくの如きは寧ろ除外例に屬すと附言し、大體に於て市場交通の結果は社會全般に有利にして、相場の變動狀態と社會的供給關係とは殆んど完全に相順應せりとなす、「ボームバウエル」の言ふ所は現代商品市場交通の多くの場合を大體に於て正當に説明したるものと見做すを得べし、然れどもこれが除外例は例へば貸銀、貸借及び其他の領域の如きに非常に多くこれを認め得べく、從て經濟組織殊に健全に、正直の徳大に行はれ何等の權力濫用これなき場合に、始めて吾人は樂觀的判斷を下すを得べし。

若しそれこれと反對せる樂觀的見解は、自由市場交通に依れる一切の利益壟斷を否認し、苟くも市場に於ける經濟的權力の使用を正當と見做し、公正及び不法の範疇を價值構成及び相場構成の上に全然適用せざらんと欲するものにして、單純明瞭なる精神的事實を看過せり、即ち詳言すれば苟くも價值は爾他一切の社會的事實と等しく、その果して道德的理想に順應し、全體の爲め凡ての

個人人の爲め有效なる結果を生ずべきかの判斷を基礎となせるの事實を忘却せり、この見解は、凡そ不健全なる相場が或る一時的現象にして、常に自ら改善せらるべし、何等憂ふるを用せずと假定し、而かも如何にして然るを得るかに毫も證明を施さず、即ち例へば貸銀の下落は人口を減じ、それが爲めに再び貸銀を騰貴せしむべしと、社會の賤民化と餘りに甚しき低貸銀とが相俟て容易に永久的現象となり得べきことは此の見解の看却せる所なり、この見解は吾人が既に非難したる見地を立脚點とし、即ち苟くも需給量の増減は必然的に一定の價值を伴ひ、この價值は需給量を變ぜざる限り變ずること能はざるべきこと信ずるものなり、精神的及び道德的原因ありてこゝに作用し以て價值に變動を及ぼすことはこの見解の認識せざる所、この見解は價值を以て單に需給量のみ依て變動するものとなす。

價值批判を明瞭ならしめんが爲め、即ち詳言すれば個人的利己主義的見地以外に、價值が如何に常に道德的及び共同經濟的見地より判斷せらるるか、又如何なる實際的結果を伴ふかを明瞭ならしめんが爲めに、尙ほ更に同一財に

對する種々なる價值判斷の可能に關し且つ正當價值及び正當價格（相場）の問題に關し説明するの必要あるが如し。

既に**百七十一**の叙述に依り、同一商品若しくは同一給付に對し同一時に於ける價值判斷の齟齬は、たゞ單に判斷の同じからざるが故のみならず、たとへ同一判斷なるもその追求する所の目的を異にするに應じ、判斷者の立脚點が同じからざるに從て起り得る現象なり、將來をも考慮し、將來起り得べき價值の下落若しくは騰貴をも想像するものは、單に今日のみを考ふるものと比し、その判斷に於て相異なき能はず、同一人より觀るも想像價值は購買價值と異なり、購買價值は收益價值と同じからず、販賣せんと欲する者の判斷は購買せんと欲するもの、判斷と異なれり、單に自己のみを考ふるもの、價值判斷は社會の幸福を願慮するもの、それと同じからざるなり、凡そ經濟運営に當れるもの、腦裡には純主觀的商量と共に又客觀的商量あり、なるべく高價に販賣しなるべく廉價に購買せんとする目論見あると同時に、在來の相場、費用補償の相場、將た又收支相償ひ得るの相場がそれぞれ果して當眼の事情及び爾他の相場に順

應し且つ正當なるか否かの寫象ありて存せり。

是を以てこれを觀れば、一方「アリストテレストス」より「ヘルバルト」及び「トレンデレンブルグ」に至るまでの法理哲學者が、正當なる市場交通を發達せんが爲めに、悉く市場に於ける商品相互間に平等の價值を制定せんとを要求し、他方近世國民經濟學者は則ち賣買者相互が商品及び貨幣の評價に於て平等ならざればこそ概して取引の成立に至るべけれど主張するの矛盾は、こゝに深く説明するの要なかるべし、余謂へくこの二者（哲學者及び國民經濟學者）の主張は、價值判斷の見地を異にしてこれを觀れば、何れも等しく眞理たること可能にして且つ事實なるべし、先きに掲げたる馬匹販賣の事例を觀るに、それが二百二十マルクにて取引せられたりとせば、その場合に甲は馬を乙は二百二十マルクを幾分過重に評價せることを前提となす、然れども兩者（賣買者相互）の二百二十マルクに對する從來の主觀的評價が相接近し、その有せる至當相場の寫象が二百十五マルクと二百二十五マルクとの間に在りたるが故に、兩者は容易に取引を締結するに至れるなり、さてこの結果は賣買相互に對しその馬と二百二十マルクとは

事實上大體に於て平等價值なり、一方の價值は他方の價值の代表者と認めらるることゝなれり、然れども若し販賣者は三百マルクを得んと望み、購買者は僅かに百マルクを仕拂はんと欲し、而して何れもその主觀的評價を以て從來の市場價值、生産費、馬に依り即ちその販賣に依りて得らるべき利潤と矛盾せざるべきを確信する場合には、共にこの取引の爲めに損害を蒙れりと感ぜず、然り而して生活危急の爲めにこの取引を締結せざるを得ざるの境遇に陥り、將たその一方が他方の爲めに權力濫用及びそれにも増したる横暴の犠牲となれる場合には、愈々以てこの感を強うせずんばあらざるなり。

吾人は一般的に次の如く言ふことを得べし、市場價值が在來若しくは正當と感ぜられたる價值より齟齬する程度益々小なれば、市場價值に對する非難の聲愈々少く、然れば則ち國民經濟の過程は順當に進行し、その一切の部分は満足し收支相償ふことを得べし、然れども凡そ急劇に在來の相場と大なる齟齬を生じ、全階級をしてその生計を節減せしむるの變動を來たすは、國民經濟の一部より觀れば攪亂と感ぜられ、相場及び所得を不當に且つ不正に變化するも

のと認めらるべし、則ち然りと雖も亦一方よりこれを觀察すれば、既に久しく持續せる相場關係及び價值關係にして、恐らく從來は差支なく且つ公正と認められたるものも、標準の變動に依り、これと類似せる騰貴を來たせる價值と新たに比較することに依り、生活に對する新要求に依りて、今や不當と感ぜらるゝことなしとせず、かくの如き不當價格の感受不正價值の判斷はこの何れの場合たるを論せず、當該相場が強者の權力及び經濟的優勝力を恣まゝに使用せることゝ關聯し、弱者の危急と愚昧とに乗じたるの結果なるに従て愈々益々強烈を加ふるもの、然れば實にこれ危急相場及び暴利相場將た利益壟斷及び不正と稱せらるべし、かく斷言するは多くの場合にその當を缺けること疑なけれども、亦屢々當然ならざればならず。

論じてこゝに至りて吾人は次の如き一般的問題に遇着せり、曰、概して正當價值及び正當相場なるものありや、若し然りとせばその根源と意義と結果とは何ぞやと。



理に關する一般論及び本譯補の第五冊 **百六十** 及び **百六十一** に於ける自由經濟競爭の制限及び統制に關する一般論を指摘するは、則ち價値現象が大部分單に自然力及び偶發的出來事の結果に過ぎざること、且つその人間の如何ともすべからざる民族の運命より規定せらるゝことを承認するものなり、然れどもこのこと價値構成の一切部分に眞理にあらず、多少の場合に吾人は、相場及びその變動が絶對的若しくは部分的に個々人の意志將た社會の制度より規定せらるることを明確に認識せり、而してその事實なる限り吾人は正當價値を説き若しくは不當價値を論ず。

さて價値構成の事情と原因とのこの二群を區別すべきの標準如何は極めて困難なることを俟たず、損害を蒙りたる者の不興は容易に係争者の無責任を認め、何等可抗的過失なきに非難攻撃の聲を大にし、これと反對に利潤にこれ狂せる傍若無人の實際主義者は等しく不當なる概括論に陥り、自然、偶然將た運命が所謂暴利的相場の原因をなせる場合のみを觀察して、從て一般的に苟くも國民經濟はたゞ數量關係と其結果とのみを問題とし道德的考察は則ち無關係な

りと傲語して顧みず、殊に唯物主義的時代、取引界の貪慾的社會範圍にありては、毫も他人の不幸を顧みることなく苟くも利潤機會を利用するを以て、聰明なるもの巧智なるものの正當權利と認め、加之自由私有財産及び比較的自由的な交通を發達せる社會に於ては、經濟的自由運動を頽廢せざらんと欲せば、或る程度までこの傍若無人の利己主義的行動を忍ばざる可らざる必要あり、然れどもこれと同時に社會及び殊にその上流なるもの高尚なるもの醇化せる感情を有せるものは、苟くも上に掲げたる制限内に人的秩序及び制度に依りて價値及び市場相場が是正せらるべしとの信念を失はざるべし、此點に就て吾人の常に忘る可らざるは、社會的道德的に結合して所得の公正妥當なる秩序を希望し且つ冀求し出來得べくんば實行せんと欲する一定社會範圍に、利潤と損失とを分配し得るが如くに相場を定むることは是れなり、吾人の良心の聲は此の如き秩序が大體に於て發達し若しくは實現せらるべきことを要求せり、如何なる社會群と雖も又如何なる市場社會若しくは爾他の社會と雖も、嘗て不正相場、不正所得分配並にこれが結果を、そが個々人の自由任意に自家權力を行使したるの結

果なればとて、敢て自ら安じ得るものあらざるべし、必らずや道徳上及び法律上に承認すべきの権力行使と承認す可らざるのそれとの間に區別を立てずんば止まざるべく、反覆して道徳上に承認す可らざるものを非難し、法律上に承認す可らざるものを禁止し且つ處罰し、而して法律上に承認す可らざる権力行使の範圍如何を商量すべし。

これが規矩準繩たる感情及び商量は、今この重要任務に際して必らずや小大社會群をその特質、道徳、效績將た過失に應じて價值系列及び價值段階に秩序することに努力し、而して斷案を下して、凡そ名譽、財、懲罰及び不利益は當然この斷定この段階に順應せざる可らずと宣言すべし、かくの如くなれば恐らく小大社會群は何れもその適處を得てその力に相應するの分を享受し、正義は完全に行はれん。

凡そ合理的なるもの公正なる判斷を下すものはこの標的の到底完全に實行す可らざることを明瞭に認識し、その理由として、人間及び人間社會が自然界と財の世界とを決して完全に支配するの力なきこと、系列秩序、財分配、正義に

關する判斷も亦社會の萬人に到底一致を求む可らざること、且つ社會萬人の一致する所若しくはその俊秀なるもの、一致する所のものも亦多くは、常に幼稚なる平均法律行はれ不完全なる制度を骨子となせる社會に實現せらる可らざること、これを反覆陳述せざるはなし、然れども正義の何たるかに就て見解の一致ある限り、又この見解の一致が強固なる一定の確信と平均標準とを樹立するに至らしむる限りは、これを慣習及び法律に依り多少に拘らず實施せんとするの努力に出づべし、而して殖民に際して新たに土地を分配し、勤務及び租税を徵集する場合に於て、市場に於けるよりも多くを期待し得べし、然りと雖も市場にありても又一切の相場構成及びこれが結果に關しても、正義の原理は全然無關係なるべきにあらず。

凡そ如何なる時代にても幾分或る評價と幾分これに伴へる契約條件若しくは事情とは一般に不正將た暴利と認められ、爲めに一定の形式にて *Lesio enormis* (反則的暴利) 若しくは其他の法規に照し訴訟することを得せしめたり、又官廳若しくは組合の制定に繋がる定價に依り公正妥當なる評價をなさしめんことに努

力したるもあり、言ふまでもこの計畫は多くの場合に於て困難なりしかば、非難攻撃せる幾多の事項を法律上には承認せざるを得ざりき、然れども少なくとも非難攻撃の輿論成立し、某々の事項を或は土地暴利、貸貸暴利、家畜擬裝暴利、所謂高利として非難し、而して此の如き社會的判斷は常に或る結果を效せり、かくして實行上の事實は一つの逐次段階をなし、即ち道德的判斷に依り、或る社會範圍に名譽を失墜することに依り、詐偽及び瞞着に關し正當衡量及び正當鑄貨に關し暴利及び利益壟斷の有無に關し相場表及び仕拂方法に關する行政法刑法及び民法上の規定に依り、割引及び貸銀勘定の健全なる習慣に依り、最後に組合及び官廳の相場規定に依りて、以て正當價値の理想、經濟的權力濫用の排斥、弱者の正當なる保護と稱するに足るべき所のものを實現せんとするの計畫を示せり。

廣汎社會範圍に平等なるか若しくは官廳より確定せられたる此等一切の相場を支配せる心理學的道德的及び經濟的考量は、その自由市場に作用せるものと相等しく、而してたゞ強度と爾他混合要素とを異にするのみ、この故に例へば

購買者の仕拂能力に對する顧慮は、凡そ租稅賦課の場合と鐵道切符若しくは劇場切符の秩序の場合とに論なく自明のこと、考へられ、醫師、旅館の主人は屢仕拂能力を標準としてその勘定に等級別を立て、加之屠殺業者及び小商人も亦各自にこれを實行し、而して通常これを等閑視するは、原理上に貧困なる購買者と富裕なる購買者とを平等視せんと欲するよりは、寧ろ相場の平等より起れる止むを得ざるの結果なり、何となれば小賣商人の如きは顧客の所得を調査すべき時と能力とを有せざればなり、それは兎に角凡そ相場に關する社會的商議に當りては、吾人の後節に論及すべきが如く、生産費、適度の利潤、取引の盛衰に及ぼす相場の反動を問題とし、貸銀及び俸給を主題とし、これを基礎となせる生計と生活の改善及び惡變とを問題とし、類似の社會範圍と比較するを重要となす、要之、なるべく多くを得んとする販賣者の利己主義的目論見と英蘭裁判權が私設鐵道賃率の爲めに近時益々猛烈に要求したる所即ち換言すれば正當に合理的にして且つ平等なる價格との間に能く中庸適度の評價を確立せしめんとするの計畫は、自由市場に於て寧ろ看却せられ、かくの如き社會的商議

に寧ろ熱心に攻究せらる。

則ち然りと雖も凡そ如何なる時代にありても價値の事實と公正妥當なる相場に關し將た市場に於て且つあらゆる評價に際して行はるゝ不正なる權力濫用の制限に關する道德的判斷との間に因縁的關係ありて存せり、これに關せる規定の連鎖は、古代の法定利率より以て最近時代の高利制限法に及び、舊定價秩序より以て生活を維持し得べき極小賃銀を失はざらんとし且つカルテルの獨占的暴利相場を制せんとするの現今競争に及び、最古の市場秩序より以て最近時の取引所法に及び、時としては餘りに拙策を弄し、需給の現狀を注意する事なくして屢々高價格若しくは低價格を強制したることあり、かくの如き干渉が屢屢その功を奏せざりし事は疑なし、然れども亦若干の競争統制は、屢々以て需給の多寡そのものに社會の總利害を立脚點として變化を及ぼし、更にこれにも増して屢々需給を利己主義的に増減せしむべき手段たる壓迫事情及び權力關係に對し變化を及ぼすに十分なるものありき、然り而してこれに依りて大なる道德的濫用減ぜられ、市場價値が社會の總利害に顧みてあらま欲しき理想的價値

に關する正當なる道德觀に接近し得らるる限り、苟くもこの干渉の正當なる理由ありき。

「トレンデレンブルグ」曰、個々人の願望が道德的人格の眞の欲望と一致し即ち換言すれば凡そ個々人が完全なる限りは、市場の實際相場は道德的價値と一致し若しくは近遜することを得べし、然らざれば則ち國民經濟上の評價は不正に陥り易し、この不定的詐偽的市場價値に對し、社會全體を立脚點となせる政治的及び倫理的評價は是正的原理として抗爭せざる可らずと、彼はこれを以て「アリストテレース」の所謂分配的積極的正義及び是正(消極的)正義を回想せるものなり、分配的正義は效績に準じて個々人に名譽と權力と財とを分配すべく、國家組織、刑法及びこれに等しき領域に支配せざる可らず、是正的正義は單に屢屢交通上の過不及を平均することを得べく、從て分配的正義の目標を比較的狭き限界に實現せざる可らざるもの、少なくとも市場に施行せらるべき必要あり、この施行は前時代の定價規定制度に如何に現はれしか、今日尙ほ幾分吾人が如何にこの方策に復歸せるか、近世交通設備に繋かれる價格及び價値の決定が如

何にこの政策に支配せらるゝかは更にこれを説明せざる可らず、蓋しこれ價值構成の本質より始めて正當に解釋せられべき現象たり。

**百七十四**

過去及び現代の定價制度及び法定價格、吾人若し舊定價制度の起源を理解せんと欲せば、吾人は既に貨幣制度の濫觴を論じたる際に陳述したる所のもの、換言すれば即ち原始的經濟事情にありて財と財との間並に財と貨幣との間に不變的價值割合が成立し、而してこの割合が長期間變化を蒙ることなく維持せられたることを再びこゝに回想せざる可らず、當時市場交通極めて乏しく、交換取引及び賣買取引は多く個々のに行はれ且つ偶然の現象なりき、價值意識は、概して微々として振はざりし市場以外には、先づ罰金及び贖罪金の定額率に於て發達し、即ち個々人は牝牛一匹の代りに羊四匹若しくは貨幣一ソリドゥスを仕拂ふも不可なく、次に領地經濟の貢納に於て發達し、即ち貨幣並に自然物を交互に代用貢納することを得、最後に軍隊及び官僚を給養せんが爲めの國法的負擔に於て發達し、即ち始めこの負擔は無償的の一方的義務なりしが次で一定の貨幣率を以て貢納自然物に對し代價を得るに至れり、かくの如くして

數十年屢々數百年に亘りて價值定率を確立せしめ、この價值定率は凡そ個人の主觀的評價並に時々市況及び個々の生産費と齟齬したり、未だ著しく分化を來たざる社會人は、均等體型をなせる或る商品及び給付の品質及び一般的效用を標準として、その不變的平均價值を確定し、よし市場交通増進しその狀況變遷するに伴ひ判斷に於て實際的取引に於て自ら幾多の齟齬を免がれざりしも、尙ほこの確立價值を以て公正にして且つ妥當なるものと認めたり、蓋し舊官廳規定に繋かれる市場定價制度も亦舊時價值寫象のかくの如く不變性を有したりしことに依繋したるが如し。

余は廣く文明國民が市場の發達と共に、最も重要なる普通商品及び給付の小口販賣に對して官廳規定の定價制度を定め、この制度が既に陳述したる群衆心理學的及び經濟的狀態と關聯せることを疑はず、民衆は單純にして未だ著しく分化せざる從て多く相互に代用せらるべかりし商品に對し、既に業に久しく不變的價值を慣用し來れり、當時販賣品は概して自足經濟の剩餘品にして、剩餘品の多寡は敢て生計に大影響なく、強烈なる營利衝動は未だ發達せず、反之貧

民、隣人、共同團體、國王の爲めに剩餘物を貢納すべきの義務は活潑なり、販賣上の暴利は何人も尙ほ不法と認めたるが如し、例へばカロリニング朝の法規の如きは最寄市場の相場より高價にて外商人に販賣することを禁止せり。

吾人の古代の市場法定價に關し知る所多からざる所以は、恐らく吾人の有する傳承が、最も後代の貨幣經濟的營利主義的時代即ち法定價を撤去したる時代より由來せることに在りて存すべし、さて法定價値は中世初葉より第十八世紀に及ぶまで極めて廣く行はれたるが故に、余はこの法定價値が古代市場制度の一要素なりしなるべきを信ぜんと欲す、皇帝、*デオクレティアン*の制定に繋れる有名なる法定相場は、數百年間商品及び給付に一定價格を規定したるの大制度にして、明かに當時幣制革命の結果なり、*デオクレティアン*は新鑄貨に對して相場を適應せしめんことに努力したり、彼の法定價格制度の發布は恐らく膨脹せる軍隊を維持せんことを目的としたるべし、然れども凡そ此の如き規定は概して法定價値なるものが古來の慣例として既に行はれたる場合に於てのみ想像せられ得べし、其後カロリニング朝の行政並に苟くも後來時代は市場の法定價格を規

定したり、千二百七十六年アウグスブルグの市法は食料品、葡萄酒、麵麩に對する法定價格制定を自明のこと、見做せり、千二百八十一年の制定に繋れる *Constitutio pacis generalis* は、各都市及び各教會區に於て苟くも裁判官はその古老智者及び有徳の士と共に教會にて誓約して、賣買價を規定し、鍛冶匠、織布工、裁縫師等の賃銀を確定すべく、而してこの規定以上を貪れるものは法規の違反としてその都度七十二ペンニゲの罰金を仕拂はざる可らずとなせり、法定價値の撤去せらるゝに及んでも國民は尙ほ反覆してその必要を叫びたり、例へばシギスムント皇帝の遺書と通稱せらるゝ *das populäre Programm* の如きは是れなり、貨幣及び鑄貨の革命の爲めに、例へば千六百二十二年乃至千六百三十年の間に於けるが如く、一般價格關係に混亂を來せる場合には、法定價値秩序は殊に必要にして、多數の商品及び給付に對し廣く制定せられたり、軍隊が自ら軍需品を購入せざる可らざるに至れる場合に於ても亦一般に、法定價格秩序は殊に嚴重となり、その範圍を廣め、爾他の場合よりも一層の注意を拂はれたり、千五百五十八年の獨逸軍隊に對する新秩序に於て然り (*si mercator teutonius carius vendiderit*,

camerarius aufert ei omnia forum suum et verberabit eum) 千六百六十年乃至千七百十三年の間プロイセンに於て、軍隊が貨幣を支給せられこれに依りて自ら市場に軍需品を購入せざる可らざる制度をとりたる場合にも亦然りとす。

然れども此の如き特殊の布告なき場合に於ても、重要な食料品殊に麵麩、肉類及びビールに對する官廳制定の定價は、歐羅巴の大半に亘り營業の自由が實施せらるゝに至るまで幾分はそれ以後に及ぶまで依然として一般に行はれたるり、第十三世紀以來官廳より規定せられ千三百五十一年より第十八世紀に至るまで治安裁判官より規定せられたる英蘭の法定貨銀、並に法定利率は皆正當價値を確立せんとしたる政策の一成分なりき、官廳の規定に繋かる正當價格率の可能と必然とは數百年間一般に信ぜられ、當時市場交通が偶然的且つ拘束的なりしに應じて、愈々以てかく信ぜべきの理由あり、ルテル及びカルヴィン並にゼンケンドルフ及びベッヒェル、ライブニッツ及びトマーゾウス、フリードリッヒ大王及び「プヒテ」は共に法定價格の必要を唱へたり、國民經濟の個人主義的自然法説に至りて始めてこれを非難して、曰、法定價値は自然的市場と一致する場合には

「不必要なり、市場價値より高ければ消費者に損害を蒙らしめ、これより低ければ生産者を害し社會を攪亂す、而して法定價値の結果はこの一を脱せずと、嘗て干涉價値の施行を必要としたる者は法定價値を以て手工組合の獨占を制すべきの手段と認めたるが、今や法定價値の制度は撤去せられ、即ち一般に自由經濟競争の結果としてこの制度は無用の長物となり、かくの如き干涉規定を俟たずして自然に正當相場に至るべしと信ぜらる。

然れども營業の自由に基ける法定價値制度の廢止は屢々不満と反動とを惹起せり、殆んど一般の都市殊に小都市に於て從來干涉價格の規定ありたる商品は今や一層騰貴し、豫期せられたる技術上の進歩は一般にこれを求む可らず、ここに於て個々の法定價値を規定せんとするの議屢々決せられ、即ち千八百十一年プロイセンに於ては磨臼場主に對し、千七百九十一年佛蘭西に於ては麵麩及び屠殺肉に對し、千八百七十九年に至りても尙ほ八百九十八の佛蘭西都市に麵麩に對する法定價格布告せられ、而して佛蘭西の麵麩法定價を悉く禁止せんと欲したる立法議案は千八百八十四年に失敗に歸せり、獨逸に於ても亦交通業

及び街路業、競賣者、測量者、荷物量検査人、藥劑師等に對しては今日尙ほ法定價值を許可し而して普通に行はる。

凡そ官廳規定の舊法定價值制度に對する判斷は到底以て統一的なること能はず、何となればこの制度の適用は極めて區々たりしを以てなり、千七百九十三年乃至千七百九十四年の間佛蘭西に於ける所謂最高價格規定これが實例たるが如く、抑々飢饉若しくは革命に際し法定價值の強行に依りて低廉なる麵麩を製造すること能はざるなり、法定價值の強行に依りて價值なき紙幣をその名目相場に高め、資本缺乏せる國土に利率を十若しくは六プロセントより五若しくは三プロセントに引き下ぐることも能はざるなり、而かも事實上この種の政策は屢試みられたり、然りと雖も生産費用と販賣者の正當利潤とを顧慮せる法定價值に依り、畢竟需給を極限とする限界内に恐らく幾分相場を騰貴せしめ若しくは下落せしめ得べし、かくの如くして動搖を或る程度まで廢除し、殊に個々の場合に於て且つ全階級に對して暴利と利益壟斷と權力濫用とを禁止し、而かも能くこれを以て生産、商業將た所得分配の不正發展を致すことなきを得べけん、

勿論この結果を得べき先決問題は、如何なる場合にも法定價值を規定する所の官廳が果して事狀に精通し、豫じめ一切取引關係の欲する所を聴取し調査して能く處置を誤ることなきか、一方若しくは他方換言すれば販賣者若しくは購買者、企業家若しくは勞働者の利害に對して能く機先を制せるか否か是れなり、最後に尙ほ技術の發達單純に、分業の進歩著しからず、市場の規模と範圍と狭小に、麵麩若しくはビールビールの如き生産物の相場をその原料品即ち小麥ライ麥若しくは麥芽等に應じて圖式的に差別し、此等原料品の確實なる平均相場を小市場内に定め、更に生産者が悉く同一社會階級に屬し、既知の年平均利潤を以て満足するに準じて、相場干渉の規定は愈々容易なり、法定價格は、その不完全なるものと雖ども、尙ほ屢々經濟競争と社會的公開と未だ發達せざる場合、法定價格の規定なくんば消費者が個々の獨占主義的生産者若しくは商人に左右せらるゝ場合にありて極めて緊切なり。

凡そ此の如き點は最近三十年の間に殆んど全く變動を來たせり、即ち一地方市場に代ふるに國民的市場及び世界市場現はれ、單純なりし技術と分業とは復



難なる發達を效し、平等なりし經營形式及び生産條件は極めて難多なる發展を遂げ、幼稚なりし經濟競争及び社會的公開は著大なる進歩を示し來れり、舊方法と法定價格規定官廳とは幾分無用の長物となり幾分干渉を廢棄せり、舊方法及び舊干渉の結果は頽廢し、不利を招き、屢々徒らに煩累をなせり、これに加ふるに理論上新時代の信念は凡そ官廳規定の法定價格を不當となし、取引業者はその利己主義的利潤傾向を拘束せられざらんことを冀求せるあり。

然れども營業の自由を以て廣く舊來の法定價格とその結果とを廢除したればとて、舊來と同様なる定價格が絶對的に新たに成立することなかりしことは未だ證明せられざるなり、寧ろ事實上近世國民經濟は再び廣く或意味に於て相場を確定するに至り、即ち購買者及び販賣者の折價よりこれを確定せずして社會的機關の活動よりし、その確定相場は一定時一定市場に一定の給付及び商品に對し賣買者相互を拘束するの力あり、この相場確定は差當り寧ろ麵麩肉及びビールに關せずして、賃銀、俸給、原料品及び半製產品の相場に關し、總交通勤務に關せり、その拘束する所は前時の如く個々の商品及び勞働勤務に及ぶ能は

ず、たゞ單に幾多同一の場合に反覆せらるゝ模型的商品及び勤務に關するのみ、されども尙ほその領域は廣汎にして且つ日々擴大せり、この相場決定は當該賣買者相互の協働に據り、到る處に技術上及び商才上の専門家の意見を徵せんことを忘れず、その基礎は幾分社會的群及び結社の自由協定に在り、而かも屢々又仲裁裁判官及び公共官廳の協働に在り而してこの協働は益々強大干渉を加へんとせり、殊に獨占の著しき場合、例へば交通設備の賃率制度に於けるが如き場合には、公共官廳の干渉愈々必要缺く可らず、カルテルの決定に係る相場も亦、嘗て手工組合の相場の然りしが如く、將來私利利潤欲に放任せらるゝこと能はざるべし。

今日大販賣業に普通の定價は、既に購買者に應じて賣價を二三にし得べき主觀的可能を斷念するの意味を含み、折價に依らず平均的價值にて大取引をなるべく圓滑に遂行せんとするの傾向を含めり、この定價販賣(掛引なし)が公直妥當の取引なることは何人も否認せざる所なり、取引益々膨脹すれば、その卸先販賣者をして苟くも相場を二三にせしむること愈々不可能となり、愈々以て販賣

條件及び相場は確定し動かす可らず、實に國家及び共同團體が自ら販賣する場合には、もとより幾分は租税徴收を顧慮し且つ偏頗なる國庫主義を忘れざれども、概して定價販賣の法則を奉じ、この價格を決定するに臨みては國民經濟上及び人道上の一般的顧慮をも怠らず、國有森林の木材は、よしもとより一面に競賣入札あれども、屢々確定相場にて販賣に付せり、市營の瓦斯設備及び水道局は市會に論争せられ廉價と認められたる一定率の相場にて供給するを觀る。然り而して平均相場を確定せんとするの實際的欲望は、個々取引及び公共經營より更に廣く工業全般に亘れり、これが一例は何人も熟知する所の巴里建築業に對する相場系列なり、差當り國家及び公共團體建築物の競争入札及び入札價格審査の爲めに専門技能を有する一定公共設備は必要とせられたり、公共造營省の一官吏たりし「モレル」は斯の如き彙類即ち價格表を作り、而して千八百四十年來年々これを校訂し、所謂「モレル」の價格表は有名なるものとなり、遂には殆んど公私一切の建築の爲めに社會公衆、企業家及び労働者より直に以て利用られ、裁判官はこれを以てその判決の基礎となせり、「モレル」の死後セー州知

事は年々これを訂正し且つ審査せしめ、千八百七十二年以來は企業建築技師機械技師及び労働者の代表者も亦これに參與したり、總じて八萬人の労働者を使役せる巴里の大建築業は擧げて數十年間この價格表に準據して經營したること、猶ほ嘗て肉商及び麵麵製造業者がその法令價格の下に營業せるが如し、八十年代に及びて始めて、労働者より新たにこの價格表に附加せられたる賃銀騰貴は多數企業家より否認せられ、而して久しく争議を醸したり、千八百九十九年七月附政府の命令に依りてこの争議は終りを告げ、それに従へば公共的建築物に對しては企業家は通則たる均等の賃銀を仕拂ふべきの義務を課せられたり、今日に至るまで小規模の磨臼業に於て依然として磨粉の十六分の一を磨賃となせること、獨逸の書籍商業にありて出版業者より請賣業者に對して割引し又請賣業者より私的購買者に對して割引するの慣習が今に持續せることも亦、如何に確固たる慣習と價格規定とが今日尙ほ深く自由價值運動に影響するかを證明せるものならずばあらず。

今日一面に習慣と欲望とは價格規定を不可犯のものたらしめられたれども亦他面

に營業の自由と價格規定の禁止とがあらゆる社會範圍に亘りて價格商議(既定不可犯の價格に反對し)を毫も絶對的に禁制せざることは自然なり、價格商議は第十九世紀の間に麵麩製造業者及び肉商、大小商人、製造業者及び土地所有者、家内工業者及び勞働者に著しく發達したり、これを禁制せんと欲したる警察及び裁判所は到る處にその權威を失墜し、殊に有力且つ富裕なる少數大商人が會食に際し將た官職上の利害代表會議若しくは利害當事者協議會の閉會に際して能く商議し得たる場合に於て然りとなす、然れどもこのこと單に此の如き大商人に限らず、數十人數百人數千人の勞働者及び小生産者も亦屢々價格商議をなし、一定の給付及び商品に對して均等の確定價格を商議決定し、而して一定期間これを確守することを得たり、かくの如き一方的商議は、これを以て賣買者兩群の双方向的商議の基礎となすことを得たる場合には、非常に強固なる力を得たり、吾人はこゝにこれが組織を記述するの餘白なし、勞働者團體及び企業家團體の協働に對しては後段に論及する所あるべし、その殊に重要なものは近時英蘭に於て製造業者スミスの創立に繋かる同盟なるが如し、その目的は共同

商議に依りて關係勞働者の爲めに賃銀を騰貴せしめ、企業家の爲めに收支相償ふべき商品價格を確定せんとするに在り、多數の企業家團體はその供給者從て又その需要者と價格を商議せざる可らず、即ち農業上の企業家は肥料供給者と、石炭生産者及び石炭商人はその消費者及び交通設備と價格を商議決定せざる可らざるが如し、手形割引に就ては今日概して大銀行の間に協定あり、最近十五年以來極めて甚大の影響を及ぼせるものは大カルテル及びトラストの相場決定なりとす。

苟くも事實を知り將た相場協定の全領域に關せる近世研究を識れるものは、今日最早かゝる商議が無勢力若しくは徒事なるべしと主張することなかるべし、この商議が舊法定價格の如く需給と矛盾して價格を左右すること能はざるは自然なり、もとなり供給過剩に際して相場を騰貴せしめ、供給缺乏に當りて相場を下落せしむること不可能たり、然れどもそれが需給そのものに影響を及ぼし而して一時的には常に相場を變化せしむることは則ち能はざるにあらず、たゞかくの如くして成立したる相場が常に妥當にして適度に且つ社會の總利害と果し

て矛盾なきを得るか否かは自ら別個の問題たり、かるが故に凡そこの商議及び社會的價格規定の干渉する價格の數は漸次に減少の傾向をなせり、獨り社會の總利害を無視せる獨占的高價を以て違常の大利潤を貪らしむる場合には今日と雖も社會一般の非難攻撃起り、かくして賃銀を適度に確定し且つこれを漸次に騰貴せしめんことは益々以てあらゆる方面より是定せらる、カルテルの決定に繋がる相場に關しては當然争議あり、これカルテル相場は幾分公正妥當なれども幾分破廉耻にして且つ貪慾的なるを以てなり、カルテルを立脚點として相場を研究するは抑々極めて困難事ならずばならず、何となればカルテル以外幾多の原因ありて相場に著大の影響を及ぼし、この影響の強度を認識する事容易ならざればなり、これに關する研究は現に「ジュンクス」教授のそれに及ぶものならず、精製石油一ガロンは「ニューヨーク」にて千八百六十六年乃至千九百年の間二十五乃至三十五仙より五乃至十仙に下落し、未製石油と精製石油との差は嘗て十乃至三十仙にして今や概して二乃至三仙に下れり、この變動の主なる原因は多數の石油坑が利用せられたると技術上に進歩ありたるとに在り、然れどもトラス

及び後代創立の會社は相場行程の一上一下に根本的影響を及ぼし、而してこの影響は既に多大なるものありき、合同組織は技術の進歩を支配し、これに依て又相場を左右せり、北亞米利加の砂糖トラストは未製糖と精製糖との相場差額を一時五十乃至七十五仙より一乃至一七〇弗に高め、これが爲めに新たに經濟競争を起し再び相場の暴落を來たせり、商議協定の盛に行はれたる場合には、トラスト以外のもの、經濟競争を刺戟して、その期待せる相場不變を得る能はずして却て益々相場を變動せしめたり、然れどもこの商議協定にして能く適度を失はず、獨占主義的に相場を決定することを廢して益々技術上組織上に改善を計り、益々社會の總利害と消費者とに顧慮し、嘗て苟くも相場規定官廳が努力したりし理想に益々接近すれば、商議協定は愈々社會に好評を博すべし。

**百七十五** 交通設備に於ける價值及び價格の決定、交通定賃率、交通勤務に於ける價格決定が古代にありても近世にありても官廳の影響を蒙り、定賃率制度となれることは、爾他一切の領域に於けるよりも顯著なる現象なり、マイル及びキロメートルに應じ、貨物の品目、客車船及び等級の種類、進行の速度に

準じてそれぞれ確定せらるゝ運賃表は古今東西一般に交通定賃率として使用せらる、この定賃率は或る若干の原理より案出せられ、これが基礎と理由とに關しては爭議あり、而して常に技術||經濟的見地の外、道德的及び法律的、經濟政策的及び社會的見地をも包含せるものなり、これ等の見地に一致を缺ける限りは、實際生活上にはその互讓調和を重要とし、而して以て個々の定賃率に表しせらるゝことを肝要となす、交通設備を異にし國土を別にするに従て定賃率に不同あるは、一はこの原理の相異に座し、又一は經濟上技術上將た需給上の關係如何に基せり。

吾人はこれが事實上の關係を闡明せんが爲めに歴史的説明に依るを至當と信ず。

舊時代一般の問題とする所は、小船主、巡禮、旅行家及び君侯の飛脚、將た幾分は副業として幾分は生業として運賃をとりて書信貨物及び旅客を運搬せる小運送人なり、もとこれ等の運送人は屢々好意にて極めて廉價にて運搬に當りたるが、忽ちにして出來得る限りの高運賃をとり、而してその運搬極めて重要

に、旅行危険にして費用多かりし場合には、運賃も亦巨額に上れり、貨物に對しては運賃を決するものは諸地域間の相場差額たり、貨物運賃は一般に極めて高率に上り、貴重財、殖民地商品、精巧布帛にして、重量甚だ重からず原生産地より遠く輸送せらるれば百乃至三百プロセントも高價に販賣し得たるものは、極めて高率の運賃を仕拂ふことを得たり。

運搬業、使者及び船舶に依りて定期の交通開かれたる場合には、殆んど一般に運賃を決定するの準據は次に掲ぐる事情と商量となりき、一、公共權力と取引業者との兩者が運送と運送の安全及び定期とに對し平等の利害關係を有する場合には、共同團體の爲めにする交通勤務と私人の爲めにするそれと正當に合同協力せる限り、然らざるものと比し少數の人員、馬匹若しくは船舶を以て同一若しくはより以上の運送力を效果し得たり、二、運送人が公共の道路橋梁及び港灣を利用すれば、爲めにその社會全體の費用を増加せしむることとなり、從てそれに相當する利用料を運送人より徵集せざる可らずとなせり、三、欲望概して不均等にして、四季に應じ收穫に従ひ政治上及び經濟上の出來事に依り

て變動常ならざる場合には、運送業及び運送人は時には業務甚だ閑に時には極めて多量の貨物を運送すべき必要あり、従て時には殆んど無賃にて運送せんとし、均等賃率の制なかりし限り時には非常の高賃を要求す、四、運送勤務を利用せんと欲するものが自然自家の権利を侵害せられたりと感ずる場合には、特殊の理由なくして同一交通勤務に對し或は高賃を或は低賃を請求せられ、船主が或るものに對しては運搬を拒絶し或るものに對してはこれを應諾したり、例へばマグデブルグ市民ならざりしものがハンブルヒに航行せんが爲めには同市民より多くの運賃を仕拂はざる可らざりしことの如きは、千七百五十年の頃に於ても尙ほ一般に自明のことと認められたり、然れども凡そ共同團體に屬するものを平等に取扱ふべしとの要求は、苟くも多少交通設備を發達したる社會團體に於て恐らく既に數百年來確實に施行せられたり。

上陳の結果は簡單明瞭なり、即ち般主、飛脚、運送人は半ば社會全體の爲めに従業せるもの換言すれば公僕と認められ、古代にありて久しく凡そ船舶及び馬匹が必要なる際には悉く公用に徴せられたる場合に於て殊に然りとなす、さ

れば運送人は概して官營業の如くに取扱はれ、政府の認可を要し、その運賃に關しても亦政府より監督せられたり、詳言すれば毎半年及び每一ケ年、夏期及び冬期それぞれの定賃率制度は、幾分は利用者及び運送人、商人及び船主組合の合同より、幾分は官廳の仲介及び權威より成立せり、運送従事者の連絡接続、確實なる出帆時日及びこれに類する規定の制あり、既に第十三世紀及び第十四世紀より第十九世紀の前半に及ぶまで主として此の如き定賃率及び制度あり、又例へば郵便に於けるが如く既に精密なる賃率制を具備せる國家的大經營の發達したることは吾人の觀察する所なり、而してこれと同時に一時的には隨所に全然自由運賃制をとれる個々人の自由經營も亦これなかりしにはあらず、即ち例へばエルベ河上には千七百五十六年の戦争以來發達して千七百七十五年に至るまで繼續したるが如きこれなきにあらざれども、出來得る限りは殆んど常に舊制に復歸したり、この顯著なる場合に於ける復歸現象の理由は、船主及び商人が千七百五十六年乃至千七百六十四年の過大運賃と千七百六十四年乃至千七百七十五年の絶望的低廉運賃とが畢竟損害を招けることを察し、この絶望的低

廉運賃の爲めに全航海業が破滅の境に陥りたるに在り、獨り複雑せる組織をなせる海上運送業に於ては常に寧ろ自由運動と自由運賃制とありしなるべく、その果して屢々定賃率制に復歸せざりしか否かは余のこゝに如何とも決答すること能はざる點なりとす。

運賃率の高低は常に運送人が平均して少なくとも運送費用を補償し得る限度を以て標準となせり、官廳及び利用者の欲する所は、なるべく運賃を運送實費の程度に引き下げ、而して以て交通を催進し、運送人の爲めに社會公衆の利益が壟斷せらるゝことを禁止せんとするに在り、然れどもこれを運送企業家の側より觀れば、凡そ交通技術に進歩ありてその結果常に少實費を以て従來と同一の交通勤務を遂げ得る場合に、運送企業家は尙ほ差當り舊賃率を改正せざるの利益あり、吾人が舊運賃及び定賃率の朦朧界に研究を進め得る限り、技術の新進歩ある毎に、常に従來運賃は新賃率に對しても尙ほ標準となれるの狀態なり、ブランドンブルグの大選帝侯がその郵便制度を施行せる際も、郵便税は従來の飛脚手數料を基礎とし而してやゝこれより低率に定められたり、等しく貨物の

中にて、例へば當初プロイセンの郵便税率にこれを觀るが如く、通常貨物と比して食料品はやゝ低く、貴重商品はやゝ高く決定せられたることも亦恐らく舊慣例に準據せるものなり、運河を開鑿せる場合には陸路運賃に關聯して運賃を規定せり、道路險惡なりし英蘭に於て、第十八世紀の初葉に、毎噸 $\parallel$ 毎キロメートルの陸路運賃は六十ペンニグ及び七十ペンニグ以下と計上せられ、新運河にて運賃及び運河手數料は貨物の種類に應じて十乃至三十七ペンニグに達せり、當初の鐵道運賃は東西一般に陸路運賃、水路運賃、郵便の従來賃率に關聯して規定せられたり、英蘭の郵便に對しては千八百年乃至千八百三十四年の間一人一英哩五ペンズ即ちキロメートル宛二四ペンニグの仕拂あり、然るに法定極限は有蓋馬車にて三五ペンズ、無蓋馬車にて三ペンズの規定なりき、而して古來貨物の價值と人間の地位とに應じて運賃に等級別を設けたるが如く、社會の總利害を立脚點として運賃輕減及び運賃免除のことも亦これあり、即ち例へば道路用材の如きは英國の運河にては無賃にて輸送せしめたり、プロイセンの國家郵便にては千六百六十年乃至千八百年の間官廳の發送に係かるものは無賃

にて、株式證券は悉く低率の運賃を課せられたるに過ぎず。

第十九世紀の間自由經濟競争を謳歌せる樂觀説が舊法定價格と舊賃率とを廢除したるの時、その結果は多くの場所、大河川及び大通路にありては疑もなく良好なるものありき、即ち競争愈々劇甚を加へ運賃は下落を來たせり、然れどもその久しく能く良果を收め得たるは、例へば海上交通に於けるが如く、大河川及び交通頻繁なりし陸路に多數運送企業の競争起り、而してこの競争の持續したる場合に限り、僅かに不定期の小交通ありたるに過ぎざる場合に於ては則ち然らず、然り而して例へば鐵道に於けるが如く、當初より獨占行はれ巨大經營成立せる場合には、獨占的大經營は技術的進歩の効果を殆んど擧げて自家の囊中に收むるの權力を有したり、この大經營が商人社會及び爾他一般社會に對して權力及び優勝力を有したるの狀は古代の小船主、運送業及び飛脚と同日にして談ず可らず、鐵道が全然私的投機に放置せられたる場合にもこの事情は看過せられたるにはあらず、英蘭に於ては凡そ議會の鐵道認可に當りて貨物及び旅客の極限賃率を規定したるも、舊運輸技術に準據したるを以て幾ならずし

て實際上には多く無意義に陥れり、即ち既に述べたるが如く商品の等級に従ひ一噸一キロメートル宛一〇乃至三七ペンニゲの規定となれり、然るに例へばイエエルンに於ては既に千八百四十五年に六乃至二十二ペンニゲ、佛蘭に於ては國家の認むる所の極大限は千八百五十七年に一〇乃至一六サンチームと定められたり、或はプロイセンの如きは千八百三十八年、配當一〇プロツェントを越ゆる場合に(塊地利にては其後一五プロツェントを越えたる場合に)國家は宜しく運賃率に干渉すべしと規定したり、然れどもかくの如き國家規定が實行せらるべからざるは論ずるを俟たず、佛蘭西にありて國家は一切の運賃率に認可を下すべき權利ありと要求したれども、この權利も亦實際上に何等著大の意義なかりき、私設鐵道がそれぞれ自家の利益より交通を増加せんとするの企圖に出づる結果は言ふまでも賃率に多大の下落を來たせり、然れどもその實行は極めて徐徐緩漫にして且つ不均等に、黨派的に個々人及び個々大經營に特に便宜を與へ、屢屢極めて秘密の間に起りたれば、これに對する一般的非難は免かる可らざりき、幾多の小鐵道會社が一國の交通を分割せる場合には、その間に賃率の不均一甚



しく、諸會社鐵道に連絡秩序なく、且つ屢々連絡の爲めに極めて高賃を仕拂はざる可らざりしが故に、運賃に對する社會の非難攻撃益々甚しきを加へずんばあらずりき。

さて千八百三十年乃至千九百年の間、國有鐵道、私設鐵道若しくは混合經營に應じ、個個國土に於ける賃率規定の方法極めて區々として一定せざりしかど、或る程度の國家の監督將た賃率主權隨所に發達して賃率を秩序しその限度を規定し社會の總利害に立ちてこれに干涉せるあり、輿論の強大なる勢力に至りては更にも言はず、もとよりこれが程度は貨幣經濟の流行せる國土、即ち英蘭及び北米合衆國に於ては餘りに薄弱に餘りに躊躇し、混合組織をとれる國家、例へば佛蘭西にありては既にやゝ強固に、而して國有鐵道組織の領域、即ち獨逸の如きにありては最も強烈を示せるの相異あり、然り而して國家の監督と關聯して一般に、一切の賃金表が公表せらるべきこと、一國土内の諸鐵道がなるべく統一あり明瞭にして且つ容易に理解せらるべき賃金、少なくとも同一組織及び同一原理に準據せる賃金制を實行すべきこと、大運送設備が一切國民を平

等に取扱ふべき正義の大原理を遵守し、正義の原理に従てその賃率を決定すべきことは要求せられたり。

若しそれこの要求が等しく現今經濟秩序の根本思想たる所謂取引生活の自由と如何に調和せんかと問はば、吾人は先づ原理上交通界全般主として現今鐵道交通に於ける價值規定の理由を闡明し、次で又それに等しく爾他の近世的大交通に於ける價值規定の理解を説明するを以て、これが最も適當なる答案を與ふることを得べし。

賃率限度の規定、即ち換言すれば交通勤務に對して仕拂はるべき價格の規定は、畢竟市場に於ける相場規定と同一の原因に坐せり、既に陳述したるが如く在來の率は常にこれが出發點たり、これに對し相反對せる利害の若干群が予盾的影響を及ぼし、その一方若しくは他方の壓迫の強弱如何に應じ互讓調和の結果として成立せる賃率は或は高く或は低き限度を示すべし、私設運送設備はその運賃をなるべく高率に供示し、なるべく多大の利潤を收めんとし、商業及び一般社會は交通勤務を需要し、これが爲めになるべく低廉賃金を仕拂はんと欲

し、その賃率の高低如何に應じてこれが需要を増加せんとす。

凡そ運輸設備はその私設と公設たるに論なくなるべく高率の運賃を請求せんが爲めに常に下の二項を理由となすことを得べし、一、從來の運送賃率は舊交通技術に依り若干額の規定なりとし、若しその一〇乃至三〇プロセントを低減したりとせば、よし新技術の爲めに運送實費に於て四〇乃至八〇プロセントを節約し得んとも、尙ほ一〇乃至三〇プロセントの減額を以て既に多くの義務を果せりと信ず、二、交通設備は主張し曰、余は毎ツェントネル三十の價格を有せる商品をその九十の價値を有する所の地域に輸送したり、從て余は六十の價値に相當せる勤務をなせるなり、これが輸送費用がたとへ五若しくは四〇若しくは五〇なりともそれとは無關係に、何故に少なくとも五〇乃至五九の運賃をとること不都合なるべきかと、かくの如くして運送設備は苟くもその負擔し得る所を交通そのものに轉稼せんとす。

交通設備を利用する所の商人及び一般社會はこれと反對に主張して曰、一、交通設備は如何に多くとも運送實費と低廉なる利潤とより以上を取る可らず、

出來得る限り多くを貪らんとするが如きことあるべからず、爾他取引の利潤に十倍するの利潤を收む可らず、二、更に鐵道は特權を賦與せられ、國家及び共同團體より公用徵收、警察權、獨占權等ありとあらゆる利益を供與せらる、故にその賃率を規定するに就ても亦これに應じて經濟政策上の總利害に立ち、或る倫理上の立脚點、正義及び爾他の高尚なる立脚點に準じて、その收支相償ひ得る限りになるべく低廉ならしめざる可らざるの義務ありと。

凡そこの四群の動機を以て價格規定の理由は則ち悉く盡くせり、此等の動機は、例へば海上交通及び河川交通に於けるが如く、價格規定の自由なる場合にありては、恰かも商品市場の需給と等しく相抗争し、而してもとより常に輿論に依りて多大の影響を蒙らざればならず、多くの地域を觀るに小交通も亦官廳の賃率規定に依り、例へば都市の辻馬車交通馬車鐵道交通の如き皆然り、然れども國內大交通の領域、即ち郵便、鐵道、電信の諸制度の如きにありては、賃率に就き上掲の諸傾向及び諸動機は輿論の上に盛に論難攻撃を絶たず、而して豫じめ印刷物、特別調査、鐵道委員、議會委員及び議會の協商に於てあらゆる

方面の意見の歸一したる後、幾分は協定の形式をとり、幾分は政府より命令せられたる形式をとりて遂に一致し、而かも何れの場合たるに論なくや、長期間に亘り新公表の賃率表を以て幾分は正義及び公正に準じ幾分はその時々一方若しくは他方の壓迫の強弱に従て平均的賃率の規定となる。

尙ほ上に掲げたる價格規定の重要な理由が如何に新賃率に事證公表せらるかの方法に就ては、更に數言を附説すべき必要あらん。

一、運搬設備が、差當り舊來の運送率を確守し、殊にその創立の初期に於て然るは言ふまでもなけれども、大體に於て比較的高率の賃金を辯護することも亦敢て説くを要せず、而かも賃率輕減より交通を増加し結果に於て却て利益を齎らし得べきこともその屢々洞察したる所なり、英蘭の鐵道は遂には有利の結果を生ずべき第三等旅客級を適用するに當りて始め強制を必要となしたること辯を俟たず。

確定賃率少なくとも或る期間變動なき賃率は主として社會公衆の欲する所なり、企業家及び商人は運賃計算に關する確定準據を有せざる可らず、然らずん

ば將來に對する計算をなすこと能はず、この故に企業家及び商人の側より、定賃率適用上の恒常と均等とはその輕減よりも却て重要なりと要求せらるゝは、屢々吾人の聞知する所なり。

而して數百人及び數千人の事務員を使用せる大運送設備と雖も、豫じめ確定賃金制を定め個々の場合に一々折價せんことを欲せざるに於て、始めて能く日數千の運送契約を圓滑に且つ敏速に締結することを得べし、運送設備はこれが全權を決して個々事務員に委任すること能はず、その特殊契約は高々稀に起り來る所の大運送荷物に關し該設備の大利用者との間に締結せらるることあり得べきのみ。

二、商品の價值に従て運送賃率に次第を附するの制は所謂價值賃率及び等級賃率の發達を促せり、舊運送設備と等しく鐵道は、重量の割合に高價なる商品に對して高賃率を、重量に比して低價値なる重き大量財に對し低賃率を課せり、比較的高價なる商品は地域を異にするに従て價格に大なる差異あり、比較的内容に高率の運賃を仕拂ふことを得べく、比較的低價なる貨物は能く一時に大量

に低率の賃金を以て輸送せられ得べし、これが爲めに運送設備は屢々又揭示して、高價なる商品の輸送が輸送費多く、多大の注意を要すべきこと……、重き大量財即ち石炭、鑛石、穀物等の低賃率輸送にありては運送手段は特別の注意を用ひずして十分に利用せられ得べき事を陳べたり、さて鐵道に發達せる從價賃金制はそれ自體に何等不當なるものにあらず、その等級別は極めて自然的なる公正感情及び極めて緊切なる經濟的欲望に順應せるもの、從て該等級が如何なる場合にも起り來るべきは必然なり、鐵道の從價賃金制に對するの攻撃は、等級別の原理そのものに係かるよりは寧ろこれが適用の方法に關せり、その餘りに懸隔あり餘りに繁多にして餘りに隨意的なる等級別に在り、これに依りて私設營利會社が如何に或る工業に利便を供し而して他のものに損害を蒙らしむるかの方法の不當に在りて存せり、されば凡そ旅客及び商品の等級別が、この等級別に準據せる運賃の差等は抑々社會の總利害を立脚點となし政府及び輿論の是定する所ならざる可らずと要求せられたるは當然なり、數十の特殊賃率及び除外例賃率に代ふるに、僅少の主要等級別と若干の除外例賃金を以てせん

とするは、今日一般の標的たり、通常運送交通に對する賃率は現今獨逸に於てトンネンキロメートル宛一乃至一ペンニゲなり、かくの如くして種々の賃率等級が旅客の給付能力、商品の價值、これが流通を容易ならしめんとする國民經濟的欲望に順應する限り正當なるものと認められ、而して平等の原理に矛盾するものとは見做されざるなり。

三、賃率は當然運送費用に從て定められざる可らずとの要求は、凡そ合理的經濟の本質に在りて存せり、運送設備の利用者がなるべく運送費用以外を仕拂はざらんと欲するはその正當なる主張なり、賃金訴訟に當りて英蘭裁判所の慣例が運送費用を以て正當賃金の一根本規範と認めたることも亦理解するに難からず、極めて複雑なる從價賃金及び除外例賃金の混亂状態が社會一般の問題となり而してこれが爲めに公衆の利益が壟斷せられたる場合に、運送實費を規準としてこれを撤廢せんとし、從價賃金に代ふるに容量賃金及び純重量賃金を以てせんとしたることも亦理解するを得べし、然れども他面よりこれを觀察するに、かゝる要求の急進主義を全然若しくは幾分拒斥したる交通設備の態度も等

しく正當なる理由あり、商品の價值及び旅客の給付能力に準じて多少の等級別を立つるは不當にあらず且つ不經濟にあらざるなり、又運送設備それ自體は、その資本の利子を仕拂ひ、施設を改善し擴張し、豫備金を蓄へんが爲めに、運送費用以上若干プロフィットの利潤を收めざる可らず、個々の具體的運送契約に對し巨細に運送費用を計算せんことは到底絶對的に確實なることを期す可らず、運送設備一般に重要な問題は後段に説明せらるべき總生産費用是れなり、個個に就て言へば運送設備は或る部門にては多く儲け、他の部門にては儲けを少なくせざるを得ず、加之經濟競争の結果は運送設備をして或る運送を損失を顧みず經營せしむることなきにあらず、國家の總利害より觀るも亦屢々かゝる場合あり得べし、則ち然りと雖も少なくとも大體に於て、その運送取引を總平均して、運送費用に準據せざる可らざるなり。

一見不平等なるが如く、運送費用賃率と齟齬するが如く觀ゆる所のものも、これを精密に觀察すれば運送費用に順應せる場合多し、即ち禁制品、個別貨物は貨車積載物の場合より多くを仕拂ふべく、急行車旅客は普通列車のそれよりも

多くを仕拂ふべく、一等旅客が三等旅客より多くを仕拂ふべき場合の如き皆これなり、五キロメートルの距離にも五百キロメートルの距離にも平等なる特別装置手数料の如き、遠距離輸送の財に對し毎キロメートルの運賃率低廉なるが如き(等級別賃金、差別賃金)、何れも全然若しくは幾分は運送費用に順應せるものならずんばあらず。

四、正義及び社會の總利害の寫象が價格(運賃)全般の決定に加はるべきことは、上來の陳述に顧みてもとより自然なり、獨占的地位を占むる所の大交通設備が、國家權力、全社會、國民經濟と對立せる場合に於てこのこと殊に然りとなす、私設と公設とに差別なく凡そ交通設備が差當りこの立脚點よりは寧ろ自家の利潤を思ふは交通設備そのもの、本質に在りて存せり、然れども社會公衆、商業、國家權力そのものがこの主義を流行せしめ、出來得べくんば交通設備の利己主義的及び財政主義的利害に反對してこの見地を實行せしめんとすること亦勿論なり、たゞこの實行上の困難は、この場合にも、正義及び社會の總利害に對する寫象が決して統一的のものにあらず、常に明確に認識せられ得るも

のにあらざる點なり、取扱を平等にすべきの原理は今日一般に認めらるれども、この原理の實行は極めて困難なり、吾人の既に觀察したるが如く、從價賃率等級及び差別等級はこれを撤去すること能はざれども、佛蘭西の遍條工業の調査に依り、その嘗て郵便輸送にて百キログラムの遍條に對し三十五フランを仕拂ひ、現に鐵道にては同一距離に百二十五フランの運賃を仕拂はざる可らずと言ふ如きは、その何れか一方の等級別賃金の不當なることを證明せるものなり、一定官吏、使節に對し無賃通行券を賦與するは一般に正當と認めらる、然れども亞米利加の私設鐵道に於けるが如く、嘗て無賃通行券(乗車券)を有するものが鐵道利用者の半數にも達し、印刷物、議會、官吏、大取引の賄賂組織と化するに至りては、これ平等の原理を痛く毀損するものならずばならず、或る財の輸送が社會の總利害より觀て利便と運賃輕減とを受くることは何人も承認する所なり、然れどもその果して如何なる財たるべきかに就きは爭論あり、消費者の側に立てるものは輸入賃率の輕減を正當とし、輸出工業の膨脹を思ふものは反對に輸出運賃の低廉なるを正當となすが如きこれなり、グラスゴーにて屠

殺せられたる亞米利加の肉をロンドンに輸送するに四十二シルリンリの運賃を要し、スコットランドの肉は同一距離に七十シルリングを仕拂はざる可らずとせば、これ亞米利加の食用獸牧養者を犠牲に供して英蘭の食用獸牧養者をして多大の損害を蒙らしむるもの、然れどもこれを以てロンドン市の消費者は大に利益あり、私人及び階級の利己主義的利害を基礎とする限りこの矛盾を脱すべき方法あらず、たゞ正當にして能く事情を裁量し得べき國家權力に俟ちて損益を平均し其間に中庸妥當なる決定を與へ得べきのみ、この故に殊に大運送設備に於ける價格(運賃)決定は、獨り私設營利會社に一任せらるゝこと能はず。

種々の定賃金を叙述し、その高低及び賃率を巨細に叙述するはこゝに吾人の目的にあらず、吾人はたゞこゝに定賃金を以て價格の重要なる一形式、法定賃金制度の新種類として考察せざる可らず。

全法定價格及び賃金制度並に一切相場慣例は、今日自由市場相場と同列の現象たり、これが究竟原因は則ち同一不二なり、二者の何れにありても互に抗爭せる幾多の力と群とこれありて或る點にて少時互讓調和し、新たに成立せる相

場は市場に短期間行はれ、定貨率を基礎とすればや、長期間に亘り權威を以て行はる、然れども相場を確定せしむる社會的過程は區々として一律ならず、凡そ相場の決定に干渉し得べきありとあらゆる動機及び價格規定原因の中にて、法定價格及び定貨率にありては共同經濟的理由將た正義及び社會の總利害に關する寫象を以て著しとなす、これと異なり自由市場價格の成立は更に自由にして變動的に且つ個々の事情に順應し得べき能力に於て優れり、自由市場價格は法定價格及び定貨率に比し要素的基礎即ち換言すれば需要供給の影響を蒙ると甚し、個々の場合に不正不當の結果を生ずることに至りては、市場の自由活動たると法定價格規定官廳の社會的活動、協商確定及び官廳の定貨率規定たるを撰ばず。

自由決定と干渉決定との相場成立の兩方法にはそれぞれ長短得失ありて存せり、而して相互に補充し是正せり、若しそれ遠き將來に於て一切の相場が官廳の法定價格制度に依りて成立確定せらるゝに至るべきか、近時「シユフレイ」の如きはこれを以て考へ及ぶ可らざることにあらずと言へるも、吾人を以てこれを觀れ

ばこれ今日にして未だ解決す可らざるの問題たり、余は實にこれを否認せんと欲す、「シユフレイ」と雖も更に附言して云、一般的官廳的法定價格制度は恐らく大困難に遭遇すべく、而してこれ今日商品市場及び労働市場に於ける相場の私的自由成立に依り容易に解決し得らるゝ所のものなりと、而してこの問題の不完全なる解決が、給付と所得との間に、例へば現に資本主義的社會に起れるが如き幾多の不調和を齎らすことなるべきかは斷言す可らざるならん。

さてこれより吾人は需要及び供給の特殊分拆に研究の歩を進めんとす。

**百七十六**

需要の分拆、需要の一般の特徴及びその歴史的大變動、食料品の需要、始め吾人は需要を以て與定の多寡として、次で個々人及び社會群の精神力として認識したるが、更にこれを分拆せんが爲めに、吾人は需要が人間の願望に於て成立し、その究竟は快樂及び苦痛の感情、欲望に歸着することを回想せずんばならず、凡そ需要に關する深刻なる研究は實にこゝを出發點となせり。吾人は既に本譯補の第一冊 **十一** 乃至 **十三** にて快樂及び苦痛の感情より人間の欲望と衝動とを演繹せんとし、種々の分類に依りて欲望を闡明せんことを試

み、又快苦感情の一種の計量に依りて需要を解釋せんとしたり、塊地利學派の價值學者は單に一定種類の財に對する願望の強弱がその貯藏額の多寡に従ひ、その供用せらるべき目的の相異に應じて如何に變動するかの問題に着眼したるのみ、換言すれば即ち例へば小麥に對する願望は、その貯藏額が辛うじて生活を維持するに過ぎざる場合に極めて強烈に、人間の食料品として十分に更には禽鳥を飼養しブランドを醸造し若しくは鸚鵡の飼養料にも供し得べき場合には則ち微弱なり、かくてその價值は貯藏額を以て自由に供用せらるべき若干に所謂限界效用は同一の財に對するその時々々の欲望を左右するものなり、然れども需要全般、その種々欲望に應ずる差等は未だこの提説を以て説明せられず。「バツテン」はこれに類する一研究を試み、享樂説若しくは消費説を需要を基礎として樹立せんとしたり、彼は文明史、心理學、通常生活經驗の若干事實を理法圖式の下に秩序し(困乏、多樣、調和等の諸理法)、而して以て欲望と需要とを統一的に説明し得たりと信じたり。

余は此の如き研究及びこれと類似せる幾多の企圖を不當なるものと斷言せんことを欲せず、況んやこれを以て全然無價值のものとなさんことをや、然りと雖も此の如きは未だ以て需要の科學的分拆及び因果的説明の大問題を解釋するに足らざるなり、この問題は恐らく今日と雖も尙ほ未だ一般的には解決す可らず、思ふにこれが爲めには豫じめあらゆる國民及び階級、あらゆる時代に亘りて經濟的消費の方法を統一的に概觀せざる可らざるべく、一切の心理學的及び精神的原因を認識し、人間の感情發展、慣習、文明及び贅澤の全歴史を十分に理解することを必要とすべし、欲望及び需要が如何に發展したるか、何が故に一定の欲望は幾分停滯し他の欲望は變化し且つ昂進せるかを明瞭に知悉せざる可らざらん、然るにかくの如き準備研究は今日尙ほ屢々缺乏せり、余は敢てここに現在求め得らるべき一切の準備研究を拉し盡すことを得べしと自ら信ぜず、余はたゞ余の研究に基きこゝに餘白の許す限りに次の如く範圍を限局せざる可らず、一、歴史的國民的具體的需要の大體の特徴と變動とに關する體貌、二、近世に於ける所得統計と家政豫算とを基礎とせる需要の分拆、三、需要の小動



搖に關する概觀を供示せんとするに止まる。而して尙ほ差當り余は需要の數量概念及び需要者に關する二項の單簡なる叙述を掲ぐべし。

凡そ一國民が一定の商品即ち例へば穀物を使用し願望するの量は二重の數量として現はる、一には需要せられ消費せらるゝ穀物の總額として、二には市場に現はれたる數量の總額として觀察せらる、その市場に現はるゝものは、尙ほ自足經濟存在して自ら穀物を生産し自ら生産する所若しくはその一部分を消費し、而して市場に輸送せらるゝと少なきに應じて極めて少額なり、近く確證せられたる所なるが、今日と雖も尙ほ佛蘭西にありては人口の半數は自家の竈にて焼ける麩麵を食し、而して全歐羅巴を平均して恐らく今日尙ほ一切農業生産の三分の一乃至二分の一、北西部歐羅巴に於て恐らく十乃至二十プロツェントは家族の自足經濟にて生産せられ且つ消費せらる、大體に於て國民經濟が自足經濟狀態をなし、僅かに生産者の家族需要以上の剩餘物が市場に輸送せられ、僅かに消費者の一部分が需要者として市場に來るのみにして、價値の動搖が實際上僅かに限局せられたる範圍に過ぎざれば、如上の状態は市場價値に大なる關

係あり、然り而して貨幣經濟發達するや、自足經濟に於て生産せられ且つ消費せらるる財も亦或る意味に於て市場價値觀察の影響を蒙り、市場價値の景況に應じてその幾分は販賣せられ、かく販賣に附せらるゝ財はさながら總體の財に對し豫備貯藏の關係をなせることは苟くも忘る可らざる點なり、それは兎に角吾人は多くの觀察と概算とに當り單純なる市場需要に代ふるに總願望如何と顧みるを以て重要となす、蓋し吾人は總願望を寧ろ容易に捕捉することを得ればなり。

さて吾人は先きに **百五十七** 中間商業に就て陳述したる所をこゝに回想せざ

る可らず、第一次の需要は今日僅かに幾分直接なり、換言すれば消費者が直接生産者に對するの需要なり、大部分より言へば需要は複雑なる連鎖をなし、企業家及び商人の中間連鎖を経過す、先きにも述べたるが如く、此等中間連鎖が能く正に組織せられて、その分業的分化として消費者自身よりも一層正當に將來需要を概觀し得る限り、これ一つの進歩たり、然れども亦既に觀察したるが如く、この中間連鎖の組織不健全なれば、濫用、獨占、利益壟斷起らざるを保

せず、此等中間連鎖の利潤立脚點は決して常に消費者に對する十全の供給を效すものにあらず、否吾人は附言して下の如く述ぶるも不可なかるべし、曰、商人の需要は如何なる場合にも主要原因即ち消費者に對する供給の概算の外、幾多の小随伴原因即ち商人の一時の情調、その信用、協商及びこれに類似せる事項より影響せらると、從て需要に幾多の小動搖起らずんばあらず、爲に需要の大特徴は殆んど無關係なり、故に吾人は差當りこれ等の動搖を度外視するを得べし。

吾人は需要そのものを究明し、而し余は更にこれが範圍を制限せんとす、即ち吾人は主として略説を期せざる可らざるが爲めに、食料品の需要のみをや、精密に觀察せんと欲す、食料品の需要は今日と雖も最も重要なものにして、大多數人口の間にはその所得四十乃至六十プロセントを要求し、幼稚なる時代にありては更に多く最も主要の需要なりき、居住、衣服、爾他一切の目的の爲めにする財産及び勞働の需要に就ては、吾人はたゞ數言結論に於て論及する所あらんと欲す、吾人の問題は食料品に對する需要が如何に發展し、吾人のこれ

に關する知識如何かこれなり、近時最き好ましき營養法に就て生理學の研究結果は、如何なる資料、幾何數量及び混合が營養の爲めに必要なるかを明かにしたり、その證明する所に依れば、一面に蛋白質、含窒營養分が血液、筋肉、神經、骨を構成し、他面に窒素を含まざる營養分、澱粉及び脂肪は體溫と體力とを補償せんが爲めに前者より三倍乃至四倍も多く必要とし、その外尙ほ鹽分も缺く可らずとなり、加之歴史及び統計將たあらゆる經濟的記述は吾人に供給するに至重の認識材料を以てせり、殊に諸國土諸都市等の需要に關する便宜にして且つ一目瞭然なる概觀の補助資料は人口一人宛消費平均額の統計なりとす、もとよりこれ等の統計は消費及び總生産に關し輸出及び輸入に關する幾分精確なる調査を基礎とすれども、又幾分は概算を據とせるや疑なし、從て多數人群の需要に關する粗漏なる平均的體貌を供與するに過ぎず、その中には貧者も富者も兒童も成人も均等に數へらるゝこと論ずるを俟たざるなり、然れとも尙ほ此の如き統計は吾人の増進的認識の過程に缺く可らざる重要連鎖たり、たゞ吾人の爾他の知識に依り、個々の場合個々人個々階級に關する特殊觀察に依りて

補充せらるべく、批評的吟味に依りて確證せられざる可らざるのみ。

四五四

吾人は既に本譯補の第二冊 **七十八** に關説したる生活資料調達の最古歴史に長く徘徊せんことを欲せず、然れども原始時代に於ける生活資料調達の困難と不完全とを介して後代のそれを闡明せんが爲めに、こゝに最古歴史を出發點としこれに數言を費さざる可らず、原人は草禾類を培養することもなく、獸肉及び獸乳を知らず、麵麩もなくバターもなく、料理法を解せず從て營養資料を消化し易からしむるの術なし、鹽もなく香料もなく、砂糖も葡萄酒もビールもなく、茶、カフェー及びこれに類する營養資料を知らざりしことは言ふに及ばず、かかる状態なりしを以てその營養の困難なりしこと多く説くを要せず、原人は草根木實、昆蟲、卵及び甲蟲を食料とし、數週間能く飢渴に耐へ得るの必要に迫られ、而して一朝收穫あれば驚くばかり多量に飲食をなせり、その將來の爲めに貯藏品を積集し保藏したるは極めて徐々たる發達に屬せり、營養既に此の如くなればその身心の發達も亦これに順應し最も幼稚なる境を脱せず、その魚類を捕獲し、球莖植物及び穀物を培養し耕作し、野獸を射止め、動物を馴致し

屠殺しその乳を搾取するの術を發達するに及んで、依て人類營養の最も困難なる問題を解釋することを得たり、こゝに於て始めて原人の經濟生活は前時と全然面目を革むるに至り、即ち原人はその未だ曾て經驗せざりし安固を得、供給は豊富となり、人口の増加も可能となり、高尚なる文明を發達せんが爲めに缺く可らざる大共同團體の發展を期することを得たり、然れどもこれを以て營養の困難は尙ほ未だ止まず、何となれば穀物及び獸肉の生産に對しても大地積と愈々巧妙なる勞働及び技術とを必要とし、急にこれを増加せんことは多大の困難と費用とこれなかる可らざりしを以てなり、吾人は更に進んで穀物營養と獸肉營養とが如何に相俟て發達し、相補充し、依て以て如何なる種類の需要が成立したるかをや、精細に觀察せんとなす。

穀粒と多少の鱗莖とは幼稚農業及び進歩農業の發達に伴ひ一般人類の主要食料品となれり、人類は穀物を以て最も容易に保藏せられ得べく最も佳味ある種類の食物に利用せられ得べき營養品を得、而してこれのみを以ても營養に差支なく、若しくは他に少量の副食物を加へて最も適當なる資料を得たり、何とな

ればこの資料の成分は人間生活に必要な含窒分と非含窒分とを完全とは言ふ可らざらんも殆んど遠からざる程度に含窒するを以てなり、生理學上には今日労働者に對し必要營養分として、日々百三十乃至百五十グラムの蛋白質、六十乃至九十グラムの脂肪、三百乃至六百グラムの澱粉を供せざる可らずとなせり、二ブンドの麵麩は約そ六十二グラムの蛋白質、四グラムの脂肪質、五百グラムの澱粉を含めり、幼稚人種が食料となせる *Sagopalme, Dattelpalme* (共に棕櫚屬)、*バナナ* 及び食用果樹は容易に採集することを得れどもその滋養分劣等にして、生活に必要な含窒分遙かに麵麩に及ばず、爾他營養資料を多量に加味すると必要なり、これ等の人種には何處にこれを求むるも、穀物及び麵麩を生産する高尚なる文明を發展せる人間を發見すること能はず、穀物及び麵麩を食料品となすに至れることは既に夙に大なる進歩と認められたり、*ホメール* は蓮の實を食料となせる羸弱人種と五穀を常食とせる人種とを比較し、前者が任務及び義務を悉く忘却して顧みずと言へり、今日人類が亞米利加及び地中海沿岸に於て主として玉蜀黍を食し、亞弗利加に於て *Dihle* 若しくは黍を食し、東部亞細

亞に於て米を食せるもの合して七億五千萬人、歐羅巴、亞米利加及びその殖民地にて小麥ライ麥大麥燕麥を食せるもの約そ五億人に上れるは、これ幾分それぞれの自然及び氣候の條件に順應し、而して更にそれにも増してこれ等國民の文明上の努力に順應し、即ち徐々として模索しつゝ愈々適當なるものを求め、土地及び氣候の許す限りに劣等なる穀物より優等なる穀物を栽培し耕作するに至れる結果なり、米は蛋白質及び含窒分を含有せることの乏しき殆んど馬鈴薯と異ならず、然れども米は支那、日本その他にありては收穫極めて多く、魚肉、菜豆、豌豆及び乾酪と併せ用ひて以て能く生活を維持せしむべき營養分たり、馬鈴薯は同一地積にては穀物よりも多大數の人を生活せしめ得べく、歐羅巴の諸地方にては貧民の主要食料品となれり、然れどもこれより生活に必要な蛋白質及び澱粉を得んが爲めには、日々五キログラム乃至それ以上を食せざる可らず、これ愛蘭土人將た又多くの獨逸人を生理學的に退化せしめ、胃腸を不健全に膨大せしめずんば止まざるものなり、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し、二百五十乃至五百グラムの馬鈴薯は労働に従事せる成人にとりて如何に健全なる

分量ならんとも、而かも五キログラムと云ふが如き多量の馬鈴薯は甚だ有害なり、千八百六十六年ヘルマンの調査せる所に依れば、獨逸人は佛蘭西人に比し馬鈴薯を食するの量三倍乃至七倍せりと云ふ。

穀類も亦營養力に於て均等ならず、大麥ライ麥及び小麥の比は六十對七十五對百なり、これと等しく穀物調理のことは等閑に附す可らず、麥粉及び麥粉食料の製造、麵粉製造の技術は穀物營養力を根本的に増大せしめ改善せしめたるものなり、麵粉は粉麩及ビポレンタ(麩)と比し遙かに營養力に富めり、麵粉は殊にそれだけにて爾他食料品と混ざることなく食料に供せられ得べく、尙ほ爾他一切の食物と併せ用ひて不可なるなし、尤も第十九世紀の初葉に於て屢々慣例なりしが如き、單に軍用麵粉三ブツド以外に何等副食物を供せられざる兵士は身體上に頹廢を免かれざることは即ち眞理たるべし、麵粉製造のことは何れの言語及び宗教に於ても神聖なるものと認められ、麵粉は一切食物の總合と見做されたり、されども文明史上久しく酵母の發明なく、粗製麥粉より焼かれたる極めて硬質の麵粉ありたるのみ、酸酵過程は始めて麵粉を輕ろく柔かに且つ

一層消化に適合せしめたり、今日吾人の所謂白麵粉は酵母と酸酵過程との進歩に依り、千六百五十年以來始めて巴里及びロンドンにて製造せられたるものなり、白麵粉を食料となせるものは英蘭に於て千七百六十年に人口の四十ブツセント、千八百三十九年にその六十六ブツセントをなせり、今日と雖も尙ほ獨逸及び東部歐羅巴に於ては重き黒麵粉及びライ麥麵粉が寧ろ多く食料とせられ、小麥及び白麵粉常食者の主要國たる佛蘭西に於ても尙ほ六百萬の人口は主として粟を食料となせるの狀なり。

千六百年乃至千八百五十年の時期に於て、概して中部歐羅巴の諸國土にありて人口一人宛年平均穀物消費額は二百六十乃至三百六十キログラムと概算せらる、尤もこの統計には幾分ビール醸造用と麵粉製造用とを混入せること勿論なり、この時期は餘りに極端に麥粉及び麵粉を食料となせるもの、爾後千七百九十年乃至千八百六十年の間はこの状態屢々馬鈴薯に依りて惡變せられたり、當時の營養は蔬菜、魚肉及び脂肪に依りて十分に補充せらるゝこと能はざりき、田舎住民はその自足經濟の結果として、獸乳及び乾酪、青魚及びこれに類する

食料品に依り不十分ながらに尙ほ補充せられたること言ふに及ばず、プロイセンの都市にありては千八百三十八年乃至千八百六十一年の間、人口一人宛約そ百四十四乃至百六十三キログラムの小麥及びライ麥を消費したり、今日の統計に徴すれば、麵麩及び麥粉食料に消費せらるゝ穀物は、巴里に於て百七十、ベルリンに於て百八十五キログラム、英蘭全體に於て百六十五、獨逸全體に於て百四十乃至百七十一キログラムと計上せらるゝ、デードの調査に依れば、劇しく勞働せる男子は二百七十三乃至三百六十五、比較的輕易なる勞働に當れる男子及び婦人は百三十六乃至百八十二、未成年者は九十一乃至百八十二キログラムに該當せりと云へり、今日にありては爾他營養分の併せ用ひらるゝ額遙かに多量に上れり、たゞその額が一般に不足なきか、將た正當なる量なるかは研究すべき問題に屬せり。

魚肉を食べる文明民族は最古時代にありてその營養最も豊かに、從て又屢々富裕なりき、狩獵民族は最も先んじて獸類の血と肉とを食料として豊富に調達し、獸群を所有せる農民及び遊牧種族は始め肉よりは寧ろ多く乳を食料に供し

たるが、其後屢々非常に肉を食するに至れり、乳は最上の營養手段なり、卵及び肉は食料として能く最小量を以て最大力を生ぜしめ、最も完全に且つ最も急速に人身に同化し、能く久しきに亘りて體力を維持し必らずしも規則的にこれを食せざる可らざるの要なし、聖書に依れば「アブラハム」は三人の天使の爲めに一匹の驢を屠り、「ホメール」に依れば「アヒレス」は三人の使節に三匹の去勢したる羊の股の肉を饗應せり、最も多量に乳及び肉を食料とせる民族は最も敢爲なる侵略者なりき、今日と雖も英蘭の諺には、肉を食料となせる少數の英蘭人を以て米及び穀物を食料とせる數百萬の印度人を征服するに足れりと云ふことあり、印度ゲルマン民族は概してその移轉の間及び其後久しきに亘りて著しき肉食民族なりき、個々詳細なる點に就て云へば肉食の習慣は氣候、職業、動物の風土化等より左右せられ、北方の氣候は南方のそれに比し肉及び脂肪を要すること甚し、(譯者曰、佛教に肉食を禁制するの理由は印度の氣候に在りて存すべきか、果して然らば佛教の日本に渡來したる後、その印度に於けると同一の禁制を勵行するの理由は失はるべし、これに就ては大に研究すべき點もあれど、概して

思想及び制度の輸入に當り、その精神よりは形式に拘泥する場合多きは最も注意すべき點なりと信ず、敢て一言す、肉の輸入は近時に至りて始めて可能となり、而かも制限せられたる方法を出づる能はず、古代にありて大家畜群の發達せるは大なる牧場これありし場合に限り、人口多からず家畜は則ち多く且つ森林に富みてこれに野獸夥しきは、嘗て大に肉の需要を可能ならしめたる條件にして、かゝる場合には貧民階級に至るまで肉の需要ありき、屢々乾燥肉及び鹽漬肉の形式をとり、過量の胡椒と葡萄酒飲用とに依りてや、美味に食料に供し得られたるものあるは言を俟たず、千三百〇八年に於けるフランクフルト・アム・マイン及び千三百二十年に於けるニルンベルヒに對し、一人宛肉の消費量百二十五乃至百五十キログラムとせば恐らく事實と大差なかるべく、ミюнヒェンはその富の程度高かりしも尙ほ千八百〇九年乃至十九年に肉の消費額一人宛百十一キログラムなりき、これ決して少額にあらず、餘りに劇しき労働に従事せざる労働者に對して日々百五十グラム、劇しき労働に従事せるものに對して二百乃至三百グラム、戰場に於ける兵士に對して五百グラムは、今日一般に不足

なき分量否や十二分と認めらる、日々二百五十グラムは一ケ年九十一キログラムに相當す、從て男子、婦人及び兒童に平均して百十一キログラムなるは換言すれば労働者に對しては約そ五百グラム乃至それ以上を意義せり。  
人口の増加、牧場の減少、肉の騰貴、歐羅巴の多數國民階級の貧困—凡そ此等の事情に伴ひ肉食の減退せることは抑々第十六世紀にその端を發し、幾分尙ほ千七百五十年乃至千八百五十年の間に於て一層顯著となれり、殊に農民は日曜日以外には殆んど全く肉食せざることとなれり、肉の消費は田舎に於ては年平均五乃至十キログラムに減退せり、尤も富裕地方に於て將た田舎人にありては、先きに述べたるが如く爾他食料を併せ用ふることに依りてこの状態が幾分補充せらるゝこと言ふまでもなし、然れども肉の消費は都市にも亦減少せり、ライプツヒに於ては千七百七十七年乃至千八百二十年の間年消費額七十八キログラムより五十八キログラムに減じ、王領ザクセンに於て牛豚肉の消費は、千八百三十五年に十六キログラム、千八百五十五年に一四九キログラムなり、ベルリンに於ては千七百七十七年乃至千七百八十四年の間五十六キログラム乃至

六十四キログラム、千八百六十年乃至千八百六十九年の間四十五キログラムの消費あり(肉全體に就ての統計)、而して都市に於ける肉消費額の平均數字は富豪の七十乃至百キログラムと貧民の十乃至二十五キログラムとの結果なり、千八百五十年以來肉の消費量に再び著大の増加あり、農業及び牧畜の改善は今日大牧場を俟たずして多量に秣草を培養することに依り多く肉を供給することを得べし、英蘭に於ては肉の消費は千八百七十年乃至千八百九十六年の間に五十一キログラムより六十一キログラムとなり、佛蘭西に於て千八百四十年乃至千八百九十二年の間に都市は四十九より五十八キログラムに、田舎は十五より二十六キログラムに増加し、ザクセンに於ては千八百五十五年乃至千八百九十七年の間に十五より四十七キログラムに、ドレーヌデンに於ては千八百三十五年乃至千八百九十四年の間に二十より七十一キログラムに増加したり、獨逸全體に於ける増加は千八百七十九年乃至千八百九十七年の間に三十八より四十一キログラムに上れりと概算せらる、たゞこゝにこの進歩に參與せるものが社會の如何なる階級に屬するかは重大なる問題なりとす、中流階級及び上流階級がこの

増加に參せることは確實なり、然れども貧民階級は屢々これに參からず、殊に貧民の脂肪、乾酪、獸乳、蔬菜の消費額が極めて乏しく、且つ穀物及び麵包の平均消費量がその着坐生活法と内臓活動の衰弱との爲めに減退せる場合に於て著しく然るものあり、田舎に於ける成人労働者が都市のそれに比し年々六十乃至百キログラムの麵包を多く食ふことは一般に承認せられ、且つ至當なることと想像せらる。

されば吾人は文明民族の食物がよし若干主要食料品の中に著しき動搖と推移とこれあるにも拘らず大體に於て六千年來相等しく穀物、肉、乳及び蔬菜なりしことを觀察す、根本的變化と稱すべきは調理法なり、益々良好なる食料品及び享樂品を輸致せることなり、而して飲料の發達と普及とこれなり、嘗に蛋白質及び澱粉の分量如何が重要な問題のみならず、それと等しく營養の美味と献立の變化も亦重要なり、文明人は美味と献立の變化とあるにあらずんば食慾を刺戟せず、この故に凡そ刺戟及び享樂の料は漸次に益々必要なる食料となる。獨り最も幼稚なる種族の生活に至りては過去に於ても現在にありても鹽を用



ひず、詳言すれば地球上に無限に而かも不均等に散在し、直に食用に供す可らざる形式にて産出する所の鹽化炭素結晶を用ひず、これ實に消化、食慾、唾液及び細胞の發達を作振し、「ブリニウス」をして言はしむれば、これなくして人間生活を遂げんことは不可能なるものなり、鹽は今日と雖も幾分亞弗利加に於ては極めて稀少なれば、富者を形容するに彼は鹽を食料に供せりと言ひ、少量の鹽を得んが爲めに恐らく一人若しくは二人の奴隸を提供するを辭せず、而かも鹽の供給は既に羅馬人にありては極めて重要なりしもの、この故に餘りに高價なる鹽を供給せる私營鹽坑は國王より沒收せられ、國民一般に廉價なる鹽を供與せんが爲めに國營とせられ、又官吏及び兵士に鹽を供與することより賃銀は悉く鹽貨幣即ち *salutum* と稱せらるゝに至れり、狹義の文明國に於て現に且つは既に久しく食鹽の需要は、苛税の爲めに騰貴せざりし限り、一人宛八乃至十五ブンドの限界内に動搖せり、英蘭にありては鹽税廢止の後千八百二十五年これが需要に著しき増加を來せり、獨逸に於けるものは現に七乃至八キログラム、而して既に第十八世紀の間にプロイセンの鹽特權の爲め八歳以上のものは悉く

強制的に十四ブンド即ち七キログラムの鹽（家畜飼養料としての鹽は別とし）を總價格にて當時の五乃至十グロッシュを以て購買せざるを得ざりき、「ポールド」の言ふ所に依れば鹽の消費額は今日佛蘭西に於て八キログラム、英蘭に於て二十二キログラム、而して兩國民の筋力の相異はこれに基せりてふ見解を引證せり、こゝに掲ぐる英蘭の統計が果して正當ならんか、技術上に消費せらるゝ鹽をもこの中に含まざるか、余は疑なき能はず。

印度の香料、胡椒、石竹、肉荳蔻、生姜の西歐に傳はりたるは實に歷山の遠征軍以來のことなり、「ブリニウス」に依れば當時胡椒は金と匹敵し、第十六世紀より始めてその相場は漸次に下落し、今や生活の必需品となり、廣く一般社會に使用せらるゝに至れり、砂糖も亦これと等しく、古代及び中世時代にありては糖蜜以外の形にては知られざりき、南歐羅巴及び西印度に始めて甘蔗を栽培したるものはアラビア人なり、第十九世の間に始めて菜糖より砂糖を製造するの術發明せられて、その價格は低廉となり、爲に今日に於ては英蘭の貧民家庭にも使用せらるゝことゝなれり、然るに中世時代にありては蜜の一壺若しくは

砂糖の二三ブランドは國王相互の贈答物にして、千六百年に及ぶまで一般に砂糖は高價なる藥劑として少量づゝ藥劑師の許にて購買せられたる程なりき、今日と雖も一人宛年消費量は諸國土間に甚しき相異を示せり、即ち伊太利に於ては三、露西亞に於ては三乃至四、埃匈國に於ては六、獨逸に於ては九乃至十二、佛蘭西に於ては十一乃至十二、シツイツに於ては十六、北米合衆國に於ては二十五乃至二十九、大英國に於ては三十五乃至三十八、濠洲に於ては五十キログラムをなせるが如きこれなり、獨逸にありては千八百四十年に二四、千八百六十年乃至六十四年に四七キログラムなりき、獨逸砂糖工業の販賣擴張を希望するものが好んで主張する所を聞けば、全世界が西歐羅巴の如く砂糖を食料に供することゝなれば、現在の五六十億キロの砂糖に代ふるに少なくとも五六百億キロの砂糖を必要とするに至るべしとなり、砂糖使用の普及は極めて好ましきこととなり、何となれば砂糖は最も良好なる營養品にして、最小量を以て能く生活に必要な最大量の澱粉を供し得べく、若し胃腸が大量の麵包と馬鈴薯とを十分に同化するの力なきが如きものに對しては愈々以て推舉せらるべき營養品

たり、獨逸に於ける砂糖消費額がシツイツ、英蘭及び其他に及ばざるの原因が、果して獨逸の貧弱なる富と砂糖相場の高きとにあらんか若しくは確固たる消費習慣にあるべきかは余敢てこゝに決答を與へんとせず、(譯者曰、若しそれこの原因を富の程度、相場の高低等に歸し而して以て萬全なる解決を遂げたりとなすが如きは、經濟現象に對する精神道德的及び社會的觀察を忘却せるもの、これ單に一例に過ぎざるのみ、その由來を討尋し、シモラーが概論に提供せる所の立脚點に察し至らば、この注意の偶然ならざるを知ると同時に、社會觀察の上に從來見地の當さに反省すべき所少なからざる所以を認むべし)。

人間の營養に對しこれと等しく重要となりたるは、油及びバターの使用額増加、益々多くの蔬菜、果實、サラダの供用及びこれが精製調理—千五百年巴里に於て一般に知られたる玉菜の種類は六種にして、千八百六十年には五十種に上れり—次では茶、カフフェー、カカオ並に精製アルコール飲料主として葡萄酒、ビール及びブランデーの使用なり、喫茶のこと支那にありては數千年來の發達に屬せり、例へば低濕地に於けるが如く、泉水が屢々飲料に供す可らざる場合

には、喫茶を以てこれに代ふるは殊に有效なり、歐羅巴にありては茶は徐々として第十七世紀及び第十八世紀の間に主として和蘭及び英蘭に普及せり、茶は能く精神を興奮せしめ而かも酩酊せしめず、その価格は一ポンドが第十七世紀に於て一五乃至三磅なりしが、今日は下落して一シルリングとなれり、大英國に於けるこれが消費額は千七百六十六年に六百萬ポンド、千八百〇一年に二千四百萬、千八百四十五年には七千五百萬、千八百八十八年乃至九十年に一億六千六百萬、千九百年に二億四千九百萬ポンドに上り、人口一人宛千八百九十一年乃至九十五年の間二五キログラムなり、而して當時に於ける爾他國土の消費額は如何と察するに、濠洲に於て三三、北米合衆國に於て〇六、ニールランドに於て〇五、其他のや、重要なる諸國土に至りては下りて二十乃至四十グラム、獨逸にありては屢々茶に代ふるにカプフェー及びカカオを使用したり、カプフェーはアペシニエン及びスーダンより起り、カカオはメキシコより産せり、カプフェー及びカカオの二品は第十七世紀に於て藥劑品として歐羅巴に傳はり、第十八世紀には奢侈食料品と認められ、第十九世紀に及んで營養品及び享樂品として一

般に使用せらるゝことゝなれり、カプフェーの消費額は獨逸にありて千八百三十五年乃至千八百九十年の間に一人宛一キログラムより二三キログラムに増加し、二三聯邦にありては三乃至五キログラムに達せり、カプフェー將たその代用物は今日貧民に對しても屢々享樂品たり、以て麵麩、馬鈴薯及び麥粉等の困乏營養にも多少の刺戟を供し能くそれに堪へ得せしむ。

果實の液及び飲料物、即ち醱酵に依て造られ酒精分を含み、精神を興奮せしめ、憂苦を忘れしめ酩酊せしむる所の飲料は、原始時代以來發明せられ而して飲用せられたり、然れどもかゝる飲料を精製し保藏し將たこれが價格を低廉ならしむることは、比較的高尙なる文明の發展ありたる後に屬せり、葡萄の栽培は古代に於てカスピアン海の沿岸よりシリアを越えて地中海沿岸に及び、其後地中海沿岸より佛蘭西及びライオン沿岸に普及したり、これ等領域は今日に至るまで葡萄酒消費國として主要の地位を占め、千八百八十六年乃至千八百九十年の間、その人口一人宛年々葡萄酒消費量は五十乃至百十五リートルに上れり、然るに爾他國土は埃匈國にありても僅かに二十二、獨逸にありては五七、露西

亞にありては三三、大英國にありて一七リリテール一人宛に過ぎず、「ヘイン」が古  
 代世界の全範域に葡萄栽培が漸次に普及したる行程は近世時代のそれと毫も相  
 等しからずと言へるは當然なり、何となれば亞米利加及び南部亞弗利加の葡萄  
 栽培はこれに就て多く證明する所なければなり、麥芽及びホップよりビールを醸  
 造することは一層容易に普及し得たり、ビールは最古時代にありては不完全な  
 る自家醸造に過ぎざりしが、現代に於ては殊に大企業家の完全なる技術的技巧  
 生産物となり、葡萄酒なき國土にありては絶好の飲料となれり、ビールは精神  
 を興奮するの外又營養に效あり、然れどもビールを飲用せるものは爲めに肥満  
 し身體の活動敏捷ならず、ビールの消費は第十九世紀の間獨逸にありては一人  
 宛年數リリテールより百リリテール以上に増加し、北米合衆國に於ては千八百四十  
 九年乃至千八百九十一年の間に六リリテールより五十八リリテールとなり、佛蘭西  
 にありても千八百三十年乃至千八百九十一年の間に十リリテールより二十二リ  
 テールとなり、大英國は百三十六、ベルギエンは百七十七、デネマルクは百〇三  
 リリテール、而して西班牙及び伊太利の如き南方國土にありては僅かに一乃至二

リリテールをなせるのみ。

狹義のブランデーは古代にありては全く發明せられざりき、その純アルコール  
 含有量は三十乃至六十プロツェント、而して葡萄酒は八乃至二十、ビールは一  
 乃至十プロツェントをなせり、ブランデーは第十二世紀及び第十三世紀以來藥劑  
 として製造せられ、spiritと嘆稱せられ、上戸の輩より一切の惡魔に對する救助  
 手段として好愛せられたるが、その葡萄及び果實より製造せられたる純粹なる  
 もの次で穀物より精製せられたるものは、第十九世紀に至るまで獨り上流社會  
 に飲用せられたるのみ、現代工業進歩の結果としてブランデーが始めて馬鈴薯  
 及び爾他のありとあらゆる原料より廉價に製造せらるゝに及んで、廣く社會の  
 享樂資料となり、貧民に至るまでこれを飲用することを得、粗食者に對しても  
 若干時間は能くその力を増大し、好情調を生ぜしむるの效果あり、若しそれ現  
 に三乃至七リリテールの純粹アルコールが毎一人年々に消費せらるゝこと、例へ  
 ば獨逸、佛蘭西、ベルギエンに於けるが如きは、疑もなくブランデー消費の不  
 健全なる普及と言ふことを得べし、ブランデーは精神を醗酵せしむること急速

に、それ自らに且つ不健康なる混合物に依りて身體の健康を毀り、貧民階級に對しては實に眞正ベストとなれり、ブランデーは貧民の營養缺乏せるにも拘らず人爲的に心臟の活動を興奮せしめて以てこれを狂せしめ、愈々活力を消盡し早老せしめずんば止まず。

則ち然りと雖も酩酊の罪惡、換言すれば即ち精神を酩酊せしむる飲料を多量に且つ屢時に享用するの罪惡は單にブランデーのみにその責を歸す可らず、聖書には「ノア」が第一期の葡萄摘收の後に酩酊したりとあり、アリア人はその荷物の間に酩酊し、これと等しく希臘人及び羅馬人、ゲルマニン及ビスラーヴンは、ブランデーの發明未だこれなかりし久しき以前に、既にこの酩酊の罪惡に陥れり、然りと雖もビール及びブランデーが現代に容易に且つ廉價に生産せられ、容易にこれを使用することを得る結果、酩酊が屢々一般的國民的罪惡となれることは言ふに及ばず、現に大英國、佛蘭西及び獨逸に就ては、その國民所得の六分の一は酒精飲料の爲めに支出せらるると言ふことを得べきも、かくの如き事例は嘗て何處にもこれを求む可らざりき、余はこれに關する「マルホール」

の概算を引用し、千八百九十五年二三國土に於ける飲料消費額が爾他の主要なる營養種目の支出に對し、百萬マルクを單位とし如何なる割合をなせるかを揭示すべし。

穀物	肉	飲料	搾乳經濟ノ產物	種々の營養料	合計
大英國	一二五一	一八六六	一一二八	一六八一	七八二二
佛蘭西	一九四八	一二七一	九〇二	一四九七	六九七一
獨逸	二〇九一	一四七六	一二七一	二〇三〇	八三二四
奧地利	一五五八	九二二	七三八	一一一〇	五〇〇三
伊太利	九二二	三六九	四一〇	七七九	三二一九
シユワーツ	八二	一〇三	九二	一〇三	四三二
北米合衆國	一八四五	二〇四五	一一九二	一七四三	一〇一六四

或る學者は千九百〇二年獨逸に於て消費せられたるアルコール飲料の價值を約そ三十億マルクと計算し、その年々増加する消費の七十プロツェントがブランデーと關聯せること、この害惡が上流社會より貧民社會に傳染することに依り將た放恣なる青年勞働者の飲酒癖に依りてその底止する所なかるべきを主張せ

るものあり。

こゝに取扱ふ所が需要將た國民習慣の最も不判明なる一問問題たることは疑  
あらざるなり、若し酒精飲料の爲めに支出せらるゝ所得の僅かに半ばが優良な  
る食料品及び高尚なる目的に向て投ぜらるれば、これが結果は實に推し測られ  
ざるものあり得べし、凡そ教育、教化、改善制度の手段、高尚なる欲望の薰習  
はこの目的の爲めに當然施設せられざるのらず、國民の富の増進、正當なる酒  
舗警察、勞働者組合制度及び廣く社會の洞察力の昂進は相俟て以てこれが爲め  
に大なる効果を擧げ得べし、その効果が忽ちにして實現せらるべきか將た數代  
及び數時代の後に始めて期待せらるべきかはこゝに豫じめ斷定すべからずとす。

然りと雖も吾人は尙ほ概して、飢渴、趣味及び美的精神が恐らく數千年來大  
體に於て食料品及び享樂品に對する需要を正當に發達せしめたるを、而かも趣  
味及びその過誤、營養の秘密に關する無知識が屢々人間を驅て左道に陥れしめ  
たることありと言ふことを得べし、全種族及び全民族、全階級の營養屢々その  
當を缺き、單に胃の腑を充實すれば食物の營養力に就ては顧慮せず、或る種の

享樂品及び刺戟物の危險なるを知らざるの事例乏しからず、僅かに最近六十  
年來生理學の發達ありて凡そ此等の關係を闡明し、その効果は殆んど未だ社會  
民衆一般には行はれざれども、その將來營養に影響を及ぼすべきは確實にして、  
食料品に對する需要も亦これを以て益々進歩を來たすべし。

人類營養の發達史上一方に幾多の過失と失敗とこれなきにあらざれども、他  
方に尙ほ大なる進歩あることを記述せざる可らず、農耕及び園藝、營養品工業、  
保存法(罐詰等)、料理術及び商業の發達は、既に久しき以來人間に供與するに大  
體に於て優良にして多面的に且つ變化に富みたる食料品を以てしたり、慣習及  
び美的感情は食時の方法形式を醇化し且つ高尚ならしめたり、營養は個々職業  
及び活動に對しそれぞれ相應の分化をなせり、而して上流社會に發達せる進歩  
の一部分は又既に貧民階級にも傳播せり、もとよりその傳播せる程度に至りて  
は未だ理想的と言ふ可らざるも、又以て看却す可らず。

余はこの關係を明かにせんが爲めに、醫學博士「グロートヤーン」が最近營養事  
情に關し精緻廣汎なる研究を遂げたる結果より數項を引用附説すべし、「グロ

トヤーンは概して一地方的なる舊營養體型が漸次に解體せんとすること、それが一地域の營養資料に應じて區々として一定せず、多く單調にして而かも十分なりしことを假定せり、これより富裕者の食物に觀るが如き變化に富みたる近世的體型を發達し、この近世的體型は量に於ても質に於ても合理的なり、田舎式舊營養體型殊に田舎労働者の營養體型は、田舎人が苟くも市場に販賣し得るものは悉くこれを貨幣と交換せざる可らざるに至り、從て卵、乾酪、乳、家禽、豚肉、脂肪は田舎にて消費せらるゝこと屢々過去に及ばず、依て惡變し、これに始めて田舎人の主要食料たる麥粉及び馬鈴薯はこれを補充すべき爾他資料を失ひて不合理となり不十分となれり、高貨銀を得る所の労働者は多く肉、卵、乳等を食料とし、富裕者が自由に撰取する所の複雑なる良營養に讓らず、然れども工業労働者の大多數は尙ほ過渡時代に在り、粗糲單調なる舊農民の食物を捨てんとして未だ富裕者の變化に富みたる良食物を供用すること能はず、彼等は最早馬鈴薯、麵麩、油及び蔬菜を十分に採取せず、而して未だ肉、小麥粉、麵、バター及び砂糖を十分に使用せざるなり、貧民階級が自然物經濟及び從來

社會秩序關係より解體し、自ら自己に依頼せざる可らず、貨幣經濟を基礎として新たに生計を立てざる可らざることは、營養に就ても亦實に重大問題たり、幾代經過する間に討究を重ねて始めて漸次に満足すべき解決を遂げられざる可らざるなりと。

吾人は先きに營養品に對する需要及びこれが原因に就て論述したる所と、グロトヤーンのこの陳述とを併せ考へ、こゝに次の如く言ふことを得べし、曰、民族及び階級の營養は體型的のものなり、屢々數百年間殆んど變化することなき現象なり、一面には自然關係、國內生産及び商業に依り、他面には習慣及び富の状態に依て規定せらる、換言すれば一面に營養資料の相場及び生産費より、他面にはこれが爲めに使用し得べき所得より規定せらると、この二要素及びその相互作用よりその時々均勢狀態成立し、當該國民及び階級の慣習、習慣及び生計に固定し、この故に又現狀固執の情勢を以て苟くも變化に抗爭せんとす、殊にこの均勢狀態にして十分に且つ美味なる營養分を供與する限り、人口に變動なければ、營養料に對する需要に甚しき昂進を來たすべきことも思ひも

寄らず、恐らく個々の種族及び民族、個々階級及び個々人が個別に且つ一時的に過大營養を採ることは則ちこれなきにあらず、然れども大體に於て必要にして且つ需要せらるゝ蛋白質及び澱粉の採取量は與定的のものにして、餘りに甚しく増大すること能はず、さればとてもとより欲望は絶えず昂進し、營養資料をして愈々變化に富み、複雑にして醇美ならしめ、享樂品及び刺戟物を益々多様にし、飲料を益々多量に且つ醇精ならしめ、ありとあらゆる美的刺戟及び贅澤を食卓上に供へんとするの傾向ありて存せり、これに依り富裕階級の需要は爾他一般社會のそれと全然相異し、これを満足せんが爲めに遙かに多大の貨幣手段を必要となす。

さて又人口の増加、生産力増大の困難に依り屢々需要の減退し惡變することあり、貧民階級が高價なる食料品を購買するの力なく、一時的現象として若しくは持久的現象として營養狀態惡變し、少數富裕者が高尚なる文明の要求すべきが如き營養の醇化を效すこと能はざる場合は決して稀有の現象にあらず、近時舊文明國土の多く然るが如く、事情果してこゝに陥れば、到底は富の一般増

進に依り、技術の改善及び世界商業の發展に依りて始めて、常に享樂品及び醇精品に對するのみならず又主要營養資料に對する需要の著大なる昂進を期し得べき外あらず、既に今日國民の多大數階級が陥れる營養惡變の大危険は生理學的見地より觀るも明白なる事實なれば、一切の努力はこの改善に向て邁進せざる可らず、改善の要求する點は、一、營養資料に對する正當なる洞察を將たその合理的供用、享樂品主としてブランドー飲用に關する道德的自制、二、必需品を供給し得べき迄に生産及び商業を進歩せしむること、而して三、主として所得分配を改善し、貧民階級も亦良營養品に對し能く支出し得るの力を備ふべきこと是れなり。

論じてこゝに至りて吾人は所得及び所得分配事情と需要全般との關係に遇せり、これを論究するに先ち尙ほ爾他食料品以外の財に對する需要に就き單簡に數言を附説する所あらんとす。

食料品以外の財に對する需要は原始文明段階に於ては極めて限局せられたり、即ち二三の衣服及び獸皮、粗造の洞穴、二三の機具及び武器は以て人間の欲望



を満足せしむるに十分なりき、文明益々高尚となるに應じてこの需要愈々複雑多端となり、即ち防備安固なる居住、多數の居室、これに幾多の動産を装置し、遂にはあらゆる種類の便利と贅澤とを具備せしめざれば止まざりき、衣服は益々益多様となり、木綿の消費は獨逸にありて千八百三十六年乃至千八百九十八年の間一人宛〇三四より六三〇キログラムに増大し、英蘭に於て千八百六十年並に千八百九十六年に殆んど二〇キログラムに上れり、羊毛の消費は獨逸に於て千八百七十一年乃至九十五年の間に一八より三三キログラムに増加し、英蘭に於て四三より六七キログラムに増加せり、獨逸に於ける絹の消費は千八百六十年より九十五年の間に〇〇三より〇〇七キログラムに即ち換言すれば百三十三プロセント強の増加をなせり、精神的欲望が如何に昂進したるかは紙の消費の増加額よりこれを推測することを得べし、紙の消費額如何と觀察するに、獨逸に於て千八百四十年乃至千八百九十五年の間に約千六百五十プロセントの増加をなし、現に一人宛年平均五キログラム、而して英蘭に於て六キログラム、北米合衆國に於て八キログラムを示せり、吾人はこれ等領域に於ける需要額の

増加を以て早くも得意に文明進歩の見徴なりと主張すれども、こゝに忘る可らざるは、その實に高尚なる文明と富の増進とを意義するは疑を容れざれども、これたゞ所得の僅少プロセントを含蓄せるのみ、從てこれが増加は國家社會の總經濟にとりて多大の意義を有するものにあらざること是れなり。  
然れば則ち獨逸に於ける一人宛鐵の消費額が千八百三十四年に五キログラムにして、千八百九十七年に百三十四キログラムに増加したるはもとより誇とするに足れども、これ疑もなく獨逸人が技術上に非常の進歩を效し、非常に優良にして且つ夥多の機械と鐵材建築物とを有するとを證明すれども、決して獨逸人の富が五對百三十四即ち二千六百八十プロセント増加したることを證明せざるなり、吾人は増加極りなき人口に應じ、衣服住に於て將た防備手段に於て少なくとも退歩を來さず且つやゝ進歩を效し、旅客及び一切の貨物を益々迅速に輸送せんが爲めには、鐵及び爾他の材料を以て愈々複雑に愈々高價なる經濟裝置を備へざる可らず、吾人（獨逸人）がかゝる裝置を現に具備し而して大體に於てこれを正當に使用せるは吾人の快とする所なり、然れども吾人はこゝに先き

に本譯補の第二冊末段近世技術の批判に際して掲げたと同様の疑問を發せざる可らず、即ち大裝置そのものは人生を益々複雑に困難に且つ愈々競争多からしめ、人生の内外幸福そのもの並に一切所得の過半を支出すべき標的たる營養及び住居の改善はこれを以て殆んど供與せられざりしことは是れなり、營養及び居住の改善は現に期待し得べきことにして、從來と雖も恐らく或る程度にはこれなかりしにあらざれども、決して生産裝置の増進と相伴はざりき。

**百七十七**

需の要の分拆、所得統計及び家計豫算より觀たる需の近世總體貌、個々人及び國民の需は所得に依りてその額を規定せらる、需額が所得額に越加すれば、享樂財は容易に需せられず、所得額に對して遙かに及ばざる場合にも概して需せられざるなり、何となれば所得より控除せらるゝ分も亦資本として確實なる投資に對し戰爭の目的その他に對して需せらるればなり、所得の多少は需を測定すべき尺度たり、一國民の諸社會階級の間に所得が如何に分配せらるるかは以て必需品及び贅澤品に對する需の強弱に影響す。

吾人は所得及び所得分配、所得の本質及び所得の原因に就ては後段に深く論

究する所あるべし、こゝには單に所得の高と分配とに關し若干の注意と統計とを掲ぐるに過ぎず、所得統計と相並びて家計豫算も亦重要な資料なり、個々家計豫算が最も重要な經濟上の目的に對し如何に分配せらるゝやの状態は、以て當該家計の緊急状態、その等級、及びそれぞれの目的及び生産部門に對しこれを充足すべき一切手段が如何に分配せらるゝやに關して確實なる證據たり、家計豫算の精密なる調査は千八百四十年代及び五十年代に於て「ルブレ」、*「デュグベチオ」*及び其他學者の努力に俟ち、爾來統計學及び實際經濟的國民事項の獨立部門となり、これが結果は益々改善せられ、需の具體的理論並に爾他多くの目的に對し重大なる意義を有するに至れり、吾人はこゝにこれが調査の技術を叙述す可らざれども、その最も重要な結果はこれを利用せざる可らず。

國民所得の多寡と分配とに關する調査は抑々最近二百餘年來の發達に繋がり、絶對的確實なる結果には未だ嘗て到達するに至らず、常に幾分捕捉し得べき概算及び推定に依頼せざる可らざりき、幾分は單に狹義の經濟的生產者若しくは家族の所得、幾分は一切の營利業に従事せる物理的（自然的）及び道德的人格の

所得、屢々單に納税主體の所得を知れるのみ、國民及び國民の一部分が有する所の所得總額の統計は則ちこれより演釋せるものなり、人を據として所得の總計を求めんとするこの方法以外に、又物を據となせる方法あり、即ち消費せられたる財の主要群、食料、燃料、住居等を總和し以て國民所得を算定せんとするものは是れなり、余はこれ等方法の詳細をこゝに深く立ち入りて説明すること能はず、加之個々統計數が如何にして得らるるかを叙述するとも亦恐らく當眼の問題外に逸すべし、余は單に「ギッフェン」、「デュバン」、「フォーヴィル」、「ソニートベール」、「リメリン」、「コルマン」等の如き第一流の權威の研究結果を襲用し、而して常に寧ろ高きに失せんよりは低きに失すべき總計數を掲ぐることを主張するに過ぎず、貨幣價值若しくは商品價值が時代を異にし國土を別にするに從て根本的に區々たる限りは、現代の獨逸貨幣にて表示せられたる統計は決して直接に比較せらるべき數量にあらず、然れども若し種々の貨幣價值及び商品價值に依れるこの統計を修正せんと欲せば、これ何等の準據なく恐らく混沌界に陥るべし、この故に後段に掲げらるべき統計に就て注意すべきは、プロイセンに於て千七百四

十年の百マルクは恐らく千八百四十六年の百三十マルク、千八百九十九年の二百マルクに該當せること、從て所得の増加は悉く事實上には外觀より遙かに低率なること是れなり、現に獨逸に於て一人宛所得が三百五十乃至五百マルクにして、北米合衆國に於けるものは千マルク以上と概算せらるればとて、財及び労働に對する購買力として後者が前者に對し恐らく四十乃至六十プロセント多きことを意義すべきも、百プロセント以上も多きことを意義せず、最近調査の「マルホール」の統計は、後段にこれを附録すべきも、余は大體に於て寧ろ多きに失すと信ず、プロイセンの統計に就ては余は幾分「ソニートベール」の調査結果を引用し、幾分彼の方法に依て計算したるが、余は寧ろこれを低きに失すと信ずるもの、而かもこれを修正せんことを欲せず。

二三國民及び國家の國民所得概觀

國民所得

人口百萬單位

プロイセン

千七百四十年

二・二

二二〇

一〇〇

額百萬マルクの單位

一人宛マルクの單位

四八七

需の要、所統計及政治家算より観るた近世總體貌

千七百八十六年	五・四	六四八	一二〇
千八百四十六年	一六	二四〇〇	一五〇
千八百七十二年	二四	六九〇〇	二九〇
千八百八十八年	二八	九三〇〇	三三〇
千九百九十九年	三二	一一一五〇	三五〇
佛蘭西			
千八百	二七	四二〇〇	一五五
千八百四十六年	三五・四	八〇〇〇	二二五
千八百九十二年	三八・三	二〇〇〇〇	五二二
英蘭(イ)及び(ロ)從テ又聯合英王國(ハ)及び(ニ)			
(イ)千六百八十八年	三・五	八七〇	一五七
(ロ)千八百二十二年	一一二	四二五七	三四〇
(ハ)千八百四十三年	二七	一〇三六〇	三八一
(ニ)千八百八十一年	三五	二四〇〇〇	六八五
北米合衆國(人口調査に依る)			
千八百五十年		七一三五	三〇八
千八百七十年		三〇〇六八	七八〇
千八百九十年		六五〇三七	一〇三六

四八八

格 價 び 及 値 價

千八百四十年	一・六	二三六	一四七
千八百六十三年	一・七	四七三	二七四
千八百八十三年	一・九	七〇二	三五六
王領ザクセン			
千八百八十年	二・九	九〇〇	三一〇
千八百九十四年	三・七	一六〇〇	四三二
オルデンブルグ			
千八百六十五年	〇・二四	四四	一八〇
千八百七十五年		五三	
千八百八十五年		六二	
千八百九十年	〇・二七	六七	二四三
ハンブルヒ			
千八百六十六年		一二九	四八八
千八百九十二年		四一五	六四八
ブレーメン			
千八百四十七年—五十年		三〇・七	三五六
			四八九

千八百九十一年—九十五年

一三・五

四九〇

六六〇

尙ほこゝに余の附言せんとするは、「マルホールが調査せる統計にして、それに依れば百萬マルクを單位として全獨逸は千八百四十年に七八五八(即ち一人宛二百四十マルク)、千八百六十九年に一五〇六九(即ち一人宛三百七十二マルク)、千八百九十四年に二五九三七(即ち一人宛五百〇五マルク)、大英國は千八百九十五年に二九一七二(即ち一人宛七百三十八マルク)、佛蘭西は二四五八〇(即ち一人宛六百四十マルク)、露西亞は二〇五三八(即ち一人宛百九十五マルク)なり。

所得が個々人、個々家族及び階級に如何に分配せらるゝやを數量上確實に表せんことは國民所得を計算し概算せんことよりも遙かに困難たり、僅かに複雑多岐なる所得税の賦課はこれに對し幾分有效なる證據を示すものなり、然れども所得税は概して單に國民の一部分に賦課せらるゝのみ、所得税を賦課せらるゝものと雖も多くは事實上にその全所得を計上せられずして僅かにこれが一部分に過ぎざるなり、課税上の所得統計は國民の全階級に互りて事實上の所得額

に及ばざること十乃至五十プロセントなり、尙ほ納税人名簿には—道德的人格はもとより別とするも—比較すべからざる納税主體あり、租税は對人的なり、然れども貧民階級にありては—家族には—ザクセンの租税、將た又プロイセンの租税に於ても嘗ては殆んど一般なりしが如く—屢々二乃至三人の納税人あり、これ蓋し夫、妻、一人一人の兒童が別々に課税せらるゝが故なり、然るに上流階級にありては概して家長のみ納税人たり、然れば則ち廣く家族の所得が調査せらるゝ場合にあらざれば、吾人は恐らく比較し得べき主體を捕捉すること能はざるなり、然り而して吾人は所得に關する詳論主としてその歴史的變動は後段の所得論に譲るとしても、苟くも所得分配の方法に關し、數量的寫象をこゝに明確にせざる可らざるなり。

余は主としてプロイセンに限るべし、プロイセンの納税人(自然人)統計は下表の如し。

格 價 び 及 値 價

十萬マルク以上の所得を有するもの  
九千五百乃至十萬マルクの所得を有するもの

千八百九十二年  
一六五八  
五五二二六

千八百九十九年  
二三三一  
六八八七  
四九一

三千乃至九千五百マルクの所得を有するもの	二六〇一〇五	三一九九五七
三千マルク以上の所得を有するもの	三一六八八九	三九〇九五七
九百乃至三千マルクの所得を有するもの	二・一三 百萬	二・七〇 百萬
三千マルク以上の所得總計 百萬マルク単位	二八九二・三四	三五七二・三六
三千マルク以下の所得總計 百萬マルク単位	二八三一・九〇	三六八五・四五

この故に二百萬乃至三百萬人の小納税人と三十萬乃至四十萬人の大納税人と  
 は總じて略ぼ同額の所得を有し、小納税人は平均千三百乃至千四百マルク、大  
 納税人は九千乃至一萬マルク、而して大納税人の中には千八百九十九年に百萬  
 乃至千三百萬マルクの年収入を有せる自然人四十九人あり、尙ほ小納税人より  
 も以下に位し納税の義務を負はざるもの、千八百九十九年に二百十五萬人あ  
 り、これ等は約そ四百五十萬乃至五百萬の家族をなせり、余は此等家族の半數  
 が租税の義務を免ぜらるゝにも拘らず九百萬マルク以上の年所得を有し、從て  
 一人宛二百マルク以上の年所得を有することを確信す、然れども上掲の統計表

にて千八百九十九年の國民所得に既に余の計上したるが如く、二千百十五萬の  
 總人員に對して僅かに一人宛年所得百五十マルクと假定せば、その結果は總額  
 三十一億七千二百萬マルクとなるべし、然れば則ち吾人は千八百九十九年に對  
 し次の如き圖式を得。

平均九千乃至一萬マルクの所得を有する約四十萬家族に屬する分	所得總額
平均千三百乃至千四百マルクの所得を有する約二百五十萬家族に屬する分	三五七二 百萬マルク單位
平均六百乃至七百マルクの所得を有する約四百五十萬家族に屬する分	三六八五 同上
	三一七二 同上
	一〇四二九 同上

この總額統計は上の所得概觀に掲げたる數に及ばず、何となれば余は「ソエト  
 ベール」に従ひ課税控除概算の爲めに實際には百分の十の附加をなせるが、この  
 場合にはそれを缺けばなり、上の所得概觀とこの統計との二ツの概算は恐らく  
 根本的に餘りに低きに失すべしと雖も、その割合は思ふに能く正鵠を失はざる  
 べし、即ち國民所得の約そ三分の一はそれぞれ富裕階級、中産階級及び貧民階  
 級に分配せらるゝ譯なり。

「ソートベール」の計算に依れば、千八百八十六年聯合英王國に於て三千マルク以上の所得を有するものは全國民所得の二分の一をとり、プロイセンにありては上述の如く約そ三十三プロセント強に過ぎず、資産分配の比較的均等なる獨逸の小聯邦に於てはその割合決してしかく多からず、而して極めて富裕なる小領域にありてはそれに二倍せる割合を示し、例へばハンブルヒ及びブレイメンにこれを觀るが如し、ブレイメンに於ては三千マルク以上の所得を有するもの千八百九十九年に全所得の六六二プロセントを占めたり。

さて吾人はこれ等の統計、殊に差當り全國土に關する統計より需要に對して如何なる斷案を下すべきか、差當り余はこゝにも上陳の制限を反覆せん、即ち富と需要とは最近二百年來貨幣の上にては一人宛二乃至四倍したれども、事實上には決してしかく増加せざると是れなり、然れども最近五十年に於ける統計の歴史的變動は需要増加の額を殆んど正當に表示するものなるべし、何となれば貨幣價値の變動しかく甚しからず、需要せられたる財は幾分は下落し又幾分（住居、肉及びその他）は騰貴したればなり、千八百年の統計は以てこれより多く

の斷案を下さんには餘りに限局せることを免かれず、千八百年乃至千八百五十年の統計は一般に富の程度が多少の進歩をなし而して殊に貧民階級の地位が悪化せることを表示せり、千八百五十年乃至千九百年の統計は技術及び社會全體の富が大に進歩せることを表示すれども、又以て需要の増加が如何に諸階級の間に分配せらるゝかの状態を表明せるものなり、食料品需要の増加に就ては吾人既に詳密なる研究をなせり、所得の増加は幾分食料品需要及びその困難にして且つ高價なる調達に對し幾分爾他の欲望に對して好都合なること言ふまでもなし、これを過去と比するに現代は住居及び衣服に於て進歩し、旅行利便に、學校、教育、美術、共同團體及び國家の爲めに支出する所遙かに多し。

然れども大多數のものよりこれを觀れば、所得はその總額に於て一切の需要を満足すべき爲めに犯す可らざる限界たるを免かれず、若し所得にして更に増大し、若しくは財及び給付にして今よりも低廉とならば、大多數者は恐らくその需要を増大すべし、然れどもこの限界將た所得額のこの作用は社會階級を別にしてそれぞれの欲望に應じて影響極めて區區たり、吾人はこゝに至りて國民

の總需要に對し所得分配が如何なる効果を齎らすかを究明せざるべからず。

所得を如何に處置すべきかの決心の出發點は富豪と貧民との別なくそれぞれ所得と個々欲望との割合なり、六百マルクの所得を有する家族も百萬乃至千三百萬マルクの所得を有する家族も、ありとあらゆる經濟上の目的及び欲望に對してその所得を如何に分配すべきか、更に消費と貯蓄とに如何に分配すべきかの問題に遇着す、而して所得額を別にし社會階級を異するも苟くもそれぞれ欲望及び目的の統制（秩序組織）生ぜざればならず、この統制の據は生理Ⅱ自然的必然性にあり、有效なるもの妥當なるもの善なるもの正なるものに對する道德的判斷に在り、個人的傾向及び階級的標準に在りて存し、而して慣習及び模倣これに與て大に力あり、（譯者曰、これ等の論議は本譯補の第一冊に詳説せり、就て觀るべし。）凡そ欲望の昂進、需要の増加は差當り上流階級に起り、その上流階級に限らるゝ間は贅澤と見做さる、然れどもこれを充足すべき資料豊富にして、先づ中産階級これを模倣し、次で貧民階級も亦新欲望を模倣するに及んで、嘗て富者の贅澤なりしもの、遂には一般的欲望となる、何れの階級たる

るに論なく最後の決心を促すものは次の商量なり、即ち必需品の費用如何、必ずしも必要ならざる財を望むべきの餘力如何、個々の需要財はその費用上それぞれの家政豫算に幾何負擔をなすべきか是れなり。

中産階級に屬するものは最も必要なる通常の財を大體に於て悉く調達することを得べし、その守錢奴若しくは奇人ならざる限り、最も缺くべからざる需要を十分に満足することを得べく、場合に依りては個々財の限界效用が殆んど皆無に歸することもあるべし、然れども高尚にして贅澤に屬する一切の目的及び欲望に對して斷念せざるを得ざるべし、住居に關し旅行に關し、自家及び家族の健康に就き、兒童の教育に就きてその欲するがまゝに實現すること能はざる場合なきにあらず、これ等の欲望に關してはその限界效用尙大なる限り屢々斷念せざる可らざるなり、從てその需要も亦緩急に應じて秩序せられずんばならず。

貧民、然り嘗て貧民のみならず、労働者及び小資産者の多數も亦、その最も必要缺くべからざる財に對しても尙ほ購買能力に以て恐らく購買の願望に及ば



ざるなり、多數者はそれぞれ事情に應じて衣食住何れも困乏生活に満足せざる可らず、所謂困乏的消費は今日と雖も社會の大多數者にとりて體型的狀態なり、高尚なる欲望に至りては幾分尙ほ未だ全くその關知せざる所、その既にこれを發達せる限りは幾分これを抑止せざる可らず、幾分僅かに困乏的に辛うじてこれを満足することを得べきのみ、西歐羅巴國民の著大部分は居常かくの如き壓迫かくの如き制限を蒙り、その需要も亦これに準ず、伊太利に於ては、小麦及び玉蜀黍は收穫不良なる後と雖も、オリヅの收穫良好ならずして貧民失職し、從てその購買能力を失へる場合には、相價に騰貴なしと一般に認めらる、貧民救護政策の發達せる國土にありてはこれが手段は幾分貧民自身の需要を補充せり。

富豪はこれに反し、凡そ必要な欲望は豊富にこれを満足し、贅澤品に對しても亦その資料は富に應じて愈々大なるものあり、若しラフォーの繪畫が販賣せらるゝ場合に、これが購買競争者は恐らく全世界に六乃至十六人に過ぎざるべきも、この少數の競争者は何れも「ラフォー」の畫に對し能く數十萬金を投じ得

べき力あり、或は曰、この故に社會の需要は恐らく社會的金字塔の貌にてこれを寫象し得べく、この金字塔の基底には無數の需要者あり一段を昇る毎に需要品の數を減ずと、然れども需要者の數は漸次に減ずべきもその購買力は決してその割合に減せず、否その人數と反比例に増加すべし、需要者の人數の減少はこの金字塔の斜線上に所得の増大に依て相殺せらるべく、かくの如くして購買力を標準とすれば倒景の金字塔となるべし、こゝを以て所得分配の不平等なるに従ひ、愈々益々生産の大部分は富豪の比較的必要ならざる消費然り贅澤的消費に供用せらるゝの結果となる。

「マルホール」は蓋然的概算統計に依り、千八百八十年乃至千八百八十二年の間、若干國家に對して、國民所得の中營養の爲めに使用せらるゝ所幾何、爾他の目的に對して使用せられ得べきもの幾何なるかの概貌を一々案出せんとし、これを以て諸國家の間に於ける富の程度の相異を概要せんと欲したり、この統計は極めて理解し易けれども、尙ほ吾人はこれを獨逸の「マルク」に換算してこゝに引用す、即ち次の如し。

百萬マルク單位

五〇〇

マルク單位

國名	總營業に對する支出	總所得	營業に支出する収入の率	營業以外のものに支出する収入の率	營業以外のものに對する支出一人宛
聯合英王國	九四六〇	二四九四〇	三七・八	六二・二	四二〇
佛蘭西	七七四〇	一九三〇〇	四〇・一	五九・九	三〇〇
獨逸	八八〇〇	一七〇〇〇	五一・八	四八・二	一八〇
露西亞	一〇二二〇	一六九六〇	六〇・一	三九・九	八〇
埃匈國	六四〇〇	一二〇四〇	五三・一	四六・九	一四四
伊太利	三七二〇	六九〇〇	五四・〇	四六・〇	一二〇
北米合衆國	二〇六八〇	二八四〇〇	三七・六	六二・四	三四〇

此の種の計算及び斷案に對し先きに述べたる家政豫算の結果は、これ詳細なる點に於てもとより異議を挿むべき餘地あらんも、尙ほ大に信憑するに足れり、余は次に二つの統計表を引用すべし、第一表は「ルブレ」及びその派の調査に繋かり、百の家政豫算に就き要略的説明を與ふるもの、「シエン」及び「トケ」の編製したるものなり、その計算せる所は即ち個々家政の總支出高に應じ主要支出が如何に分配せらるゝか是れなり。

格 價 び 及 値 價

個々家政の（その分配） 支總支出（配額率）	食 物	衣 服	住 居	燃 料	以上總計	再地一切の支出
五十乃至百フラン	六一・八〇	一六・二	五・四	五・四	八八・八	一一・二
二百乃至二百五十フラン	五四・六	一五・四	六・七	四・七	八一・四	一八・六
五百乃至六百フラン	四九・四六	一六・二	一〇・六	五・二	八一・四六	一八・五四
千乃至千五百フラン	二八・〇	八・〇	六・七	三・一	四五・八	五四・二
二千乃至三千フラン	一九・二	二・二	七・五	二・二	三一・二	六八・九

  

絕對的（その分配並） 支總支出に百分率	食 物	衣 服	住 居	燃料及 燈料	掃 除	以 上 總 計	再 他 一 切 の 支 出
一〇四九マルク	五五・五	一六・四	一四・〇	六・〇	二・三	九四・二	一〇・七
三〇四五マルク	五二・九	一五・八	一三・四	五・七	二・八	九〇	一〇
	一二四六	三一四	五五三	九二	七五	二二八〇	七六〇
	四〇・九	一〇・三	一八・一	三・〇	二・五	七四・八	二五・二

百分率統計の外尙ほ個々項目に屬する絕對的支出額が富の程度に應じて如何に分配せらるゝかを示さんが爲めに、余は千八百八十八年ハッレの家族にして年消費千〇四十九マルク乃至一萬八千二百〇六マルクのものに關し「ハンブゲ」が研究調査したる結果を引用すべし。

五〇一

七九四五マルク	二二二	八六三	一二三四	二二九	二二一	四七三二	三二一三
	二八・〇	一〇・五	一五・五	三・〇	二・七	五九・七	四〇・三
一八二〇六マルク	二八四二	一五五四	四〇六〇	四七〇	六七五	九六〇一	八六〇五
	一六・〇	八・五	二二・三	二・六	三・七	五三・二	四六・九

凡そ此等の統計數には種々の隨伴的原因の影響あり、一地方的及び國民的相場、身分階級的慣習及び地域の慣習、爾他幾多の原因の影響あれども、これに甚大の影響を及ぼせる主要原因は則ち次の如し、曰、家族若しくは國民にして貧困なれば、愈々以て食料品需要を著しとなす、比較的貧困なるものは總支出の五十乃至六十プロツェント、然り、或る場合には(ルブレ)の詳細なる報告に依れば七十プロツェント以上を食料の爲めに支出せざる可らず、これ既に吾人の觀察したる所なり、益々富裕となるに従ひ食料品の爲めにする支出絶対額は二倍し加之五倍す、これ肉及び醇美なる食料は麥粉及び馬鈴薯と比し遙かに高價なればなり、然れども總支出百分率に就て言へば、營養支出額は四十プロツェントとなり、三十プロツェントとなり、尙ほ僅少率に下れり、益々富裕となるに應じて營養支出率は愈々遞減す、これ單に贅澤及び宴會に依りて絶対支出額上に

有效なる良營養資料に對する支出が増加を來たすことは多からざれども、爾他一切の經濟上の目的は支出豫算上に膨脹を來たすこと遙かに容易なればなり、マルホルの統計表に依れば最も富裕なる國民は食料に對しその總支出の僅かに三十七乃至三十八プロツェントを、最も貧困なる國民はその六十プロツェントを支出せり、富の程度に準じ食料品支出の差等は、ルブレの統計表に依れば六十一プロツェントより十九プロツェントに、ハンブケのそれに徴すれば五十二プロツェントとより十六プロツェントに遞減せり。

住居及び衣服に對する支出は食物に次で最も重要なるもの、その率は最も貧困なるものにおいて二十プロツェント以上然り二十八プロツェントに及び、上掲統計表の最も富裕なるものにおいても三十プロツェントを越ゆること多からず、而かもこれが絶対支出額はハッレの統計表に於て貧民の三百〇四マルクより富裕者の五千六百マルクに達せり、從て十八倍強の差あり、然るに食料支出はこの兩豫算に於て一對五の比をなせるに過ぎず、若しそれ百萬富豪が幾多の居住と城砦とを有せるかに思ひ到れば、この欲望の支出が如何に雪崩の如くに膨大する

かを理解すること容易ならん。

則ち然りと雖も差等の著大なること爾他一切の高尙なる目的の爲にする支出に於けるが如きはあらず、この支出の差等は「シェン」の統計表にありて十一プロセントより六十九プロセントに遞進し、「ハンブケ」の統計表にありて十プロセントより四十七プロセントに遞進せり、「ハンブケ」の統計表に於ける差等の絶對的金額は貧民の百〇七マルク及び富者の八千百〇五マルク、從て一對八十の比をなせり、「マルホル」の統計表にありては、食料以外の一切目的の爲めにする支出は最も貧困なる國民一人宛百二十マルク、最も富裕なる國民一人宛四百二十マルクとなれり、この領域（食料以外）は實に富者の主要支出と大願望とありて存する所、富者の旅行、社交、宴會、美術品の享樂及び購入、廐舎及び遊戯、或は又教育費、家僕、伺候醫等は以て富者が敢て中産階級段のものと比し多く食料を要し多く衣服を重ねることなくして、而かもその支出額を數千金數十萬金に膨大せしむ。

もとより經濟的願望及需要の現經驗知識の状態に關せるこの概観は尙ほ不完

全なることを免かれざるべしと雖も、以てその一般的原因と限界と發展傾向とを示すに足れり、この概観は需要を説明し得て、「ボエムパウエル」の次の言に優るや論なからん、「ボエムパウエル」曰、衣服は梵語字典よりも常に遙かに切要に、人の日々需要する麵麩と肉とは一たび購買すれば能く二三年使用し得らるべき削筆刀よりも切要なりと。

吾人の觀察する所に依れば、需要の過半は文明國民にありては既に久しく停滞状態を示し、僅かに時々富の缺乏、財及び貨賃價格等の騰貴に依りて減退せり、然れどもこれと相並びて富、技術的生産の改善、商業の發展と伴て増大せる需要これあり、需要の増進は營養の醇化に在り、爾他一切の高尙なる慾望領域に在りて存せり。

徐々として起り來る所の變動は、その改善なると惡化なるとに論なく、固定して慣習となり習慣となる、凡て神經刺激、感情生活は欲望満足の技術經濟的可能的或る状態に順應し、この故に確固たる生計の發達を效果す、この生計は人間そのものが益々高尙となり、富裕となるに從て愈々確固に、必要缺く可

らざる消費の領域にありては爾他の高尚なる欲望即ち詳言すれば容易に且つ屢時に變動せられ得べきが如き欲望の領域に於けるよりも固定するものなり。これを大體に觀察すれば國民的消費習慣に統一ありて存すれども、これと同じ時に階級的及び個々人的差別も亦あるあり、而して文明と富の程度と益々進むに従て、愈々以てこの差等は苦痛と感ぜらる、模倣將た相互接觸は常時或る程度までこの差等を均勢せんとすれども、畢竟所得の差等は以てこの均勢傾向が越ゆること能はざる限界を規定せざればあらざるなり。

**百七十八** 需要の分拆、需要の個々動搖、吾人は上來の研究に於て、需要が大體上恒常不變にして、習慣の力に依て固定せられ、經濟的生活條件、全文明及び慣習の變動に伴ひ僅かに徐々たる變化を蒙るものなることを假定したるが、この假定の眞理は必ずしも需要が日々月に絶えず小變動を免がれざることを拒むものにあらざるなり、小變動は則ち停滯的狀態なると變動的狀態なるとに別なく起れり、カフェーの消費は北米合衆國に於て千八百七十一年乃至千八百九十五年の間に一人宛六乃至七ポンドより八乃至九五ポンドに増加し、而し

て年々の動搖は〇・五乃至一ポンドなり、ライ麥の平均消費額はプロイセンの都市にありて千八百三十八年乃至千八百六十一年の間殆んど不變狀態にして二二六乃至二三〇ポンドを示したるが、尙ほ或る年度には一八一ポンドに減じ、他年度には二六〇乃至二六四ポンドに増せり。

さてかくの如く需要に變動を及ぼせる原因如何と顧みるに、多少區々として一律ならず、幾分は經濟狀態相等しく所得に變化なくして寧ろ需要せらるゝ商品それ自體の變化を重要となせども、更に重要なるは經濟上及びその他の狀態の相異に基ける變動を以て然りとす。

流行の調子に變動ある限り、或は寧ろ絹布が或は寧ろ毛布が需要せられ、時に飲料品が取捨せられ、時々欲望満足の方法に變化あれども、かくの如きは支出の變動を意義せず、屢々支出豫算上の個々項目の變化をも意義せず、たゞ單に資料撰擇の推移のみ、形式將た需要せらるゝ原料の變動のみ、もとよりこれが爲めに幾多の企業がその販路を失ひ、屢時流行の變動するが爲めに生産装置を屢時に變化せざるを得ずして一切の生産を騰貴せしむることあり、その

限りに於ては國民經濟上にも亦重要ならずとせず、然れどもこれよりも重要な  
 るは、個々人及び國民の生活狀態が常徑を逸せるが爲めに發せる需の變動を  
 以て然りとす、平和狀態より戰爭となり、戰爭狀態より再び平和に復するが  
 如き大變動は國民の需を根本より變化せしめずんば止まず、實に危険なる戰  
 争若しくは恐怖すべき革命は通常の需を制限し、各人は餘分の支出を節約し  
 旅行を斷念す、再び平和の締結に當りては武器、火藥、馬匹の需、將た凡そ  
 巨額の軍需は全くその要なし、英蘭の國家歳出は千七百九十二年に二千萬磅、  
 千八百十三年に一億〇六百萬磅、千八百二十年乃至千八百四十年の間は再び四  
 千四百萬乃至五千五百萬磅なり、然るにロドリバールは千八百二十二年  
 に於ける總國民所得を二億五千萬磅と概算せり、これ上に國民所得概觀表に掲  
 げたるものより幾分多し、かくの如き變動が一切の需に如何に大なる影響を  
 及ぼすべきかは明瞭なり、戰爭中の個々の出來事、例へば包圍の如きは多くの  
 需を全然杜絶せしめ、爾他の需を非常に増大せしむ、巴里包圍に際し千八  
 百七十年乃至七十一年の間サラダは二五仙より一二五フランに騰貴し、ハムは

一八フランより一二〇フランに騰貴し、鷲は五フランより八五フランとなり、  
 卵は一フランの相場となり、一ブンドのバターは三五乃至四〇フランとなり、  
 これ單に一例のみ、凡そ一旦の大危険に遭遇し供給制限せらるゝに及んでは、  
 需は根本的に最も必要缺く可らざるものみに限られ、その相場は生産費に  
 準據せず、再生産は不可能なるが故に生産費の如きは考量すべき限りにあらず、  
 相場を規定するものは臨時の效用これなり、換言すれば從來殆んど掛念せられ  
 ざりし限界效用はかゝる場合に非常に増大す、これと等しく疫病流行の時期に  
 は一定の藥品に對する需は頓に増大せずんばならず、「ロッシュ」は巴里に於て  
 蛭が六〇〇プロツェント騰貴したる實例を物語り、「シクスピア」は將に逃亡せん  
 と欲せる「リチャード二世」をして一匹の馬を得んが爲めにその全王國を捧ぐるを辭  
 せざらしめたり、然り而して國民經濟上需に大影響を及ぼすべき動搖的經濟  
 狀態は年收穫の豊凶なり、年景況の順逆なり、吾人は後段經濟的恐慌論に當り  
 てこれが原因を究明せざる可らず、年々一般家族及び公共機關の所得を多少に  
 拘らず増減せしめ、屢々大變動を生ぜしめ、而して常に一時的に制限及び節約

と贅澤及び享樂とに出せしむるの原因は、これを過去に顧みて主として年收穫の豊凶なりき、これを現代に察しては則ち年景況の順逆なりとす。

その間に個々の結社及び公共的結社は、その財力の豊富なるに應じて、愈々以て凶年（逆潮）に當りても尙ほ必需品の或る常態的消費を變ずることなく、而かもこれが爲めに容易に増減せられ得べき目的に對する支出は益々著大の動搖を來たすべく、最も必要缺く可らざる生活資料例へば營養に對する費用は概してその生産減退年度例へば凶年後に於て著しく騰貴すべきが故に愈々以て然りとす、例へばサクセンの租税所得は千八百八十年に九八二、千八百八十四年に一四〇、千八百八十八年に一三三七、千八百九十二年に一五八四（百萬マルク）にして、必要營養に對する費用は人口の増加に應じ千八百八十年の六〇〇より千八百九十二年の七二〇（百萬マルク）に増加したるを以て、千八百八十年に於ける必要營養以外の目的の爲めに三八三、千八百九十二年には八六四（百萬マルク）を使用し得べし、而してこの金額は同一營養品に對する費用にして若し五〇〇乃至八〇〇（百萬マルク）の相場變動（これ想像せられざるにあらず）あれば益々以

て著大なる動搖を來たし得べし、豊年（順潮）に多く貯蓄せられ、凶年（逆潮）には貯蓄多きを得ず若しくは全然貯蓄する能はざるは自然の理なり、然れども亦このことは間接には需要に影響を及ぼし、殊に勞働力需要に反動を及ぼさずんばあらず。

さて屢々學者の論議に上れる一現象のこれと相關聯せるものあり、供給の多寡若しくはその結果、將た相場の高低は需要そのものに影響を及ぼし得べく、相場の騰貴は需要を制限し、相場の下落は需要を増大すと攝要せらるゝ所の現象これなり、或は限界效用論者の語を借りて言へば次の如くなるべし、曰、供給多き時は限界效用を遂に零とならしめ、供給少なき時は限界效用を増大せしめ、換言すれば最も緊要缺く可らざる欲望に準ぜしむと、思ふにその命題は此の如き一般的意義に於て眞理にあらず、凡そ必要缺く可らざる財に對し、やゝ富裕なる國民にありては、消費はもとより供給の多寡と無關係にはあらざれども、尙ほ年の豊凶景況の順逆に拘らず通じて同様なり、例へば麵包、鹽、其他最も單純なる衣服は消費の動搖極めて少なく、麵包は極端に廉價なるも平常よ

り四倍は食ふ可らず、又極端に高價なればとてその料を二分の一に減ず可らず、勿論この場合に於ても亦消費の恒常性が富の程度に左右せられざる能はざることは則ち然り、巴里に於ては麵包の消費は久しく殆んど變化なく、ベルリンに於ては千八百八十三年乃至千八百九十二年の間穀物の消費は一人宛年平均一三〇乃至一七〇キログラムの間に動搖し、年の豊凶景況の順逆に應じて多少馬鈴薯、蔬菜、魚肉に依り補充せらる、獸肉の消費は相場及び景況の順逆に従ひ一般に穀物消費より動搖甚しく、砂糖、カフェー、飲料の消費に至りては尙ほ更以て著しとす。

「グレゴリーキング」は既に二百年前に於て、收穫の減退と相場の騰貴との關係に就き、前者の十は後者に三十、前者の二十は後者に八十、前者の三十は後者に百六十（プロセント）比率の變ありと言ひ、エンゲルも亦第十九世紀の中葉に於て、プロイセンの市場相場に依り、收穫の一プロセント減少は相場の二五プロセント騰貴を、收穫の一プロセント増加は相場の一プロセント下落を來たすことを述べたるが、これ比較的不變の需要を基礎とし、將た過剰年度にありて相

場の下落が極めて少量の消費増加を、缺乏年度にありて相場の騰貴が實際需要に少量の減退を效するの事實を基礎となせるもの、相場騰貴の年度に於ては社會を通じて愈々以て營養の爲めに多大の手段を投ぜざるを得ざるに至るや必然なり、この故に更に第二次の結果として、營養以外の目的の爲めに使用せられべき所得の部分はこれと反比例して動搖し、從て麵包の相場が下落すれば、殖民地貨物、肉類、精良衣服地の消費額増大し、反之則反之。

こゝを以て必要缺く可らざる經濟財にありては、需要の不變化の爲めに、容易に消費額を増減せられ得べき贅澤財に於けるよりも相場の動搖少なし、贅澤財にありては相場の騰貴は容易に需要の減退を招き、反之相場の下落は需要者及び需要満足の手段を増加せしむ。

この故に通常上に陳べられたるが如き命題を生ず、曰、相場の下落は需要を増し相場の騰貴は需要を限局せしむと、この命題の眞理なるは一定の商品及び給付に繋がり、而して單に身體上の習性、慣習、富の程度及び生活事情が尙ほ未だ需要状態を固定せしむるに至らざるが如き範圍に在り、且つ又比較的劇烈



なる動搖にも堪へ得べき場合、將た消費の著大なる増加がさながらに一定範圍に當該消費者の自然的生活行程そのもの、中に在りて存する場合に在り、間接税及び郵便鐵道等の賃率が相場に及ぼす影響に對しても亦このことを重要とす、若し從來の半價格にて書信を發送し得べしとすれば、高郵便税が障害をなし來りし限りは、郵便數に著大の増加を致し得べし、然れども或る場合には郵便數に何等の増減なく、且つ郵便収入は、書信發送の動機が概して低郵便税に在らずして別の原因に關する限り減少することを免がれず、北米合衆國にありては砂糖一ポンドの相場が四・二五仙より二・九仙に下落したりし時、これが消費は約そ四〇ポンドより五二・六ポンドに増加したるが、我が獨逸にありては當時の最も低廉なりし砂糖相場も、他國に於けるが如くにその消費額を増加するに至らず、これ獨逸人は從來茶を飲み砂糖製品を食することを多く欲せざりしを以てなり、英蘭に於ける茶の消費額増加は大體に於て相場下落に伴ひ、即ち茶に對する關稅の遞減せられたる結果なること勿論なれども、必ずしも常にこれと平行せず、鐵道の消費に關しては一般に尙ほ更以て然りとせず、もとより鐵

の消費は、若しその大體に於て廉價ならざりしならんには、恐らく何處にありても今日の如く膨大することなかりしなるべし、然れども個々の場合に吾人の事實上觀察する所は、鐵は最も廉價なる時に消費額最も少なく、その高價なる場合にこれが需要最も多きに居れることこれなり、これ鐵道布設、機械製作の増加並に家屋、橋梁及び其他建築の増加を促がすものは、鐵の相場の高低如何にあらずして總市況なればなり、尙ほ羊毛、木綿及び絹、並にこれ等の原料より製造せらるゝ商品の消費額の動搖と相場の変動とを比較する場合に於ても亦吾人は屢々市場在荷の過剩より結果せる相場下落が毫も消費を増加せず、若しくは永く何等の増加をも來たざることを觀察す、英蘭に於て木綿の消費は千八百七十三年乃至千八百七十七年の間に一三〇・八より一一八六(百萬ポンド)に、羊毛の消費は千八百七十四年乃至千八百七十九年の間に三六二より三三六(百萬ポンド)に、何れも市況逆潮の結果として減退したるが、これ等商品の低廉相場も以て消費を催進するに至らざりき、一ポンドの絹は千八百七十七年乃至千八百八十五年の間二〇より一二・七五シルリングに下落し、この時より始めてその

消費はやゝ再び増加し、而して相場も亦騰貴して一三乃至一四シルリングとなれり、

換言すれば、需要額が供給の多寡及び相場の高低より影響せらるゝ場合に於ても、これが結果は屢々極めて徐々たる現象にして、如何なる場合にも必ず爾他の重要な原因と協働作用をなすものなることは是れなり。

**百七十九** 供給の分拆、供給の成分、供給を規定する生産力の範囲、供給の舊三分類、供給の多寡は孤獨的自足經濟に於ては嚴密なる意味にて未だ問題とならず、經濟的家族には或る欲望あり、而してこの欲望は家族の利用耕耘せる土地の面積及び磽肥、勞働力の數及び質、將た技術、機具及び貯藏品の全狀態に應じて充足せらるゝ、さて分業的國民經濟にありては、生産力と欲望との直接關係將た又需要に對する享樂品の家族的積集に代ふるに常に需要と供給、生産者と消費者との關係を以て愈々著しとなす、されどもこの供給は家族的欲望満足の可能と相類似せる原因を條件となし、即ち一、土地の全自然的關係、二、勞働力の數と質、換言すれば、人口の密度及び勞働力の身心上の訓練並に技術

及び組織、三、補助手段、資本、機械及び機具の現狀に依りて支配せらるゝ、然り而して家族的欲望満足にありて家族組織がその良否に影響を及ぼすが如く、國民經濟上に於て供給に作用するものは勞働力の取引的及び商業的組織、企業形式、所得分配、市場制度及び交通なりとす、これに加ふるに尙ほ個々國民經濟との連絡關係のあるあり、この關係如何は以て或る商品の供給を増大し若しくは始めて開拓し、而して他の商品の國內供給はこれを、その輸出の發達するに應じて制限す。

供給は分業乏しく且つ交通幼稚なりし古代に於ては主として一地方的に、其後多くの商品部門に於ては少なくとも寧ろ州縣的となり、更に降りては國民的となり、遂には統一的世界經濟的なれり、古代に於て供給は寧ろ家族經濟より發し、家族經濟はその生活資料の剩餘を販賣し、その閑時を何等か副業に利用せんと欲したり、後代に至りては寧ろ絶對的に市場を目標となせる企業より發せり、關係最も單純なりし時代には生産者と消費者と尙ほ直接に相對し、後來發達せる状態にては、生産物は技術的生產と商業との中間に介在せる一原則の連

鎖を經過し、其間に中間生産品、機具、精製品はやゝ遠き將來を見越して生産せられ、その多寡に多少の別こそあれ總じて種々の場處に貯藏品として蓄積せらる、かく蓄積せられたる貯藏品は、よしその現在高と別にこれが消費率及び消費高並に新生産に依りて如何に増減せらるゝかを重要となすこと勿論なれども、尙ほ現代の供給上大なる意義を有するものなり、されば現代の供給は、宛かも幾多の小水路を経てやゝ廣大なる谿谷の池及び貯蓄所に一たび集注し、而してこの處より再び商業運河を経て分配せられ、更に加工せられ遂に消費せらるゝものと寫象するを以て最も妥當とすべし、この經過の間に活動せる力は、一、消費の引力換言すれば需要、二、生産者の生産力、三、益々遠距離ならんとするこの運河組織内に貨物の運動する方法及び速度是れなり、若しこの第一及び第二の力が全然均等なる場合には、供給運動は常態的なり、貯水所は常に同一の水準を保ち、水は一様の運動をなす、若し需要増大すれば、運動迅速となり、貯水所の貯水量減じ、こゝに生産力は如何に急速にこれを補充し得べきかの問題を生ず、反之生産増加となり需要はそれと同時に且つ均等に増加せ

ざる場合には、貯水所は充溢を來たさずんばならず、販路社絶貨物停滯こゝに於てか始めて生ず、さてこの場合に主要問題は、生産より消費に至るまでの距離の長短幾何なるか、數週間に足るべきか若しくは數年にして始めて終結せらるべきか是れなり、或る商品の供給は能く數週間にして、多くの商品は一年後にして始めて、又多くの商品は數年にして始めてその多寡と方法と變化することを得べし、蓋し新文明若しくは新設備が能く精製品を供給し、資本及び労働がその方途を轉じ得べきが爲めには實に數年を要すればなり。

さて先きに吾人の分類したる(供給を規定すべき)生産力よりこれを觀るに、需要の現状はそれぞれ常にこの生産力に影響し支配すれども、抑々この生産力それ自體は—土地力、自然力、人力、資本、技術、社會的組織及び經營組織として—其緣由する所更に深く、それぞれ國土の自然界及び歴史に宿れる一般的大原因より規定せられ、當時の需要より變化を蒙ることは極めて制限せられたる範圍に止まり、幾分徐々として影響せられ幾分は毫も變化せらるゝこと能はざるは明白なり、吾人は更に深く生産力それ自體を吟味し殊に次の如く言はんと

す、曰、嘗て生産力の大部分、殊に近代文明に於て恐らくその著大部分は無制限に存在せざりきと、然れども或る財—所謂自由財—は殊に人口稀少なりし當時、その分量に於て人間の需要に對し無制限なるが如き觀ありき、例之飲用水、原森林に於ける木材の如し、爾他一切の財は則ち悉く無限にあらざりき、既に然り且つ又何人もその將來生存の安固ならんことを欲したれば、財の價值、その比較的稀少性と關聯して財産の成立となれり、これを以て同時に又財産分配の總原因及びそれぞれ當時の分配状態は供給の間接原因となれり、されども吾人はこのことに就て縷々詳説するの要を觀ず、何となれば凡そ財産分配の諸相は、吾人のこゝに問題とする所のもの換言すれば土地、鑛山及び炭坑、水力及び自然力の限定量を反映すればなり、而してこの制限は、吾人にして一たび最も豊沃なる土地、最も豊富なる鑛山、最も交通に利便なる場所如何と顧みれば、極めて狹隘範疇となること智者を俟たずして明かなり、文明如何に進歩するとも原理上にはこれを如何ともすべからず、元より文明の進歩は技術の改善に依りて耕作し得べき地積を二倍とし且つ十倍し、加之最も礪礪なる土地より收益

を得ることも不可能ならず、交通線路の増設に依りて利便多き位置と場所との數を増加することも能くし得べし、これ然りと雖も、此の如きは吾人が既に技術の發達史を論議する際に陳述したるが如く、僅かに限定せられたる範圍を出でず、かくて同一地積に生活すべき人口が益々増加せる場合には、上陳の關係は依然として變ぜず、獨り技巧、技術及び社會組織がその時々々に急劇なる發達をなせる場合に、この制限はもとよりこれを撤廢すること能はざれども尙ほ減退せられ得べく、供給從て催進せらるべし。

さて爾他の生産力はこれを土地及び天恵と比して一層彈力的なるが如し、即ち勞働力及び知識、技術及び社會組織、將た資本は、これを増進せしむるに必要なる條件にして充實せらるゝ限り、愈々以て増大せられべきこと土地及び天恵の比にあらず、然れども實にこの條件は概して容易に存在するものにあらず、この結果として獨り殊に利便なる事情の下殊に幸福なる經濟的發展時期に於てのみ能く優良にして俊秀なる勞働力と企業家とあり高尚なる技術と良社會組織とあり比較的豊富なる資本これあるとを得べく、この條件備はらざる場合

且つは諸國民にありて概して、將た諸地方及び諸營業に在りてこの缺乏を示さずんばならず、殊に第一流の人格的力を以て然りとす、大美術家、大技術家、大學者、大政治家の輩出は高尚なる文明にありても極めて稀なる現象にして、これが給付は單に一時尊重せられるのみならず、屢々數百年の後に至りても最も尊重すべき天恵よりも更に冀求せられ且つ重視せらるゝ状態なり、吾人は「ラフォーレ」、「ムリヨ」、「ルーベンス」、「ヴァンダイク」の繪畫に就てこの事例を観察す、然れども天才は姑く別問題とし、人口稠密にして労働訓練古くより發達し、普通學校整頓し技術教育進歩せる國土にありても、概して優秀なる労働者の數は劣等労働者のそれに對し遙かに及ぶと能はず、劣等労働者は屢々多きに苦しみ、加之無職業なる場合一再にあらざ、俊秀労働者に至りては概して稀有にして且つこれが輩出は天下の冀求して措かざる所なり、最近亞米利加のトラスト調査に際しその支配人の巨大俸給が問題となりたる時、一専門家は次の如く述べたり、曰、第一流の人間は極めて稀有にしてこれが爲めに如何なる犠牲を供するとも廉價なり、頭腦の如く廉價なるものは又他にこれあらざるなりと。

通常労働者も亦急速に勃興せる文明時代に一時的現象として稀少となり、大移轉時期に賃銀の工業よりも低廉なる農業に一時缺乏することは事實なり、然れどもこれと反對の現象は殊に舊文明國土にしてその人口稠密に且つ増加率大なるものに更に多く起れり、この故に不熟練なる通常手工労働に對し、加之一時的には熟練労働者に對しても亦、人的及び社會的にあらま欲しき價值を得ること能はざるの危険を生ぜずんばならず。

而して通常の動的資本に對する關係も亦これに等し、動的資本はあらゆる貧困國土、あらゆる經濟發展の緩慢なる領域に缺乏し、獨り富裕國土に一時的に極めて充溢し、その利率は非常に下落し、爲めに危険にして屢々不要なる企業にも投ぜられ、遊金が時に有害となり従つて輕卒心を刺戟するの具となるの恐あるに過ぎず、然れども尙ほこの資本充溢の状態は極めて制限せられ、多くの貧困者は毫もこれを有せず、財産若しくは信用の形式にて大資本を有せるものは總じて少數者にして、一種の獨占者たり。

されば生産過程、從て又供給の實際は如何なる場合にも制限せられたる労働

力に俟たざるなし、たゞ供給の個々群はこの影響を蒙ること一律ならず、それに従てその増減せられ得べき難易の程度も亦區々たるを免かれざるのみ、個々金剛石、美術品、技巧的給付は所謂稀少性を有するもの、供給を増加し得べきこと最も難く、或は全然不可能に、制限せられたる良葡萄栽培地、殊に豊饒にして肥沃に一定の耕作に適當せる土地の生産物はやゝ容易に増加せられ得べく、農業の通常生産物は既に甚だ容易に、更に二倍人口十倍人口の需要に對し能く夥多に生産せられ得べき技術的技巧と人間の労働とに俟てる多數生産品に至りては殆んど自由に供給を増加することを得べきが如し、殆んど一般にこれが制限は彈力的にして高尚なる文明の發展と伴て自由自在に需要に應ぜしむることを得べし、多くの生産物より觀るに、交通の發達徴々たりし間は、その運送費用極めて高價に上りしが、交通の發展に伴ひ大量生産物を半世界の上に輸送し以て能く需要に應ぜんとする今日は則ちこれと全然面目を革新せり。

極めて多くの生産を觀察する上に重要な問題は並存し競争せる企業の一系列にして、此等の企業はその經營の條件、土地、原料、位置遠近、人的労働に

逐次差等あり、大に利便を占むるものより甚だ不利なる手段に訴へざるを得ざるものありとす、さて農業上これ等の條件が支配せること且つ確確にして遠距離なる土地より生活資料を仰がんが爲めに需要の増進を必要となすことを、嘗て學者の説けるより更に銳利に主張したるは、リカルドの效績なり、吾人はかゝる條件の利便段階が殆んど如何なる場合にも全然支配せずと云ふことなく、且つ益々新たな形をとりて現はれ來ることを觀察す、借問す、果して如何なる營利部門にか有能なる企業家と無能なる企業家と、高尚なる労働者と劣等なる労働者と、完成の程度を異にせる技術的方法とこれなきものあるべきか、たゞ最も優良なる生産力にして任意に増加し且つ擴張せられ得べき場合に限りては劣悪なるものは爲めに驅逐せらる、而してかゝる場合には、現に吾人が幾多完全なる大經營と不完全なる小經營との間に於ける競争にこれを觀るが如く、その過程に屢々數十年及び數代を要せり。

さて上來の陳述より供給の多寡及びその原因の認識に對して得らるべき所如何なりしか、所謂供給の三分類、而かもその二群は寧ろ隨伴的にして一群は大

多数の場合に適合せざるか如きは、全然妥當なるものにあらず、これ差當り注意すべき點なり、「リカルド」及び「ジョンステアルトミル」以來學者の通常試みたる分類は、一、その數量に乏しき所謂稀少性を有する財の供給、この價値を規定するものは生産費にあらずして、それ自體の稀少、效用、これを求むる購買者の時々購買力なり、二、多大の困難と費用とを以てすれば生産を増大すること不可能ならざるが如き財の供給、この價値を規定するものは冀求せられ且つ購買せられたる供給の部分即ち最も不利なる事情の下に生産せらるべき供給部分の生産費なり、從てこの部分に屬するものは主として食料品なりとす、三、任意に生産額を増減せられ得べき財の供給、この群に屬するものは殊に工業生産物の大多數にして、從來の價値論は殆んど全くこの一群のみを考察し、その價値を規定するものは生産費なりと稱せられたり、生産費は價値を左右すてふ命題は價値論の樞點と認められたり、たゞこゝに更に問題とすべきはその所謂生産費が果して何を意味するか是れなり、吾人は後段直にや、詳細に亘りてこれに論及すべけれども、尙ほこの供給の全分類に對して次の如く注意する所あら

んとす、一、ありとあらゆる商品の生産は持續的若しくは一時的に制限せられざるなし、供給額が收穫の豊凶より左右せらるゝ一切の貨物は、その收穫が平均額より十乃至四十プロセント相異せる限り、一時的現象として制限せられ若しくは充溢す、生産の困難若しくは容易、騰貴若しくは低廉は、殆んどあらゆる經濟的活動の部門にこれあり、三、嚴密なる意義にて絶對的に任意なる生産の増減は如何なる部門にも存在せざるなり、蓋し從來職業とせる所を頓に他に轉ずるは何人と雖も難しとする所、取引を膨脹し制限するは、その能く斷行せらるゝ場合にも、數週間、數ヶ月間將た數年間を要する過程なり、而かも全然不可能なることなきにあらず、これ一面には何人も資本をその當時の技術的利用より引き出すこと能はず、他面には生産を任意に増加すべきが爲めに必要な手段は常に必らずしも存せざればなり、されば嘗て中心問題とせられたる供給の場合即ち前陳の第三群の供給は根本的に全然制限せらるゝ、供給の總現象は事實上「リカルド」、「ジョンステアルトミル」及びこれ等先進の餘流を汲めるもの、假定する所と相異せり。

それにも拘らず「マクロード」、「ジェヴォンス」にその端を發し、これを承けて更に塊地利の價值學派が所謂生産費の理法に挑戦したる全爭議は、大體に於て誤謬と認めざる可らず、此等論者は遂に通則として生産費が究竟實際上に相場を規定することを承認したり、然れども彼等がその批評に依りて進歩を齎らし、理論上に費用の定義と作用とを正當に確定し且つ限定し、爲めに從來誤謬の一原則が今や永劫に廢除せられたることはもとより論なし、今日に在りては費用若しくは勞働の使用のみが或る財に對じ、その財が同時に效用及び稀少性の故に冀求せらるることなき場合に獨り能く價值を與ふることあるべしとは何人も信ぜざる所なり、今日にありては生産費用が直接に價值及び相場を規定するにあらずして、その供給の多寡從て制限の問題に影響するに限りその理由に依りて然ることは何人と雖も看過せざるなり、然らばこの影響は如何に及ぼさるゝや、この觀察は吾人これを後段に譲り、差當りは生産費用の概念を究明せんとす。

**百八十** 生産費用の分解、苟くも自ら經濟財を生産するものは、果して結果が勞働に相應すべきか、將た別の方法に訴へ短時間の勞働に依りて何等か一層

高尚なる生計を立つること能はざるかを反問せざるものはあらず、苟くも企業家として市場を目的とし生産するものは、果して販賣相場が費用換言すれば生産手段及び生産力の使用額に匹敵せるかを反問せざるはなし、如何なる場合にありても企業家が所謂生産費に計上する所は、凡そ生産過程に供せらるゝ限り自家の勞働と一切の支出とを含蓄せり、然れどもかくの如く計上せらるる使用總額はその貨幣價值將た相場に依りて共通標準に換算せらるゝの外方法なく、然らずんば相互に比較す可らざるものたり、然るにこれ等生産要素の貨幣相場は、事實の眞髓を究めんと欲したる舊研究者より觀れば、皮想的なるもの屢々偶然的なるものなりき、舊研究者は究竟の原因を確立せんと欲し、而して科學的觀察の發端に常とするが如く、この原因をその複雑多様に求めずして單純なる形式を以て理解せんと欲したり、從て所謂重農學派は曰、生産費は生産に消費せられたる食料より成ると、自然、勞働及び資本を生産要素と認めたる理論家は曰、生産費は自然の利用(地代)、勞働(賃銀)及び資本(利潤及び利子)に對する補償より成ると、然れどもこれ未だ以て十分に判明を得ざるの觀あり、或は資本を



前時の労働と理解することを得べく、從て労働及び資本に對する補償を使用労働力の概念に一括することを得べし、而してこれと同時に地代を或る意味にて區別し、これを以て除外例となせり、この見地は「リカルド」及びその直接後継者の取れる所のものなり、これよりたゞ一步にして労働以外一切の要素を捨て去り若しくは無關係なる除外例として、總生産費は生産に使用せられたる労働の量より成るてふ立脚點に到達すべし、この立脚點の究竟は即ち「マルクス」及び「ロドベルトス」のそれなり、「マルクス」は幾多の謬見に陥り、一舉にして生産費用現象の混沌界に簡明と判然とを効したるの觀あり、彼は當時單に手工労働を認めて一切の高尙なる精神的労働を無視せんと欲したる民主的傾向に迎合せり、これを以て從來私經濟的現象として放棄せられたる生産費要素の一見偶然的なる相場に對して一つの國民經濟的絶對的客觀的解釋を得たるの觀あり、嘗に理論上に然るのみならず、實際生活上にも、労働を使用すること倍加すればその價値も亦倍加すべき幾多の個々事例を求むること困難ならざりき。

然れどもこれと反對の事例も亦等しく舉證せられ得べきことは全く看却せら

れたり、大小二個の金剛石が同量若しくは等量の労働力に依りて獲得せられ、而してその大なるものは小なるものに對し百倍の價値を有し、二人の歌妓が同一の教育を受け同一程度に努力し、而して一人は教授に依りて一夕五マルク、他の一人は演奏會に依りて千マルクを得たり、嘗にこれのみならず殆んど凡ての同種類商品にして市場に輸送せられ同一貨幣額にて販賣せらるゝものもこれに對して使用せられたる労働及び費用は則ち差等あり、摘收の後等しく千マルクの費用を要したる葡萄酒の大樽にして、五年後の販賣價額は五千乃至一萬マルクの差等あり、然るにこの間に使用せられたる労働力に至りては五十乃至五百マルク以上に出でず、この如き事例は一々枚舉に遑あらざるなり。

生産費を研究して益々その眞髓を闡明せんと欲すれば、究竟の斷案は常に次の如し、曰、生産費は労働、労働時間、社會的に必要なる労働若しくは凡そあり得べき概括名辭に歸一す可らず、爾他の原因これに協働し、而かも畢竟これに對し貨幣價値以外の共通標準を發見すること不可能たりと、經濟を營める者の思考、計算及び行爲を支配せるものが各商品の中に含まるる労働量に外ならざ

るべしとは、以て毫も生産費を説明する所以にあらざること何人と雖も認むる所なり、企業家の仕拂し記入する所のものは常に相互に比較せらるべき商品の價值量なり、若しくはその貨幣に表示せられたる相場なり、苟くも企業家は一切の生産手段及び生産要素を組合せんとするに際して、貨幣價值以外の價值とは何ぞや、相場に依る以外余は如何にして商品に評價を下し得べきかと反問せざるものはならず、企業家は一定の生産に對しこの方法を利用し、生産費計算上生産要素を貨幣價值にて計上し、望み得べくんば少なくとも純收益にてこの貨幣價值を補償し、なるべく利潤を得んとす、この故に凡そ生産手段の價值に作用する原因は悉く以て生産費そのもの、要素となる。

企業家は生産費を種々の方法にて分類することを得べし、差當り特殊費用と一般費用との分類これなり、特殊費用とは原料品、勞銀等に對して仕拂ふ所のもの、一般費用とは租税、保險に對し、場合に依りては企業家利潤(畢竟なるべく多くの利潤を得ざる可らず)に對する一般支出なり、特殊生産費の中に於て顯著なるものは通則として貨銀及び資本(機械、建物、土地)に對する支出額なり、資

本に對するものは分れて流通資本及び不動資本に對するそのとなる、不動資本は屢々更に分類せられ、土地(これに對し地代を仕拂はざる可らず)及び爾他の不動資本となる、而かも凡そ此の如きは經濟的觀察に重要なれども、國民經濟觀察には寧ろ重要ならざる差點なり、國民經濟的觀察よりすれば總生産要素は主として次の三群に分類せらる、一、容易に獲得し得べく、多量に存在し、何時にても他の同様なるものを以て代用せられ得べき要素、即ち通常の勞働者、通常の前資料若しくは補助資料、通常の前資本即ち苟くも有爲なる取引者なる限り何時にても一銀行にて不可なれば則ち他銀行にて調達し得べき資本、二、獲得すること困難にその量に乏しく若しくは他のものを以て代用すること全然不可能なる要素、即ち企業家若しくはその事務員及び職工長の特殊の資質、特殊の取引位置、特殊の有效なる水力、特殊の性質を備ふる土地、凡そこの第二群に屬するものはその量比較的制限せらるゝか若しくは全然稀少性なるもの、從て需要甚しく増加し、生産が通常要素よりこの特殊要素に轉ずれば、この特殊要素は多少に拘らず稀少性價值を得るに至る、或は寧ろ下の如く言ふに至當

とすべし、曰、既製品に對する相場騰貴は、これを利用する生産者に對し爾他生産者と比して格外利潤を與へ、即ち所謂レントを收むるを得せしむ、この騰貴價格がやゝ長期に亘りて持續するが如き場合には、資本、土地、水力、鑛坑等の現狀に變化なき限り、格外利潤を收むる者はその格外利潤の還元により自家の資本價值を増大するの結果となる、これ等の要素をその從來の所有者より購買するものは、この土地及建築物、水力及び商店に對して格外利潤還元に相當するの價格を仕拂ひ、仍てその生産費中にこの資本額に對する普通の利足を算入す、特殊の人格的資質を問題とする限りは、これに依りて等しく格外利潤を生じ所謂クイサイレントを生ずれども、もとよりこの場合は還元せらるゝこと能はず、この故に或る生産要素の稀少性は、生産費の重要な一要因なること疑なきが如し、勿論その重要な程度を一々確證するとは困難なり、殊に生産費を究明して益々その由て來る所を穿たんとすれば、吾人は果して何れの原料、機械、勞働力にこの稀少性ありて存するか、これ等の資料に對して仕拂はれたる相場が果して稀少性格外利潤の爲めに騰貴せるか、然りとせばその額は

幾何ならんかを確證すること愈々以て能はざるなり、然れども詳密を期す可らざれども確實なることは疑なく、殆んど如何なる場合にも稀少性の全然これなきはあらず、多くの點に於ては實に重大なる意義を示せり、さればこの稀少性を單に農業上に利用せられたる土地のみに認め、加之その生産物に關しては先きに吾人の指摘したるが如き筆法に依りて稀少性の影響を外觀上無視せんとし、而して地代は生産費の要素にあらずと稱し、これが理由として、如何に劣惡にして如何に遠距離なるも尙ほ供給せられ需要せらるゝ土地は決してかゝる地代を生ずることなしと云へるが如きは、これ強いて事實を蔽遮せんとして未だ完全を得ざるものなり、何となれば優等にして近距離なる土地の稀少性は以て需要を高價にし相場を騰貴せしめ、爲めにレントを生じ、而してこのレントはその結果として増大せる土地の資本價值と共に、總生産過程に於ても、一切の個別經濟相互の關係に於ても、一切生産費計算の確立に對し重要な一要素なればなり。

凡そ生産要素の機能に該當せる時間も亦稀少性と等しく一切生産費の確立上

重要な意義を有せり、價值を規定するものは生産費にあらずして再生産費なりとは、「ケリー」以來確立せられ且つ通則として承認せられたる命題なり、この命題の意義する所は次の如し、曰、凡そ生産費の私經濟的確立は幾分數ヶ月前數年前に果されたる仕拂に歸着す、凡そ土地小作、家屋賃借、資本利子に關し數年間に亘れる契約を締結せるもの、數年前に土地を數ヶ月前に原料を購入せるものは、何れもこの費用に對して相當の補償を欲せざるはなし、さてその後この要素の貨幣相場に變動を生じ、而して先きに購入せる生産者と相並びて現在の低廉相場にて購入し市場を支配せる大多數の生産者ありとせば、この現在相場にて購入せる多數生産者は市場及び相場を左右す、換言すれば即ち再生産費、即ち既に半ば過去に屬する時期の生産費と區別せらるべき生産費が相場を左右することゝなる、この結果先きに高價にて購入せるものは販賣相場の下落到依りて損失を招き嘗て廉價にて購入したるものは反之格外利潤を收む、然れども此の如き結果を生じ得べき前提は、最近現在時期に生産に従事せるものが競争上優勢なることは是れなり、若しこの前提起らず、高價なる生産と相並びて需

要に對し必要なりとせば、相場を規定するものは最も高價なるも尙ほ需要せらるる生産なると自然なり、而して廉價なる生産をなせるものは、その生産要素及びこれが帳簿價值が最近現在に屬すると將た數年前に在るとに論なく、格外利潤を收む。

然れども尙くも生産者は、一年前若しくは數年前に遇れる準備勞働及び投資に對する補償と僅かに昨日のそれに對する補償とに差別を附せんことを求めざるものなかるべし、幾多の經濟的生產にありては差當り數年間は何等の補償をも求む可らざる設備を必要とし、葡萄園及び「カフ」栽培地の收穫の初年は數年を経過したる後に於て始めて期し得べし、多くの商品は能く享樂に供し得らるゝまでには長期間保藏せられざる可らず、鹽坑には鑿井と準備勞働とを必要とし、これ等の準備は數年の後ならざれば補償せられず、吾人が「百八十一」に觀察する所に依りて判明すべきが如く、凡そ資本は財の貯藏なり、たゞ單に勞働を要し場合に從ては稀少性を有する財の貯藏のみならず、又以て貯藏に依りて多少に拘らず價值を増大すべきが如き財の貯藏なり、通常私經濟的形式にて

これを表示し、吾人はこれを下の如く言へり、曰、資本は若干年月間の利子を要したり、これ苟くも他人の資本を自家の生産の爲めに供用せるものは、依て以て資本所有者をして利用すること能はざらしめたる期間に對し利子を仕拂はざる可らざるを以てなりと、これに對し生産者はその生産費中これに相當する補償を要求し、而してその正當に換言すれば需要に應じて生産せる限りこの補償を收め得べし、果して然らば労働費の外尙ほ資本利子も亦生産費の一要素なりてふ一般命題は眞理なり、二個の財にして同一の労働を要したりとするも、その一は單に現在の労働を要し、他の一は十年前の同一労働を要したりとせば、その價値は通常同一なること能はず、換言すれば二個の財に對する同一労働と不等資本の投下とは以てこの二個の財をして同一價値ならしめず、却て不等價値ならしむべきの條件なり。

吾人は尙ほこゝに總じて生産費に關し且つ生産費の部分としての交通費及び商業費に關して二項の注意を附説せんとす。

二種の財が通則として必然的に相連結して生産せらるゝ場合、例へば概して

鑛山業に於ける鉛、銅及び銀、農業に於ける穀物及び獸肉、瓦斯工場に於ける瓦斯及びコークスの如き場合にありて、これが生産費は總額として計上せられ、企業家はその企業に對し常にたゞ二種若しくはそれ以上の財の總相場に依り果してその生産費が補償せらるべきかを着目す、從てその帳簿計算は或は總収入一萬マルクの中、穀物六〇プロセント、獸肉四十プロセントなることあるべく、總じて一萬マルクの收入ある限りは、穀物收入四〇プロセントに減じ獸肉收入六〇プロセントに増すも、毫もその企業法に變動を來たすことなし、何れの場合にせよ或る種の生産物に對する需要が劇増することゝなるべし、若し外國競争が相場の一部門に壓迫し來る場合には、生産高は他の部門に於て生産を増加せんことに力むべし、このこと成功せれば則ち損害を招き、爲めにその生産組織を變じ從來生産の一部分を捨て他のものに依てこれを補充せんことに思ひ到るべし、かゝる場合に總じて問題とする所は生産費と無關係なる價値の成立にあらず、勿論コークスの場合の如きは多くの地域に在りて相場餘りに低廉なれども、これ高價なる瓦斯相場が尙ほコークス供給額を増加せんとする傾向を有

するに座せり。

廣義の生産費は凡そ財を消費者に調達せんが爲めに投ぜらるゝ一切の費用を含み、従て交通費及び商業費をも盡く含蓄せり、これ等の費用が如何に重大なる意義を有するかは吾人の先きに陳述したる所、それが爲めに商品價格の騰貴せらるゝこと或は僅かに數プロセントに過ぎざれども、或は三〇乃至五〇プロセント、屢々二〇〇乃至それ以上のプロセントに達することあり、凡そ價值は生産過程の中に在りて存せりと想像するものはこの真相を正當に理解すること能はず、若しそれ交通設備、商人の勞働、其他財の流通に必要缺く可らざる投資を詳密に知悉せるものは、よし一方に商業が屢々その組織を誤り、従て外費に陥れることを認めんとも、尙ほ交通商業費の爲めに價格の騰貴せらるることの額に就て毫も驚くことなかるべし、問屋相場と小賣相場との並進せざることは屢々耳にする所の攻撃なるが、この攻撃も亦大體に於て正當なるものにあらず、問屋相場と小賣相場とは大體上同一の傾向を有せり、たゞ大商業相場は小賣相場より著しく感ぜられ、幾分動搖多きこと、これ事體の自然にありて

存せり、小賣商人は顧客を失はざらんが爲めになるべく其相場を不變ならしめざる可らず、且つ需給の緊張如何に依りてそれぞれ中間商業及び交通はその費用を一時豊富に補償し時には僅かにその半額を補償するに過ぎざること亦自然なり、然れども長期間にはその投資に應ずる額を購買者に轉嫁せざる可らず、而して中間商業が支拂能力に富める富裕なる顧客には廉價に、時々現金に支拂ひ、若しくは全然現金にては支拂はずして信用に依れる貧困なる顧客に對しては高價に販賣することも亦、上掲商業費は生産費の一部分なりてふ命題に照して何等の除外例にあらざるなり。

されども吾人をしてこれ等の個々問題は姑く置きこゝに生産費の價値に及ぼす影響に就き究明する所あらしめよ。

**百八十一** 生産費の價値に及ぼす影響、こゝに吾人は差當り、生産費が生産者若しくは販賣人に對して如何なる意義を有するかを問はざる可らず、生産者若しくは販賣商人は少なくとも生産費を補償せんと欲し、出來得べくんば尙ほ利潤を得んと欲す、このこと成功せずんば則ち損失を免がれず、得る所愈々多

ければ則ち多々益々辨ず、生産費は商人(若しくは生産者)にとりて極小限にして、これを補償せんが爲めに彼は從來の如く業務を繼續せんとす、生産費は生産者(若しくは商人)の収入に對して限度を規定するものにあらず、需要増加し而して供給これに伴て劇増することなければ、市場相場は恐らく生産費以上に遙かに騰貴すべし、有名なる繪畫の場合に於けるが如く事實上稀少性を問題とする限りは、生産費は全然無關係なり、日々の生産額が財そのもの、性質上非常に動搖せる場合に於ても亦、沿岸大都市の魚市場に於ける如く、供給高の日々變動は、需要殆んど不變として、市場相場を決定し、而して恐らく日々の生産費は直接の影響を有することなし。

消費者若しくは購買者は販賣者に比し生産費に關する知識に於て匹儔し得べきこと稀有の現象に屬せり、然れども從來の相場よりこれを推論し、出來得べくんばこれを聞知せんとし、場合に依りては自らこの生産に當らば幾何費用を要すべきかを反問し、少なくとも別途に廉價にてこれを得ること能はざるかに思ひ至らざるなし、この目的にして達し得らるれば、消費者(若しくは購買者)は

容易に生産費以上を仕拂はんとせず、この生産費を以て正當相場と認め、出來得べくんばこの費用以下にて購買せんことを欲し、それ以上を仕拂ふは單に當該財が彼にとりて極めて必要にして且つその資力が大支出をなすの餘裕ある場合に限り。

されば心理學的にこれを觀れば如何なる場合にも生産費を以て凡そ市場關係者の商量の中心となす、而して更に起り來る問題は果してこの生産費が市場相場にて補償せらるるか、補償せられて餘あるか若しくは幾分は全然補償せられざるか是にして、この問題の決定如何は即ち供給を統制すべき動機となる、通常の場合にして生産費が補償せられて損益なくんば供給は増減なし、市場相場が生産費に超加すれば供給増加の傾向あり、反之則ち供給は遂には減ぜらる、然り而して供給のこの變動は再び市場價値に反動を及ぼし、市場價値をして生産費に接近せしむ、この現象が如何に起り且つ如何なる範圍まで及ぶかは吾人これを更に詳密に觀察せざる可らず、これに就き後段四項の類別は則ち凡そあり得べき最も重要な場合を勝り盡せるものと假定することを得べし、(イ)生産

費に變動なき場合は、一、需要は一時的に若しくは引き續きて價值を騰貴せしめ、若しくは二、下落せしむ、(ロ)需要及び市場價值は差當り不變なるも、一、生産費は増加し、若しくは二、減少す。

(イ)、一、生産費に變動なければ通則として供給に變動なし、自然的出來事の爲めに供給が増減せらるゝ場合は除外例としてこゝには取扱はず、さて供給に變動なくして需要増加したる場合には、その結果如何、相場は緊張し従て利潤は増大す、利潤が從來極めて少額なりし場合には、相場の騰貴額は以てやゝこれを高むべきも、既に相當利潤を得たる場合にはこゝに格外利潤を生ずべし、これ當該取引部門に對する好景況の際に起る所の現象なり、かゝれば企業家及び商人は果してこの好況が永續すべきか、従て生産を増加し商品を遠距離に輸送するも收支相償ふべきかを反問す、この膨脹は常に必らずしも可能にあらず、先きにも吾人の觀察したるが如く、多くの生産手段は全然制限せらる、遠距離輸送は運賃、關稅、長時間の爲めに全然不可能なることあり、屢々生産の増加は漸く數ヶ月後若しくは數年後に期待し得べきことあり、この故に格外利潤は

比較的長期間若しくは永久的に持續し、供給の増加あることなし、何等此の如き困難なき場合にも、生産の膨脹はその時々、果して資本充溢せるか、利子低率なるか、最近將來に對する經濟的希望洋々たるものあるかの事情に依り、企業精神の發達幼稚なる國土にありては、果して有能なる企業家の數が多數なるかに依り、舊發達に屬せる屢々緩慢なる取引の國土にありては、景況の力が果して能く取引を率ゐる飽食暖衣の徒を活動せしむるの力あるかに依れり、近時西歐羅巴及び北亞米利加合衆國にありてはこれ等の總條件が少なくとも通常工業品に關して屢々完全に充實せらるるとあり、資本も亦こゝに充溢し、依りて以て一旦需要増加し景況活潑となるや、舊取引業の膨脹せられ新たに取引業の設立せらるゝこと殆んど餘りに容易に餘りに急劇なり、かくて景況倏忽にして去りたる後は無用の長物となり、供給過剰を效し、相場を下落せしめ、而して過剰生産再び消滅するか若しくは需要がそれに應じて増加するまで恐慌を生ず、凡そ相場騰貴及び利潤増大の結果として生産が餘りに急劇に膨脹せらるゝは常に不利の結果を伴ひ、餘りに輕卒に薄弱なる基礎の上に新取引が建設せられ、



忽ちにして投賣に出で、劣等商品を供給し、従て當該工業の名譽を失墜せしめ、當該勞働者階級に不熟練にして劣悪なる要素の侵入し來るを制する能はず、一時的に資本の充溢せると信用の極めて容易なるとは忽ちにして此の如き危険を生ぜしめ、少なくとも概して膨脹せられ得べき取引部門にありて然りとす。

然れども大體に於て、上來の陳述は、取引擴張の可能なる限り早晚概してその事實となりて現はれ、かくて一方に需要の増加これに伴て起らざる場合には、再び相場を生産額まで下落せしめ利潤をその中庸程度に引き下ぐることを證明せり、然り而してこの需要の増加は決して必らず且つあらゆる經濟財に對して起るものにあらざることは、吾人先きに

**百七十八**

に於てこれを觀察したり。

さて既に吾人の説明したる如く廣汎に亘れる事例なるが、増加すること困難なるか若しくは全然増加すること能はざる供給を問題とする限り、殊に農業、鑛山業、都市に於ける家屋及び商店の供給、將た事實上若しくは實際上獨占關係をなせる一切の領域に於けるが如く、格外利潤は永久的に持續し利潤還元に依りて當該所有者の不動資本の價值を劇増せざれば止まず、この不動資本を新

たに購買する者は當該劇増資本價值の利足を生産費に計上し、これが爲めに生産費は名目上に増加すれども事實上には舊生産費と毫も變化なし、かくの如くして舊文明國土にありて増價せる土地及び鑛坑將た商店等の利足計算は生産費の領域に重大の意義あり、今日殊に北亞米利加合衆國に行はれ、舊歐羅巴にも亦等しく行はるる所謂資本の *inflation* は之に屬せり、即ち供給の制限が多額の格外利潤を生ずる場合、事實上投資額は一千萬マルクなるに、二千萬乃至八千萬マルクの株式及び優先株を發行することとなり、而して後一般報告には當該取引の利潤は一〇若しくは四〇プロセントならずして僅かに五プロセントに過ぎずと稱す、然れば則ち一千萬マルクに代ふるに二千萬乃至八千萬マルクの發行有價證券に對して利潤を收むることを得。

(イ)、二、生産費に變動なくして需要の減退する場合に假定せんに、これ收穫上及び取引上の凶年、景況不振及び世界商業停滯の時期なり、需要の停滯は忽ち市場貨物を充溢せしめ、相場は下落の傾向を生ず、ここに生産者に對する主要問題は、果して生産者がこの停滯状態を一時的現象と認むるか若しくは永久

五西八

的現象と認むるか、將た將來を正當に判断するか、詳言すれば市場に關する一切商量の中にて最近將來の批判は最も重要な一要素なるが、果してこれに對する判断を誤らざるか是れなり、需要減退にして單に一時的出來事なれば、生産者は大損害を招かず、幾分日々の勞働時間を短縮し及びこれに類する規定に依りて、供給過剰及び相場下落は數週間若しくは數ヶ月、恐らく少なくとも一二年の間にして廢除せられ得べし、而して市場相場は生産費額に復歸すべきなり、この動搖若し久しきに亘れば、相場は下落甚しく、商品は流行に遅れ、爾他商品を以て代用せられ、永く外國販路を失ひ、かくの如くして當該營業に長期の恐慌を生ず、こゝに於て供給を如何に制限すべきかは重大問題なり、その最も容易なるは現に恐慌に陥れる生産が單に當該農民、家内工業者若しくは營業經營者の副業にして、主としてその收入に依りて生計を立つの必要なが如き場合なり、反之それが當該生産者の主要生産たる場合には困難ならずんばあらず、例へば農業に於ける穀物の如く、菜種若しくは烟草は能く爾他生産に變換することを得れども、穀物に至りては主要生産にして直に以て大困難を生ず

五四九

るを免かれず、生産機關將た企業がその規模廣大にして複雑し益々資本力に富めば、恐慌に對する抵抗能力愈々強固に、技術上の改善、總費用の軽減、生産の膨脹に依りて損害を相殺せんとす、かくの如くして大企業は供給既に業に過剩せるに更にこれを過剰せしむること一再にあらず、若しこの生産機關が合同若しくはカルテルとして能く組織を誤らざれば、適度の制限を加へて恐らく供給を五乃至二〇プロセントも減額し、取引の膨脹を禁止し若しくは便宜の懲罰を制定してこれを勵行すべし、然れども凡そ此の如き應急手段は以て僅かに一時的救治法たることを得べきも、需要の持續的に二五プロセント減退し若しくは更に五〇プロセント乃至それ以上減退する狀況に應ず可らず、かゝる場合には相場は甚しく下落し、企業家の利潤は消滅し、大損失を生じ、比較的不利なる事情の下に在る取引は差當り破産し、農業上劣等なる土地は耕作せられず、鑛山業上礦石乏しきものは以て採掘費を償消するに足らず、技術的にその資本を轉用し得る業務は進んでこれに努力し、他の業務に轉ず、例へばチリシグルの森に三四十年前には鐵鑛業ありしが、現には多く陶器工場を發見するが如し、

然れども固定資本は屢々轉用すること能はず、この場合には多くの労働機械は單に廢物として原料鐵として販賣せられざる可らず、こゝに至れば企業家はただこの固定資本の一舉に轉滅したること破却せられたることを認むる以外に方途なし、建築物、土地、機械、全商店の資本價值が一〇、二〇、四〇プロツェント乃至それ以上に下落するも、尙ほこの下落資本にして利益を生じ、爾他の動的資本にして收支相償ひ、殊に他に轉ずべき業務なき場合には、依然として事業を繼續することを廢せず、かくて供給制限の過程は或は徐々に、或は急速に進み、而して遂に需要額と相應せしめ得るまで常に大損失を伴はずんばならず、然り而してこれが爲めに屢々數年間を要し、この目的を達し得たる曉には市場價值は再び生産費を償ふことを得るに至るべし、生産費は技術上には恐らく全然同一なるべきも、その貨幣價值に就て言へば固定資本將た勞銀の下落に應じて減少す、數代同一業務に従事し來れる家族の労働者を他業務に轉せんことは屢々固定資本を轉用せんこと、等しく困難なり、何となれば彼等はその從來の活動に固執し愛着し、即ち例へば手紡績、手織布を捨つることを敢てせず、賃

銀の下落も甘受して意とせざればなり、これが爲めに供給の制限將た或る場合に全營業部門の消滅は到底一舉にして能くすべからざるなり、而かも究竟の結果に至りては前陳の如し。

(ロ)、一、需要及び市場價值は差當り變動なくして生産費に變動ありと假定するものはこゝに論究すべき第三の主なる場合なり、先づ生産費が増加したる場合を假定せんに、舊相場を以てしては生産者は損失を招くべく、若し生産者がこれを以て一時的現象と認め若しくは既に舊相場にて得らるゝ平均利潤にして殊に豊富なれば、生産者はその限りこの損失を負擔することを辭せざるべし、この二つの場合が事實上に存せざれば、生産者は相場を騰貴して生産費増加を消費者たる社會公衆に轉嫁せんことを力むべし、當該商品が生活上に必要缺く可らず且つ公衆の購買力に餘裕ありとせば、購買者は相場の騰貴を甘受すべく、これが爲めに多くを仕拂ふべきものが中間商人及び生産者それ自身なる時は、騰貴價格に抗爭すべし、而して爾他一般公衆と雖も、必需品ならざる限り、相場騰貴に従ひて需要を制限すること容易なるべし、これが爲めに市場停滯し、

相場下落し、而して生産者は損失を招かずんばならず、經營事情最も不利なる業務は差當り破綻し、然らざるものはこの損失を負担することを得べし、かくて遂には供給は制限せられ、而して騰貴相場を仕拂ふことを得べく且つ仕拂はんと欲する需要部分と同一水準に達し、こゝに於て生産費と市場相場と再び相殺す、或る場合には供給制限の過程は當該業務に供用せられたる固定資本の新減價と關聯せり。

生産費増加の原因は種々にこれを類別することを得べし、若しそれが勞銀の騰貴より來れば、勞銀が果して勞働者の同一給付に對して増加せるか換言すれば事實上の騰貴起れるか、或は然らずして機械の改善に俟ち精緻なる勞銀仕拂法に伴て勞働者の技術的能力が勞銀の騰貴と同時に増加し、從て高賃銀なるにも拘らず畢竟勞働に對する貨幣仕拂は増加せず、若しくは根本的增加なきにあらざるかを問題となす、次に利率の騰貴より來る場合を考ふるに、これ國民經濟の發展駸々乎たる富裕國土にありては概して單に一時的現象に過ぎざれども、この場合には殆んど常に何等かの信用に依頼せる生産の騰貴すること(生産費の

増加すること)は自然なり、既に重商主義者が低利子を以て國民經濟發展の前提と言へるも偶然にあらず、取引界が割引率の騰貴を訴ふるも亦偶然にあざざるなり、最後に或る生産要素例へば土地、鑛床等が僅かに一定限度以上に存在せざる場合にしてその爾他の目的に對する需要増加の爲めにこれが價值を増加せしめたりとせんに、この稀少性を備ふる生産財を重要とせる一切商品の相場騰貴は短期間の現象にあらず、この理由に基き獸肉、麩麩、木材、野獸及び其他の商品は數百年來漸次に騰貴したり。

(ロ)、二、需要及び價值は差當り變動すべからざれども、生産費は則ち然らず、輕減せられ得べし、これが直接結果は生産者の利潤の増大にして、當該生産者は爾他の取引部門に對し取引及び供給を膨脹せんとするの傾向を生ぜしむ、このこと現在の生産資料を以て可能なる限りは、遂に經濟競争を催進し、相互に現に可能なる相場下落に依りて顧客を爭奪せんとするの計畫に出でしむ、而かもこゝに重要とする問題は生産費輕減の種々原因の間に辨別を明かにすべきこととなり、生産費輕減は或は利率下落より來ることあるべし、かくの如きは概し

て一國土の全取引部門に有利の結果を伴ひ、生産は容易にせられ、販賣相場舊の如くなれば利潤はやゝ増加す、これと關聯して果して相場が下落すべきかは需要の多少に俟つ、利率が取引停滯の結果として一時下落する場合には概して相場は減退す。

生産費軽減は或は労働費の下落より來ることあるべし、換言すれば労働節約、有效なる労働力の使用、若しくは賃銀の下落を原因とすることあり、就中労働の節約及び有效なる労働力の使用は差當りは殆んど常に個々の取引若しくは取引部門に限りて起る現象にして、其結果は需要及び市況に應じて企業家の格外利潤となり若しくは相場下落となる、この變動が技術の進歩と關係せる限りは吾人これを後段直に特に項を改めて論及すべし、賃銀の下落は幾分經濟生活の個々部門に部分的に起り幾分は一般に起ることあり、何れの場合にしても賃銀の節減は差當り利潤を増加し、やがては競争の結果として商品價格を低廉ならしむ、かくの如き相場の下落は労働者の所得を減じてそれだけ消費者を利益せしむべく、爲めに労働者は購買能力を減削せられ、而して貧民救助及び社會的

危急大に加はり、これに依りて社會全體の失ふ所は消費者範域の得る所を以て相償ふこと能はず、この故に凡そ故意に賃銀壓迫に依りて商品價格を低廉ならしめんとするの計畫の惡評非難を蒙るは當然のことたり。

更に生産費軽減は技術的進歩、取引組織の改善、運賃の低廉より來ることあり、就中前二者は通則として差當り個々經營が發明し應用し得べき現象なり、この發明及び應用は、その利益を獨占し若しくはこれが模倣者少なき限り、非常の格外利潤を收得せしむ、何となればこれを以て僅かに需要の一部分を満足し得べきのみにして、舊方法に依れる爾他經營も亦これと相並びて必要なる限りは、相場は依然として變動せざればなり、この故に個々の家族、都市、國土にして、機先を制し且つ引き續きて技術上及び組織上の大進歩を獨占的に實現したるものは富裕となれり、今日尙ほ著大資産が企業家の有に歸するは實にかかる場合に外ならずとは屢々唱へらるゝ所、而して又當然の主張ならずんばあらず、然れどもかくの如き格外利潤の源泉は常に僅かに一期間存し得べきのみ、當該進歩が社會に知れ渡り且つ模倣せらるゝに應じ—その當事者が若干年間の

發明特許權を有する場合にはその期間經過の後に於て一劇甚なる競争を生じ、供給過剰し、相場を低廉にして顧客を争奪せんとするの企圖あり、かくの如くして技術の進歩及び生産機關の社會的組織の改善に依りて相場は時と共に悉く下落す、獨り個々生産資料の稀少性がこれと反對の方向に極めて廣大なる影響を及ぼす場合に限り、相場は下落せず、若しくは却て騰貴せずんばならず、概して狹義に於ける工業生産物、即ち砂糖、化學製品、織物、家具、機具等は、この原因より最近時代に生産費大に低廉となれり、レームスに於て精製毛布の一メートルは千八百十六年乃至千八百八十三年の間に一六フランより一四五フランとなり、英蘭の木綿原料は、千八百三十年乃至千八百八十年の間に約そ六〇プロツェントの相場下落あり、マルクスの引證する所に依れば、千八百二十年英蘭に於て十二タースのゼンマイは、手工業經營の結果としてその生産に百四十四シルリングを要し、千八百三十年には製造所經營の結果として八シルリングを要し、千八百六十七年には工場經營の結果として二乃至六ペンスを要するのみとなり、ウエルスは技術の進歩に依りて近時大に生産費を減じたる商品として、

砂糖、石油、銅、鐵、水銀、銀、錫、ニッケル、白粉、石炭、硫酸鹽、キニーネ、紙、硝石等を列舉せり。

交通手段の改善及び運賃下落に依りて生産費の低廉となることは更に急速なり、これ新交通路及び交通手段は一たび布設せらるれば直に何人にも利用せられ得ればなり、既に **百五十** 及び **百五十一** に於て種々運賃輕減の事例を舉證したり、吾人は最近二百年間一切運送手段を平均してトンネンキロメートル宛二〇乃至五〇ブレンニゲより〇五乃至五ブレンニゲに輕減せられたりと認むることを得べし、一噸の穀物をニューヨークよりリッヂアール迄輸送せんには、千八百七十三年に三〇六八マルク、千八百九十三年には七六マルクの運賃を要し、英領印度よりハンブルヒに輸送せんには嘗て(千八百九十三年)九七マルク現には四二マルクの運賃を要せり、かくの如き短期間にかくの如く運賃の著しく輕減せる事例は未だ嘗てこれを求む可らず、この運賃輕減は、凡そ從來人口に對し土地若しくは天産物の稀少性なりし結果として騰貴したる一切の輸送せられ得べき商品に影響して、著しくこれを輕減せしめずんば止まず、かくの如き生産

手段は従来比較的に限定せられたるが、これを以て甚しくその限定事情を變じ、然り一時的にはその稀少は變じて却て充溢となれり、よしこれが爲め一方に土地所有者と農民と如何に不利の境に陥りたることあらんとも、これと同時に若し生活資料價格の輕減を俟たずんば増加せる西歐人口の大多數は恐らく今日最も困難なる生計に沈淪すべく、然り劣悪なる生計に陥るべきこと、これ吾人の忘る可らざる點なり。

上來陳述の結果を撮要するに次の如し、曰、多くの場合に於て然り恐らく概して市場開催時に於て市場價值は生産費と齟齬せり、蓋し全國民經濟は絶えず變動推移し、需要は苟くも人口の増加に伴ひ、其他時代と共に變動し、供給は常に收穫將た爾他幾多の偶發事象、技術の進歩、世界商業、市場の擴張より影響せらるればなり、然りと雖もかくの如く種々の原因に依りて生じたる市場價值と生産費との齟齬は、減削せられ若しくは増大せる利潤の壓迫に依りて供給に順應變動し、市況に更に適切に順應せんとするの傾向を有せり、而かもこれが實現の全然容易なるは、生産を増減し得べきこと自由自在にして何等の困難

を呈せざる場合に限り、而して能く生産額を變動せしめ得べき期間が數週間及び數箇月、然り數年間に互れる場合にありても亦この事概して然りとす、この介在期間に市場價值と生産費との齟齬は既に多少の利潤若しくは損失を生ぜずんばならず、然れども多くの場合に於て一に市況に應じて概して供給を増加せんことは、生産要素の稀少性の爲めに不可能たり、而して二に市況に順應すべき供給減少は、その生産要素が直に以て爾他生産に供用す可らざるが故に大損失を招かざる能はず、こゝに於て市場積集の貨物は需要に對し比較的長期に互りて不足若しくは過剰となり、前者は生産者の爲めに利潤を生じ、後者は則ちこれが損失を伴ふこととなる、この故にこの場合に市況に應じ生産額を増減せしむるの事實は全然存在せず、さればとて漸次に私經濟的に生産費を變動することは則ちこれなきにあらず、重要な生産要素(資本、土地)の價值が騰貴し若しくは下落し、爲めに増加し若しくは減少せる名目資本の利足勘定に依りて變動を來たせる生産費が再び變動せる市場價格と順應せる限りは然りとなすと、こゝを以て時と共に市場價值が再び生産費に適合するの結果は、幾分供給の

事実上の變動に依り、幾分該取引に參かれる生産要素の相場變動に依りて生ず、この二者は全然別種の現象なれども、帳簿上私經濟上に計算せられ得べき生産費が漸次にして再び市場価値と一致する限りは相共通せる特色ありて存せり。

生産費學說に反對するものは、或は生産費が唯一の價值原理にあらざること、多くの場合に於て一時的に又多くの場合に於て持久的に實際生産に投ぜられたる費用が價值を左右せざることを理論の基礎となさんも、これに對し、近時生産費學說を辯護する多數學者の主張が次の一項に過ぎざること、換言すれば市場に於ける時々々の價值が常に需給の緊張状態より上陳の方法にて規定せらるゝ以外に主張せられざることを以てせざる可らず、持久的價值は、與定需要に對し供給が如何に生産費に適合するかの方法に繋れり、供給の増減は、苟くも生産費の補償に應じて自由自在に變動し得べき難易に繋れり、生産費の重要な一要素は資本利子の補償なり、而して資本利子は當該資本の時々の稀少價值に應じて騰貴し若しくは下落す、これに就て或は當然騎士采邑の價值が穀物相場の高下に從て増減し、これと逆命題は眞ならず、小麦は土地相場の騰貴の爲め

に騰貴せずと主張せんも——これ單に使用財と生産財との價值が常に相互に依繋すること、及び凡そ價值はこれを規定する舊原因（新原因と對照して）に遂に歸着することを證明するものに過ぎず、一切の價值感情と一切の價值判斷との起源を捕捉せんは、過敏なる價值論者の試むる所なるが、これ恰かも世界若しくは國家若しくは人類の創造の本源を明解せんとするに等しく、到底不可能事たり、吾人は次の認識を以て満足せざる可らず、曰、生産費が遂には供給を統制し、從て又一面より價值を規定し、而して他面に價值は需要に依り且つその原因に依りて規定せらるゝと。

**百八十二**

貨幣價值、貴金屬及び貨幣の供給需要、吾人は既に貨幣論に於て凡そ判然明瞭なる經濟的價值寫象が貨幣を以て且つ貨幣に依りて始めて成立することを觀察したり、吾人が從來市場價值を論議せる限り、市場價值か貨幣に表示せられ且つ計量せらるゝことを前提となせり、貨幣は比較的最善の價值尺度なり、苟くも價值に關する吾人の商量は、貨幣價值が不變且つ均等なるの假定を出發點とし、この假定は今日短期間及び近距離には大體に於て眞理なり、



商品價值は變動的のものにして貨幣價值は不變のものなりと吾人は思惟す。然れどもこの假定は制限的且つ相對的眞理を寓するのみ、常に主觀的に貧民の囊中に於ける一マルクが富者の囊中に於けるそれより高き價值を有するのみならず、客觀的にも亦總商品の平均價值に對し一切主觀的評價の手段に對して貨幣價值は時を異にし處を異にするに從て相同じからざるなり、常に良貨若しくは惡貨の存する限り——これに就ては今論ぜざるも——吾人が良貨將た良幣制を前提とするのみならず、貨幣が貴金屬より成れる限りに於ても亦、この貴金屬はそれぞれの供給及び需要、生産費及び貨幣使用額に應じ、隨所にその價值を異にせざるを保し難し、而して貨幣のこの蓋然的變動價值は必ず相場の總現象に表示せられずんばならず、貨幣價值の高きは即ち貨幣相場の低きを意義し、貨幣價值の低きは即ち貨幣相場の高きを意義す、貨幣が乏しければ苟くも個々の財に對して仕拂はるる額も亦少なく、即ち一切の貨物は廉價となり、貨幣豊かなれば一切取引に於ても亦多くを仕拂ひ、即ち一切の貨物は高價となる、この故に何人も熟知する所の次の命題を生ず、曰、一切の貨幣相場は同時に或は

下落し或は騰貴し得べし、一切の價值は決して此の如き一般的動搖をなすこと能はず、或る價值の騰貴は他の價值の下落と正に同義なり、貨幣相場の一般的騰貴若しくは下落は則ち貨幣價值の下落若しくは騰貴と同義なり、貨幣にて表示せられたる相場と貨幣そのもの、價值とは反比例の動搖をなせり。然れどもこゝに凡そ個々の財はそれぞれ獨立せる商品價值運動をなし、而してこれと同時に何れもその貨幣相場に於て悉く貨幣價值より支配せらるゝが故に、その結果として極めて複雑せる關係を生ぜずんばならず、吾人の知る所は單に實際仕拂はれたる貨幣相場にして、僅かにその一部分に限りこれを統計的に捕捉し、地域的且つ時期的に比較し得るに過ぎず、凡そ相場の變動に際し吾人はその原因が商品價值の變動に在るか若しくは貨幣價值の變動に存するかを究明せんとし、而して種々の商品の相場及びこれが變動に就き比較的多數の平均統計を計量し得る限りにありても尙ほ概してその原因が果して寧ろ商品價值變動に在るべきか若しくは寧ろ貨幣價值變動に存すべきかの問題は依然として確定せられざるなり、實際上相場變動の原因を究明せんことは此の如く困難な

りと雖も、これ決して貨幣の交換價值、その原因及び變動をなるべく判然たらしむべき吾人の義務を輕減するものにあらざるなり。

貨幣の交換價值、爾他の財及び給付に對するその購買能力は、如何なる市場に於ても、相場の總現象に表示せられたる或る慣例上の程度を維持せんとし、一切の個々相場はそれ自體に變動せざらんとするの傾向あり、同一貨幣價值より支配せらるゝ一切の相場は相規定し、一切の販路關係は互に規定す、苟くも個々相場の變動はその爾他一切の相場に對する關係に影響し、而して幾多の利害を破毀せずんばならず、凡そ貨幣價值の變動は貨幣若しくは貴金屬の需給に於ける變動を原因とすべし、而かも貨幣の供給若しくは需要の變動は、既に吾人が需給の一切變動に就て觀察したるが如く、或る程度に達せざれば影響を及ぼすことなかるべし、貨幣の需給の變動は個々商品の供給變動に比すれば遙かに強大なる固執力を克ち得ざる可らず、これ實に貨幣價值が一切現在相場の調和的均勢の上に表示せらるゝが故なり、然れども凡そ貨幣の需給關係の變動が強大にして且つ持續する場合には、一般に價值が供給及び需要に依て影響を蒙

ると同一方法に依りて、相場の總現象と貨幣價值とを變動せしめずんばならず、若干の精神的要素も亦屢々この間に協働し得べく且つ協働すべし、而かも差當りの問題は貨幣の需給、その市場流通を數量現象として研究せざる可からず。こゝに市場として觀察する所のものは統一的交通及び統一的貨幣流通の領域なり、かくの如き意味の市場は嘗て小領域なりしが、今日にありては全國家、然り世界的範域に擴大せり、如何なる場合にも現今文明諸國に於ける貨幣交通及び信用交通の中心點は、貨幣及び貨幣價值に對し多少統一せる市場をなせり、貨幣價值の一地方的相異に就ては後段に説明することとし、こゝに吾人は差當りて時局的變動（地域的相異に對し）の原因を觀察せんとす。

(イ)貨幣の供給は貴金屬供給の一部分なり、何れの市場にありても鑄貨、貴金屬塊、金銀具の總額は在來的に定まれり、この在來額は年々國內の新生産若しくは商業に依りて増加し、輸出に依りて減少す、曩時の小市場領域に在りては、巨額の掠奪物若しくは鑛坑新發見はこの供給額を劇變し得たるべし、近世時代に於ては、「ソートベール」に従へば、貴金屬の在來額に對する新生産額の割合は、

年平均概して一乃至一・五プロセントに過ぎず、僅かに最近時に至りては金は約そ二プロセントに増加し、銀は二プロセント強に増加せりとなり、鑄貨の爲にする貴金屬の供給は造幣法、將た爾他の目的及び輸出に對する需要に依て定めらる、造幣法は金若しくは銀、若しくは金銀共に本位たるべきかを規定し、獨り國家のみ鑄造に當り從て需要者は國家に限るべきか、若しくは私人にも鑄造を許可すべきかを秩序す、鑄貨行政は或は定期的、從て原料金屬の相場が鑄貨率に表明せられたる價值に相當し若しくはそれ以上に出づる場合には損失を顧みずして鑄造し、(例へば金塊は獨逸に於て千三百九十五マルクに相當するか若しくはそれ以上に通用するが如し)、或はこの水準以下に在る場合(從て例へば獨逸にありては千三百九十乃至千三百九十二マルク)に限りて鑄造す、鑄造貨幣の供給は凡そこれ等の事情如何に依りて決定せらるゝものなり、然れども鑄貨行政及び鑄造銀行そのものゝ處置はこれと別に又爾他目的に對する(鑄造以外の目的に對する)貴金屬需要と輸出とに依りて規定せられずばならず、「ソエトベル」は千八百八十一年乃至千八百八十五年の間に新たに産出せる金の過半が工

業に使用せられたりと概算し、「レキシス」は最近時代に於けるその工業使用額を約そ四分の一乃至三分の一と假定せり、銀はこれよりも更に少なく、約そ五分の一に居れり、而かも金銀の全消費額は甚しく動搖し、順調年度には巨額に上り、逆調年度には斷絶す、然り凡そ違常の取引停滞時期に際しては從來道具及び裝飾品とせられたる貴金屬の變じて貨幣に鑄造せらるゝもの多し、「クリッブフェル」の千八百九十五年に於ける概算に徴すれば、歐羅巴に於て三百二十億マルクの金と同額の銀とありて、就中百六十億マルクの金が金貨として、九十億マルクの銀が銀貨として使用せらるゝのみ、爾他の額は則ち別の形式にて供用せらるゝなり、如何なる場合にも貨幣としての部分と爾他部分との供給は密接に關聯し、その全歐羅巴の供給はこの外に、主として金銀を産出する歐羅巴以外の國土が自らその幾何額を保留するか、又歐羅巴が幾何額を亞細亞に向け輸送せざる可らざるかに依て規定せらる。

然れども畢竟これ一切の數量關係を規定するものは、貴金屬の年産出總額、その生産費及びその保藏額の如何に歸す、余は「ソエトベル」、「レキシス」及び亞

米利加造幣局の調査に依りて、最も重要な統計表を掲ぐべく、第一表は千四百九十三年乃至千八百九十年の間大體の平均額をキログラムにて示し、第二表は千八百九十年乃至千九百年の間及びこれに先てる二三年度の年産出額並にその獨逸貨幣にての市場價值を示せり、これ等の統計數字は亞米利加造幣局の統計に依れるものなり、貴金屬の全保藏額に關する概算は、その銀の價值に該當せる部分は正確にあらず、そのや、舊時期に屬するものは舊銀價值にて、而して千八百九十年乃至千九百年の間に屬するものは現今の市場價值にて計算せらる、若し銀總額を現今市場價值にて概算せば、千九百年に於ける銀の總價值は約二百五十億乃至百六十億マルクに過ぎざるべし。

期 間	金産額キログラム		銀産額キログラム	
	年々	總計	年々	總計
一四九三—一六〇〇	六九七〇	一七五四八〇〇	二五〇二一六	二二八三四〇〇〇
一六〇一—一七〇〇	九一二三	九一二三〇〇	三七二三四〇	三七二三四〇〇〇
一七〇一—一八〇〇	一九〇〇一	一九〇〇〇〇〇	五七〇三四九	五七〇三四九〇〇
一八〇一—一八五〇	二三六九七	一一八四八七〇	六五四四六九	三二七二三四五〇

格 價 び 及 値 價

金銀保藏額概算

年 度	百萬キログラム		十億マルク	
	單 位	單 位	單 位	單 位
一四九三—一八五〇	一三二七三	四七五一九七〇	四一八五一〇	一四九八二六三五〇
一八五一—一五五	一九九三八八	九九六九四〇	八八六一一五	四四三〇五七五
一八五六—一六〇	二〇一七五〇	一〇〇八七五〇	九〇四九九〇	四五二四九五〇
一八六一—一六五	一八五〇三七	九二五二八五	一一〇一一五〇	五五〇五七五〇
一八六六—一七〇	一九五〇二六	九七五一一三〇	一三三九〇八五	六〇九五四二五
一八七一—一七五	一七三九〇四	八六九五二〇	一九六九四二五	九八四七一二五
一八七六—一八〇	一七二四一四	八六二〇七〇	二四五〇二五二	一二二五一二六〇
一八八一—一八五	一四九一三七	七四五六八五	二八六一七〇九	一四三〇八五四五
一八八六—一九〇	一五九三六〇	七九六八〇〇	三四五二四〇〇	一七三六二〇〇〇
一八五一—一九〇	一七九五〇四	七一八〇一八〇	一八六八一四〇	七四三二五六三〇
一四九三—一八九〇	一一九三二二五〇	一一九三二二五〇	一一九三二二五〇	一一九三二二五〇

年 度	金 産 額		銀 産 額	
	キログラム 單 位	百萬マルク 單 位	キログラム 單 位	百萬マルク 單 位
一八七三	一四四一〇〇	四〇三・一	一九七六六〇〇	三二八・五
一八七八	一七九二〇〇	四九九・九	二二八二三〇〇	三三八・二
一八八三	一四三五〇〇	四〇〇・三	二七七三三〇〇	三九五・九
一八八九	一八五八〇〇	五一八・三	三七三八六〇〇	四四九・六
一八九〇	一七八八〇〇	四九八・九	三九二一六〇〇	五二七・七
一八九一	一九六六〇〇	五四八・五	四二六六〇〇〇	五四二・〇
一八九二	二二〇九〇〇	六一六・三	四八九三〇〇〇	五三三・六
一八九三	二二六七〇〇	六六〇・三	五一六五四〇〇	五一八・二
一八九四	二七三二〇〇	七六二・二	五一二一〇〇〇	四一八・〇
一八九五	三〇一五〇〇	八四六・二	五二三四〇〇〇	四四〇・三
一八九六	三〇五七〇〇	八四九・三	四九〇八二〇〇	四四四・六
一八九七	三五六九〇〇	九九一・一	五〇一三二〇〇	四〇四・三
一八九八	四三三二〇〇	一二〇三・一	五四一三四〇〇	四二九・〇
一八九九	四六三五〇〇	一二八七・一	五二二五八〇〇	四二一・一
一九〇〇	三八四六四一	一〇七三・六	五三七七〇〇〇	四五〇・〇

五七〇

一八九〇—九九

二九六七〇〇〇

八二六三・一

四九一六二〇〇〇

四六七八・八

この生産額は金銀坑の発見とその時々に見出し採掘せる金銀坑の消盡とに繋がり、而してその時々採掘額と採掘費との割合が益々有利なるに應じて採掘せんとする發意と刺戟と愈々強烈を加ふるは明瞭なり、生産費が低廉なれば採掘額を増加し、反之則反之、その外もとより鑛山經營には富籤的利潤の影響あること屢々なれば、採掘額減少せる場合に於ても尙ほ生産は繼續せらる、大體に於て益々採掘額を増加せしめ得べきの可能は技術の進歩、殊に最近世紀に於ける技術の大進歩に俟つ、技術大に進歩すれば同一生産費若しくは生産費を減じて能く益々深く掘り下げ鑛石を採り出すことを得せしむ、銀の主要産地は今日に在りては南北亞米利加にして、この領域に於てはさながらに銀鑛床無盡藏と稱すべし、この故にこれが採掘の爲めには、一方に資本を調達し且つ企業精神を催進し、他方に此等國土に於ける交通及び政治關係を秩序して鑛山經營を攪亂せしめざることを重要となす、鑛業制度は費用決して少からざれども鑛石を

のものは最早殆んど稀少性價値を有せず、將來生産を制限するものは恐らく銀價値の下落以外にはこれなかるべし、金の生産は從來主として水力に依りて土砂の押し流され來れる低地の沖積層に於けるもの、それが爲めに偶然の發見に俟てり、これが經營に對する投資は餘り巨額には上らざりき、將來は益々鑛夫の採掘をも必要とすべし、而かも金の出づるは不規則的なるを免かれず、加之屢々金鑛床は地中餘りに深くして概してこれに到達すること能はず、この故に將來何れの日か金の生産全然竭盡することなきかの憂慮は偶然にあらざるなり、差當りはこのこと問題にあらず、金生産は千八百五十一年乃至七十五年の間に於ける劇増の後、再び四分の一の減額あり、爾來千八百八十六年より現今に及ぶまで更に再び大に増加せり、銀生産は第十九世紀の間に年々六十萬キログラムより四百萬乃至五百萬キログラムに増加したり、最近百年間に於ける生産額は一面技術的に可能なる生産費額に規定せらるゝと同時に又根本的に生産國土の新發見並にその政治的地位に俟てるものなり。

然れども時々々の生産額の多寡、その個々國土に該當する額及び貨幣として鑄

造せらるゝ額より、直に以てこれが價値を推定すること能はざるは自然なり、嘗てはかくの如き一面的方法に依りて速断せられたれどもこれ容す可からざるなり、後段直に需要の闡明に依りて認め得べきが如く、供給と共に需要を重要とし、貨幣量と共に貨幣量の機能を重要となせり。

(ロ)各國土に於て貴金屬需要を規定するものは、一、道具及び裝飾品に對するの需要、二、商品に對する仕拂に貴金屬を欲する領域との商業の爲めにする需要、三、貨幣需要そのものは是れなり、就中貨幣需要は差當り造幣法及び本位法に依りて一金屬(例へば金)若しくは兩金屬(即ち金銀)に向ひ、而して又主として貨幣經濟及び信用經濟が如何に優勢なるか、將一金屬(例へば銀)より鑄造せられたる貨幣が漸次に益々單に仕拂手段となり、且つ信用手段に依りて取て代らるゝに應じて變動す、この故にこゝに注意すべき問題は、貨幣に依て媒介せらるゝ價値移轉(讓渡)の多寡及び數量なり、貨幣の流通速度なり、この速度は公權の確立に伴て増加すれども現今文明國家にありては仕拂上の需要と市場景況とに應じて年々動搖せざるにあらず、これに次では貨幣の代用となれる信

用證券、即ち銀行券、紙幣、爲替、小切手及び帳簿書換讓渡の數量と流通速度とこれなり、仕拂手段に對する需要は貨幣經濟の發達、交通、一切の取引の増加に伴て増大す、若し貴金屬量若しくは貨幣量が十倍し、仕拂も亦十倍せりとすれば、貨幣價值は毫も變動を要せず、よし同一貨幣量なるも、これが流通劇甚なれば貨幣價值を下落せしめ、その流通緩漫なれば則ち貨幣價值を騰貴せしめ得べし、仕拂信用の發達に至りては根本的に貨幣需要を變動せしめずんばあらざるなり。

最も高級の發展を遂げたる現今文明國土にありては、銀行は貴金屬正貨及び鑄造貨を準備し、この準備額は幾分流通鑄貨の半ばに上り若しくは全くこれに匹敵し、加之幾分これに凌駕せり、この正貨準備はその額に非常の變動あるを免かれず、或る場合には永く保藏せられて何等利用せらるゝとなく、而して後忽ちに兌換せらる、この準備金はたとへ如何に必要な時と雖も直接仕拂需要には供用せられず、これを以て鑄貨は益々増加せらるゝの結果となり、非常に増加せられて而かも流通、貨幣價值及び相場はこれが爲めに何等の影響を蒙る

ことなし、信用手段は尙ほこの傾向を助長するの作用あり、ベルリン銀行組合の書換交通及び出納交通は千八百七十年の七十二億マルクより千八百七十二年の二百六十六億マルクに増加し、次で千八百七十六年に九十五億マルクに減少したり、ロンドン手形交換所に於ける清算額は、時々の欲望變動に應じて、千八百六十八年に三十四億磅、千八百七十三年に六十億磅、千八百七十九年に四十八億磅、千八百九十年に七十八億磅、而して千八百九十二年に六十四億磅に上れり、總じてこの信用交通は近時殆んど常に増加の實跡を示せり、「ユラシエック」の調査する所に依れば、最大文明國六ヶ國に於ける未償還證券及び紙幣は、千八百五十年に十四億六千百萬マルク、千八百九十年に六十七億五千百萬マルク、千八百九十三年に五十一億〇九百萬マルクに上り、尙ほ該六ヶ國に於ける比較的重要なる銀行の平均爲替額は、千八百六十八年に四十二億一千四百萬マルク、千八百八十年に六十七億七千七百萬マルク、千八百九十年に百一十一億九千六百萬マルク、千八百九十三年に百〇二億七千八百萬マルクに上れりとなり、獨逸帝國銀行に於ける書換額は千八百七十六年乃至千九百年の間に八十三億マルク

より八百十八億マルクに増加し、若し收支を合計すれば更に倍加す、如何なる場合たるを論ぜず苟くも仕拂手段が缺乏すれば通則として信用交通の増加あり、仕拂手段充溢すれば則ち信用交通は減少す、信用交通は以て貨幣價值を曩時より大體に於て恒常ならしむる所以の主要手段たり、さればとて動搖なき能はざるはもとより然り、究竟は供給及び需要の總緊張を重要となす、而して吾人はこの供給及び需要が如何なる要素より成れるかを既に觀察したり。

(二)一地方的貨幣價值は、國內的及び國際的商品交通、貨幣交通及び信用交通の増加に伴ひ曩時に比して遙かに均勢せられたれども、決して一般に同一なるにはあらず、一地方的貨幣價值の最も低きは、貴金屬の需要に比し供給の充溢せる地域、從て金生産若しくは銀生産の著大なる地方、餘剩貴金屬の輻湊地たる世界交通の中心點、今日にしてこれを觀ればニューヨーク、ロンドン、ハンブルヒの如き地域なりとす、尙ほこの二類の供給輻湊地點に近接せる周域にありても、貴金屬及び貨幣の輸送費多からざる場合には、一地方的貨幣價值は相等しきか若しくは全然同一となる、もとよりこの場合には該近接周域が中心點と

活潑なる交通關係をなせることを重要となすや論なし、若し活潑なる交通關係なければ、中心地點に於ける貴金屬の剩餘は周域の貨幣價值に影響を及ぼすと能はず、かくの如くして爾他一切の地方、國土、國際領域の一地方的貨幣價值は、その中心地點との交通が如何に親密なるか若しくは疎遠なるかに依て規定せらるるなり、彼我の交通手段益々乏しく、貴金屬剩餘國土より大に需要せらるる輸出品少なきに應じ、その國土若しくはその地方は貴金屬總額を得べきこと愈々望なし、凡そ歴史上に認めらるべき貨幣價值の下落はこの中心點より發し、愈々益々波及し而かも緩徐に進行しつゝ、周邊領域に達せり、さてこれ等の個々周邊領域に在りて重要な問題は、それが商品輸出に依りて幾何の貴金屬を輸入し得るか、而してこの貴金屬が裝飾品として鑄貨として財寶として若しくは流通手段として如何なる割合に利用せらるるか、又供給及び需要のこの總要素が如何なる關係をなせるか是れなり、大體に就てこれを觀れば經濟上の發展幼稚なる國土は悉く貨幣價值は高く、換言すれば相場は低し。

## 百八十二

④ 貨幣價值及び一般相場運動、その結果、さてこゝに貨幣價值



五七八

の歴史的及び地理學的變動を事實上に研究せんと欲せば、吾人は自然凡そ從來考量せられたる要素と原因とを詳細に確立し苟くも供給及び需要を確定せんとし努力せざる可らざらん、それにも拘らずこの變動過程は常に無限に複雑し、詳細なる點に於て到底缺陷を免かれざるべきこの資料より推理せる一切の斷案は遂に疑問ならざる能はず、されば吾人は常に研究の中心點を相場の總運動に置き、結果より以て原因を推定する方法に依らざる可らず、相場が全く一般的に騰貴し若くは下落せる場合に、吾人はこれより逆に貨幣價值に歸因せしむるの緣由を得べし、もとよりこの方法をとるも亦研究の困難は殆んど排すること能はざるなり、吾人は決して一切相場の平均を捕捉すること能はず、吾人は常に二三種若しくは數十種の平均を以て満足し、且つ事實上には意義を異にせる商品を敢て同列に取扱はんとする粗漏計算法を以て満足せざる可らず、而して先きにも觀察したるが如く、今吾人の研究に計上せられたる種類が極めて著大なる具體的商品價值變動をなし、平均は貨幣價值に依れるよりも寧ろこれが爲めに變動を蒙らざりしかは常に解決せられざる疑問ならずんばならず、この

故に此の如き相場研究の判斷に關しても亦畢竟論争の餘地ありて存すること怪むに足らざるなり。

五七九

(イ)相場の事實的歴史的總運動は貨幣價值と關聯する限り今日の知識狀態より大略下の如くこれを攝要するを得べし、古代に關する吾人の知識は極めて乏しく、從て想像以外に出づる能はず、「ボエキヤ」、「レトロンネ」、「ベシエール」、「ロドベルトッス」、其他學者の研究を基礎とし、下の如き説明を以て當らずと雖も遠からざることを得べし、曰、貨幣價值は當時一般に近世時代より根本的に高く、時と處とに從て動搖甚しかりき、伊太利及び羅馬にこれを觀るに、共和政の晩年に於て且つはネロ皇帝に及ぶまで貨幣價值は下落し、爾後再び騰貴したり、これ貴金屬生産と屬州の誅求と弛緩したればなりと、古代に於ける生産費の大なることは近世時代と同日の談にあらず、それにも拘らず裝飾品、財寶及び計算の手段としての需要は比較的大なりき、現今の如く信用を以てこれを補充する方法は未だ發達せず、貨幣價值の騰貴及び相場下落の現象は、歐羅巴に對し第八世紀乃至第九世紀に及ぶまで吾人これを假定し得べし、たゞ論争の繁か

る所はこれが程度と経過期間との點なり。  
 「ゲラルド」及び「レベル」の主張に依れば第八世紀乃至第九世紀に於ける貨幣價値は現代のそれに七倍乃至十倍し、これと等しく若しくは更に一步を進め「ミシエ」ル「シエリアエ」、レ「サッセル」其他學者の主張に従へば千五百年に於ける貨幣價値も尙現代のそれに六倍乃至十倍せりとなす、此の如きは疑もなく極端ならずんばならず、「ソエトペール」はカ「ロリ」ンガ朝に於ける貨幣價値を千七百五十年乃至千八百年のそれに四倍せりと假定せり、「ロ「シヤ」ム」及び「マンテリエ」の研究結果は千七百五十年乃至千八百五十年の相場は千二百五十六年乃至千四百年のそれに對して約そ三倍騰貴せりと説けり、「ヘルフェリッヒ」及び「ウ「イ」」は千四百五十年乃至千六百五十年の歌羅巴相場が亞米利加銀及び其他の事情の結果として一〇〇乃至一五〇プロセント騰貴せることをやゝ確實に證明したり、「デ「イ」」ネ「ル」は近時下の統計表を調製し以て佛蘭西に於ける貨幣購買力の變動を確立し得たりと信じたり、千八百九十年の購買力を一と假定せば同一貨幣額の購買力は下の如し。

格 價 び 及 値 價

一一〇一	二五	四・五
一一二六	三〇〇	四
一三〇一	五〇	三・五
一三五一	七五	三
一三七六	一四〇〇	四
一四〇一	二九	四・二五
一四三〇	一四五〇	四・五
一四五一	一五〇〇	六
一五〇一	二五	五
一五二六	五〇	四
一五五一	七五	三
一五七六	一六〇〇	二・五〇
一六〇一	二五	三
一六二六	五〇	二・五〇
一六五一	七五	二
一六七六	一七〇〇	二・三三
一七〇一	二五	二・七五
一七二六	五〇	三

一七五——七五……………二・三三  
 一七五——一七九〇……………二〇〇  
 一八九〇……………一

余はこの統計表を詳細に吟味すること能はず、則ち然りと雖も一年間即ち千八百九十年に於ける相場と長期間とを比較するは正鵠を失せり、若し千八百九年乃至九十年の貨幣購買力を一と假定せば、これに先てる統計數字は恐らく悉く遞減すべし、然れどもこれが大動搖と比較的舊時の小動搖とは何れも有益なる研究結果ならずんばならず、二者共に大體に於て爾他の研究に依りて證明せられ、主として第十五世紀に於ける一切相場の下落到於て然り、これ英蘭及び獨逸に同様の現象なりき、而して又千七百二十六年乃至五十年の低廉時代にありても然りとす。

千七百七十年乃至千八百十五年の間、全歐を通じて相場はやゝ騰貴し、爾後千八百十五年乃至三十年の間再び下落し、更に千八百五十年乃至七十五年の間二十乃至三十プロセントの騰貴あり、而して千八百七十五年乃至千九百年の間

に再び略ぼ同額の下落あり、尤も五年、十年、二十年若しくは二十五年間の平均相場を統計し、僅かに少數の商品若しくは多數の商品を計算し、僅かに大商業相場に限るか若しくは勞銀、家賃、小賣相場をも含ましむるかに従ひ、等しく出發點相場を一〇〇と假定するもそれが相場の騰貴時代なるか下落時代なるかに應じて、結果は當然區々として一律ならず、英蘭のエコノミスト(二十二種の商品に就て)統計表及びザウエルベック(四十五種の商品に就て)の統計表、並に「ラスパイレス」、「ソートペール」、「コンラード」の調製に繋れる「ハンブルグ相場表は人の熟知する所なり、エコノミスト統計表に徴すれば相場の動搖は次の如し、即ち千八百四十七年乃至五十年の間を一〇〇と假定すれば、千八百七十三年は一三三、千八百七十九年は一〇〇、千八百九十六年は九〇・八、千九百年は九七・五をなせり、若し又「ザウエルベック」の如く千八百六十八年乃至千八百七十七年の間相場の非常に騰貴せる時代を出發點としこれを一〇〇と假定すれば、千八百八十六年乃至九十五年のそれは六八、千八百九十年乃至九十九年のそれは六六、千九百年のそれは七五となる、更に千八百二十一年乃至三十年の間相場の違常

に下落せる時代を基底とすれば、千八百九十一年乃至九十五年のそれにて一〇〇以上となる、例へばプロイセンに於けるライ麥の相場は一二五なりしが如し、尙ほ又コンラードに依り千八百四十七年乃至六十一一年のハンブルグ相場を一〇〇とすれば、千八百七十一年乃至八十年のそれは一〇五、千八百八十一年乃至八十五年のそれは八五、千八百八十六年乃至九十年のそれは七〇、千八百九十一年乃至九十五年のそれは七一、千八百九十九年のそれは六七となる。かくの如く吾人の確定し得る所は個々の商品若しくは商品群の相場運動なり、この相場運動が一切商品に對し如何なる程度まで眞理なるか、且つ又吾人が貨幣價值運動と商品價值運動とを如何なる範圍まで闡明し得るかは到底以て不確實なるを免かれざるなり、上掲千二百年を出發點となせる統計表を閲するに、その著大なる相場變動は一としてこれに計上せられたる最も重要な財の生産費及び運搬費、需要及び供給の變動を以て多少に拘らず原因となさざるものはあらず、この故に單にこれを貨幣價值の變動として表示するは苟くも誇張なるべきなり、原因を辿らば千七百二十六年乃至五十年の低廉相場は恐らく主として

て豊年の一系列に坐すべく、千七百七十年より千八百十五年に至るまでの騰貴相場は主として戦争時代に因し、千八百五十年乃至七十五年の騰貴は先例なき取引の隆昌に基し、千八百七十五年乃至千九百年の下落は主として若しくは大部分恐らく技術及び交通の進歩に依り即ちこれが爲めに幾多生産部門が通常の發展をなしたることに歸すべし、若しそれ供給及び需要の作用法に關し且つ群衆心理學的要素の影響に關する吾人の論述に依據せんか、以て何人と雖も次の事項を認むるに躊躇せざるべし、曰、貨幣及び鑄貨の準備額が同一の増加をなし若しくは減少を來す場合にも、その當時に於ける一般的相場水準の固執力如何に依り將たこれに協働する一般的取引思潮が樂觀主義的なるか若しくは悲觀主義的なるかに應じて、結果に比較的差別あり得べしと、歐洲國民經濟の狀態は千八百十五年乃至四十年の間には寧ろ相場の上落を促し、千八百五十年は千八百七十五年までは寧ろ相場の上落を促し、貴金屬の生産、貨幣の供給はこの兩運動に應じこれを助勢せり、千八百五十年乃至七十五年の騰貴は貨幣供給の増加なかりせば恐らく彼の如く著しからざりしなるべし、交通の大進歩